

2024 年度 早稲田大学卒業生調査
報告書

2025 年 8 月

早稲田大学 大学総合研究センター

研究倫理番号 2021-366

全体要旨

本報告書は、大学総合研究センターが実施した早稲田大学卒業生調査（第7回）の結果概要を示すものである。第7回調査では、2011年度に本学学部に入学者を卒業生、および本学以外の学部を卒業して2015年度に早稲田大学大学院（修士課程）に入学者を卒業生を対象として実施した。調査は、2024年の8月から9月にかけて11,023名を対象として行い、1,408件の回答を得た（回収率12.8%）。

本調査では、他大学から早稲田大学大学院（修士課程）に入学者にまで対象を広げたことで、早稲田大学に学部から入った卒業生と、他大学で学部時代を過ごした卒業生の学修経験などの比較が可能となった。本報告書では、学部や修士課程が、本学か他大学かによってタイプ分けをして比較することで、早稲田大学における学びの特徴の一端を明らかにすることを試みた。この新しい取り組みによって、本学における教育のさらなる質向上に資する新たな知見を示すことができたと考えている。各章の概要は以下のとおりである。

第1章 調査概要と対象について

今回の調査の概要について述べるとともに、調査対象者の在学時の学修・生活環境について確認した。

第2章 留学経験と学修経験：4タイプ別の分析

卒業した学部や修士課程が、本学か他大学かによって卒業生をタイプ分けし、4つのタイプ（早大学部、早大学部・早大大学院、早大学部・他大大学院、他大学部・早大大学院）間の留学経験について比較した。その結果、早大学部・早大大学院の卒業生では留学経験者の割合が低いことが明らかになった。また、その背後にある要因について検討を行った。

第3章 学修経験と学修成果の推移：2007-2011年度入学者を対象とした分析

2007年度から2011年度の学部入学者を対象として、学修経験、学修成果の5年間の推移を確認した。その結果、2010年度の入学者からアクティブ・ラーニング経験に増加傾向がみられた。卒業後約10年を経た卒業生であっても、大学でのアクティブ・ラーニング経験について認識していることが示唆された（図-全体要旨-1）。さらに、学修成果の推移についても比較分析を行った。

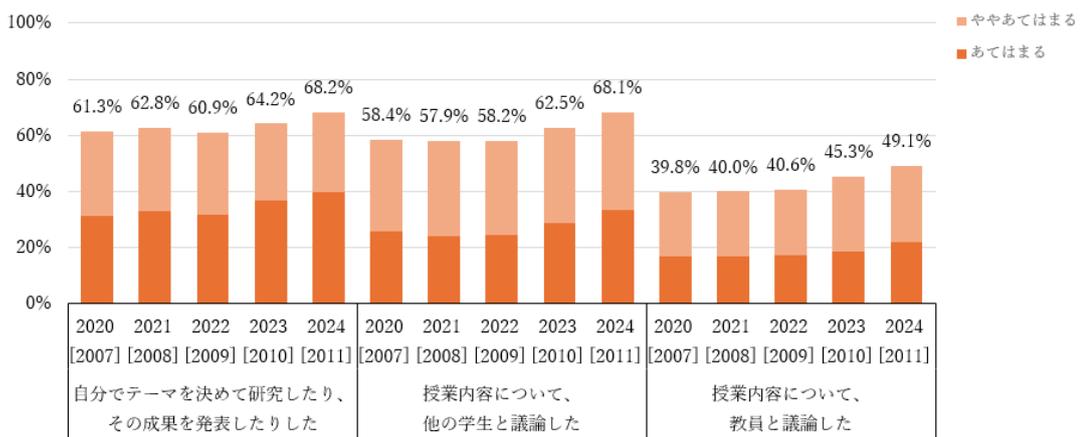


図-全体要旨-1 学修経験（アクティブ・ラーニング）

第4章 学部学修経験の現在の仕事への役立ち度の分析

学部での学修経験（一般科目、専門科目、ゼミ・研究室）の現在の仕事への役立ち度の項目に対する、入学時、在学時、卒業時、卒業後（現在）に関する項目からの影響を、階層的重回帰分析を用いて分析した。

目次

第1章 調査概要と対象について	p.3
1-1. 調査概要	p.3
1-2. 調査対象者の在学時の学修・生活環境	p.4
第2章 留学経験と学修経験：学生タイプ別の分析	p.6
2-1. 本章の目的	p.6
2-2. 分析対象・分析方法	p.6
2-3. 学部卒、大学院卒など4タイプの留学経験	p.7
2-4. 4タイプの活動や学修経験の比較	p.8
2-5. 本学の学修環境をうまく利用する学生	p.10
2-6. まとめ	p.12
第3章 学修経験と学修成果の推移：2007-2011年度入学者を対象とした分析	p.13
3-1. 本章の目的	p.13
3-2. 分析対象・分析方法	p.13
3-3. 学修経験の5年間の推移	p.14
3-4. 学修成果の5年間の推移	p.16
3-5. まとめ	p.19
第4章 学部学修経験の現在の仕事への役立ち度の分析	p.21
4-1. 本章の目的	p.21
4-2. 変数の整理と分析方法	p.21
4-3. 「専門科目」の現在の仕事への役立ち度	p.22
4-4. 「一般科目」の現在の仕事への役立ち度	p.24
4-5. 「ゼミ・研究室」の現在の仕事への役立ち度	p.25
4-6. まとめ	p.27
4-7. 資料	p.29
付録 全体の集計データ	p.32

第1章 調査概要と対象について

大学総合研究センターは、2018年度から学部卒業後10年時点の卒業生に対して、早稲田大学の教育改善の一環として客観的データを得るために卒業生調査を実施してきた。2024年度の第7回調査では、本学学部を卒業した者だけでなく、他学部を卒業して早稲田大学大学院（修士課程）に入学した卒業生を新しく調査対象に加えた。このように調査対象を拡大することによって、本学の教育や学びの特徴を示すことを試みた。

本調査は大学総合研究センターが実施し、データ分析・報告書執筆については、同センター武藤浩子が第1章、第2章、第3章を担当し、第4章は同センター山田寛邦が担当し、学生スタッフ川又亮が分析等補助を担当し、付録作成・報告書編集補助を学生スタッフ中野寧朗が担当した。

1-1. 調査概要

本調査では、2011年度に本学学部に入学者とともに、他大学の学部を卒業して2015年度に早稲田大学大学院（修士課程）に入学した卒業生についても新しく調査対象とした。そのため送付数が昨年度より1,000以上増えている。また調査時期については、年末から、夏（8月、9月）へと変更した。回収率については、昨年度とほぼ同様となった。

対象者：2011年度学部入学者、および2015年度大学院（修士課程）入学者

（昨年度：2010年度学部入学者）

調査時期：2024年8月6日～2024年9月16日

（昨年度：2023年12月25日～2024年1月22日）

調査方法：①ウェブ回答URLを登録されたメールアドレスに送付

②ウェブ回答URLが印刷されたダイレクトメールの郵送

（昨年度：上記と同じ）

送付数：11,023（昨年度：9,897）

回答数：1,408（昨年度：1,292）

回答率：12.8%（昨年度：13.0%）

本調査に協力いただいた卒業生の皆様に感謝を申し上げたい。

次の図1-1では、学部入学者の母集団と回答者の卒業学部を示した。なお大学院入学者については対象者が少ないこともあり示していない。このグラフからは、国際教養学部卒や創造理工学部卒の回答者がやや少ない一方、教育学部卒の回答者がやや多いことがわかる。しかし回答者が極端に多い、もしくは少ない学部はなかった。

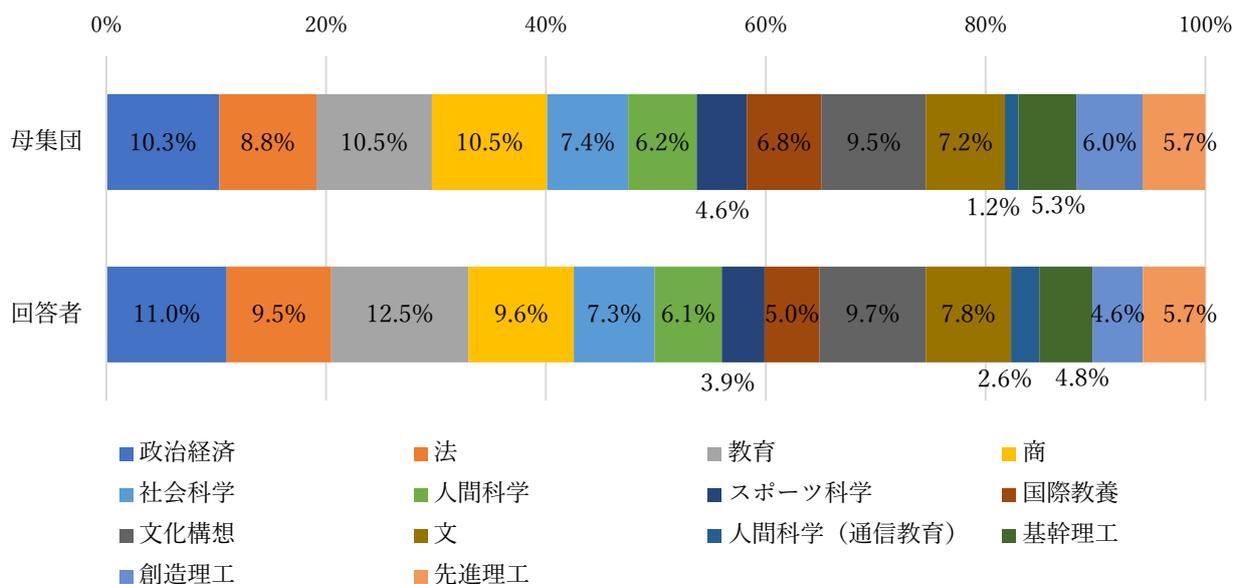


図 1-1 母集団と回答者の割合 (学部入学者)

1-2. 調査対象者の在学時の学修・生活環境

2011 年度学部入学生の在学時の学修・生活環境について確認しておこう。表 1-1 では、2011 年度から 2014 年度の比較的大きな出来事について早稲田大学、高等教育政策、社会の 3つのカテゴリーごとに記載した。

表 1-1 2024 年度 卒業生調査対象者 (学部入学者) の在学時のおもな出来事

	早稲田大学	高等教育政策	社会
2011 年 4 月/9 月	<ul style="list-style-type: none"> 入学 (入学式中止) 東日本大震災復興支援室設置 被災学生の就学支援、被災地域支援、研究を通じた復興支援を展開 グリーン・コンピューティング・システム研究開発センター (40 号館) を開所 		<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災 (2011 年 3 月)
2012 年	<ul style="list-style-type: none"> 中長期計画 Waseda Vision 150 を発表 	<ul style="list-style-type: none"> 中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(質的転換答申) 	<ul style="list-style-type: none"> 政権交代 (安倍政権)
2013 年	<ul style="list-style-type: none"> グローバルエデュケーションセンター (GEC) 設置 大学院国際コミュニケーション研究科設置 	<ul style="list-style-type: none"> 中教審答申「新し時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」 	
2014 年	<ul style="list-style-type: none"> 大学総合研究センター設置 3 号館竣工 		
2015 年 3 月/9 月	<ul style="list-style-type: none"> 標準年限卒業 		

まず、学部入学者が本学に入学する直前の3月に、東日本大震災が発生したことが大きな社会的な出来事としてあげられる。これにより、2011年度の早稲田大学の入学式は中止となった。

また2012年には、早稲田大学の創立150周年に向けた中長期計画 Waseda Vision 150 が発表された。Waseda Vision 150 では4つの Vision が示され、そのなかで全員留学を目指す海外留学促進についてもうたわれた。

2013年にはグローバルエデュケーションセンター（GEC）が設置され、大学院国際コミュニケーション研究科が設置された。2014年には、IR や FD など担当する大学総合研究センターが設置された。さらに同年には新しい学舎として3号館が竣工した。この3号館は、政治経済学部などが利用しており、アクティブ・ラーニングを目的とした教室（CTLT 教室）も設置されている。

高等教育政策に目を向けると、2012年にはいわゆる質的転換答申が中央教育審議会から示された。これにより学修者を中心とした教育、アクティブ・ラーニングがさらに推進されたといえるだろう。

このように2011年度の学部入学者は、入学時に東日本大震災の影響を受けるとともに、海外留学が促される環境におり、大学の授業においてはアクティブ・ラーニングを経験するようになったものと推測される。また、グローバルエデュケーションセンター（GEC）設置によって、学生にとっては対面だけでなくオンラインも活用した多様な形式の授業の履修が可能となったと考えられる。

第2章 留学経験と学修経験：学生タイプ別の分析

2-1. 本章の目的

本学は Waseda Vision 150 の核心戦略「グローバルリーダー育成のための教育体系の再構築」を前提として、2032年度までに「全員留学」の実現を目指している。では、早稲田大学で学生時代を過ごした卒業生は、どれくらい海外留学を経験していたのだろうか。また大学での教育段階（学部、大学院）によって、留学経験や学修経験に違いはあるのだろうか。

本章は、卒業生の教育段階（学部、大学院）と、所属していた大学・大学院に着目し、留学経験や学修経験の異同について検討することを目的とする。具体的には、卒業生を4つのタイプ（早大法学部、早大法学部・早大大学院、早大法学部・他大大学院、他大法学部・早大大学院）に分けて、留学経験や学修経験について比較分析を行う。

2-2. 分析対象・分析方法

今回の調査では、2011年度に本学法学部に入学した卒業生とともに、他大学の法学部を卒業して2015年度に早稲田大学大学院（修士課程）に入学した卒業生も調査対象者とした。そこで卒業生の教育段階（学部、大学院修士課程、大学院博士課程）と、所属した大学、大学院に着目して、回答者を10のタイプに分類した。

本章ではそのなかから、ある程度の回答者数がいた4つのタイプ（早大法学部、早大法学部・早大大学院、早大法学部・他大大学院、他大法学部・早大大学院）の卒業生を対象として比較分析を行う。それぞれのタイプの人数は表2-1の通りである。早大大学院とは修士課程を修了した卒業生であり、博士課程修了者は含んでいない。また、それぞれのタイプを分かりやすく示すために、早大法学部は（w）、早大法学部・早大大学院は（ww）、早大法学部・他大大学院は（wo）、他大法学部・早大大学院は（ow）を付加して示すこととする。

表2-1 4つのタイプ

タイプ	人数
早大法学部 (w)	889
早大法学部・早大大学院 (ww)	180
早大法学部・他大大学院 (wo)	41
他大法学部・早大大学院 (ow)	75

本章では、まずこれらの4つのタイプで、海外留学経験に違いがあるのか確認する。次に、4つのタイプの学修経験について比較検討していく。

2-3. 学部卒、大学院卒など4タイプの留学経験

学部での留学経験について、4タイプ別に示したのが図2-1である。これをみると早大学部・早大大学院（ww）では留学経験者の割合がいちじるしく低いことがわかる。早大学部（w）は約25%、早大学部・他大大学院（wo）は約34%、他大学部・早大大学院（ow）は約25%が留学していた一方、早大学部・早大大学院（ww）の留学経験者は約8%に留まった。

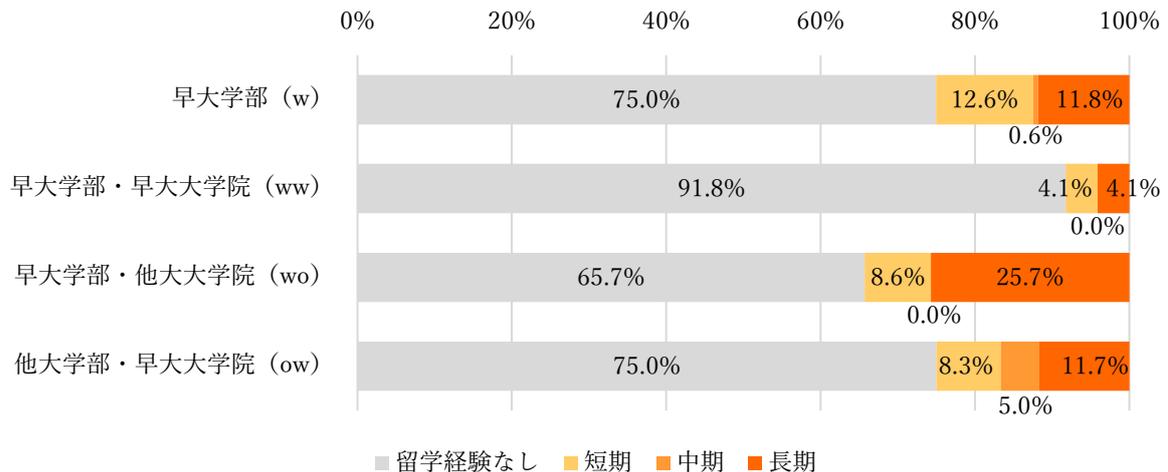


図2-1 学部での留学経験

しかし本学学部から本学大学院に進学したwwの卒業生は、学部のとときに大学院での留学を視野に入れていて、そのため学部での海外留学が少なくなったということも考えられる。そこで、大学院での留学経験について、早大学部・早大大学院（ww）、早大学部・他大大学院（wo）、他大学部・早大大学院（ow）で確認した（図2-2）。

これをみると大学院でも、早大学部・早大大学院（ww）において留学経験者の割合は低い。具体的には、早大学部・他大大学院（wo）は約32%、他大学部・早大大学院（ow）は約19%が大学院のとときに留学を経験していた一方、早大学部・早大大学院（ww）で留学したのは5.6%程度にとどまっている。

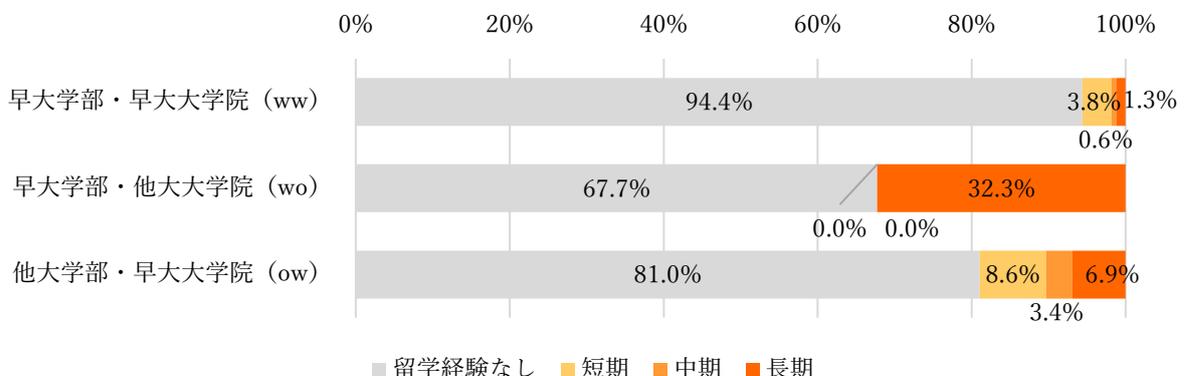


図2-2 大学院での留学経験

このように早稲田大学で学部・大学院を過ごした卒業生は、学部でも大学院でも留学を経験した者の割合は低い。学部においても大学院においても、早大学部・早大大学院（ww）と他のタイプでは、留学経験者の割合の差は明らかといえるだろう。

2-4. 4タイプの活動や学修経験の比較

ここまで、早大学部・早大大学院（ww）の卒業生では、留学経験者の割合が低いことを示してきた。では、この4タイプの卒業生には、留学以外の活動や学修経験にも、なんらかの違いがあるのだろうか。早大学部・早大大学院（ww）に着目しながら比較を行うこととする。

まず4タイプの卒業生が、どのような活動に熱心に取り組んできたのか確認しよう。本調査では、学部のとときの各種活動の熱心さについて14の項目について尋ねたが、ここではある程度の差がみられた「学修活動」に関する4項目（図2-3）と「課外活動」に関する4項目（図2-4）を取り上げて示す。

学修活動への熱心さ

まず図2-3の「専門科目」をみると、「熱心」「やや熱心」答えた者の割合が、早大学部・他大大学院（wo）で91.4%、早大学部・早大大学院（ww）で86.3%となっており、これらの卒業生は「専門科目」に熱心に取り組んでいたことがわかる。次に高いのは他大学部・早大大学院（ow）であり、大学院進学者は「専門科目」に熱心に取り組んでいたといえるだろう。「一般教育」については、早大学部・他大大学院（wo）が74.3%と他のタイプに比べて10ポイント以上高い値であったが、大学院進学者の特徴はそれほど明確ではない。

次に「ゼミ・研究室」をみると、早大学部・早大大学院（ww）では、「ゼミ・研究室」に熱心だった者が91.8%ともっとも高い。「卒業論文作成」をみると、これも早大学部・早大大学院（ww）において、「卒業論文作成」に熱心だった者が90.1%ともっとも高くなっている。早大学部・早大大学院（ww）は、ゼミ・研究室活動に熱心だけでなく、卒業論文についても熱心に取り組んでいたと考えられる。

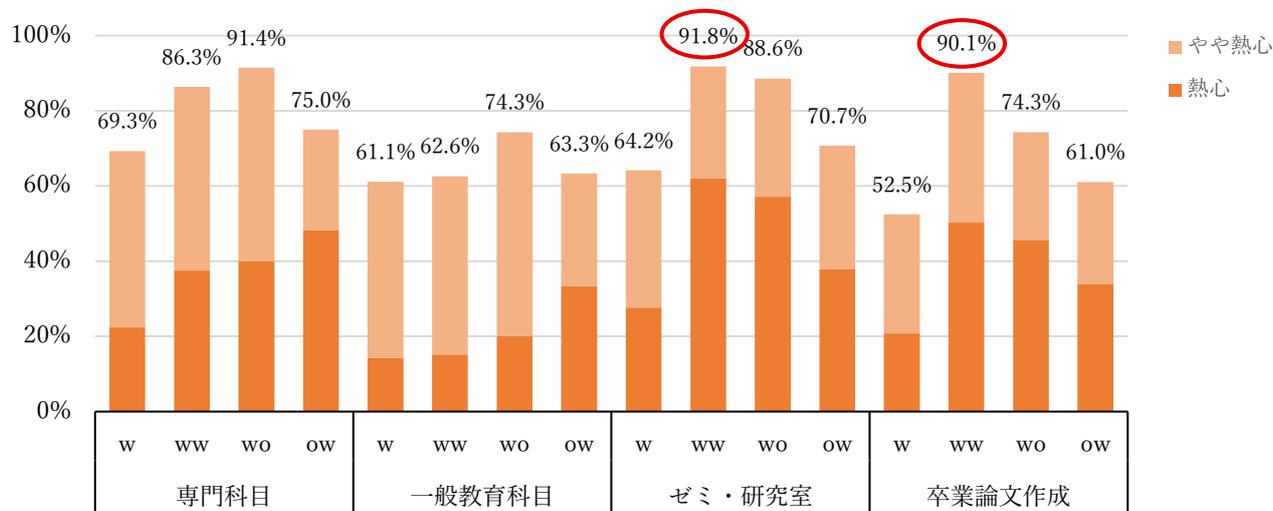


図2-3 学修活動への熱心さ

課外活動への熱心さ

次に図2-4で課外活動への熱心さについてみてみよう。早大学部・早大大学院（ww）に着目すると、「部活動、サークル活動」「大学関係の活動（学園祭など）」、さらに「学外アルバイト」については、目立った傾向はみられない。しかしながら、「学内アルバイト（TA など）」については、他のタイプと比較して熱心に取り組んでいた者が多いことがわかる。他のタイプが13～28%程度であるのに比べて、早大学部・早大大学院（ww）では、41.8%と高い値になっている。早大学部・早大大学院（ww）は、「学内アルバイト（TA など）」という学内の仕事に関わる活動について、他のタイプと比較しても熱心であったといえるだろう。

この「学内アルバイト（TA など）」には、TA 以外に、研究補助、入試監督、PC ルーム管理、図書貸出、キャンパスツアーガイドを含むことが例示されている。早大学部・早大大学院（ww）の卒業生は、この「学内アルバイト（TA など）」を通して、本学の教員や職員との関係や結びつきが強くなったことも推測される。

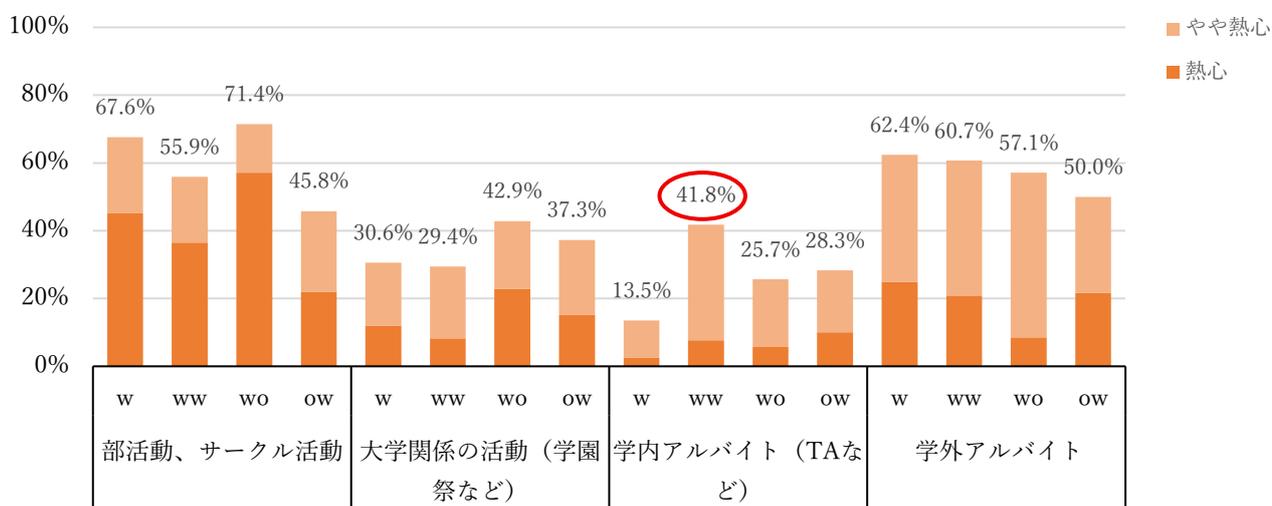


図2-4 課外活動への熱心さ

学修経験

次に学部での学修経験についてもみてみよう（図2-5）。学修経験については「図書館を利用した」や「読書をした」など10項目について尋ねたが、ここでは4タイプで差異がみられた3つの項目を取り上げて示した。

図2-5をみると、早大学部・早大大学院（ww）は、他の大学院進学者（wo、ow）と比べて、「授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）」、「語学の授業以外で、外国語で議論や発表した」、「留学生と一緒に学んだ」という経験をした者の割合が少ないことがわかる。とくに「授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）」については、他の大学院進学者よりも少ないだけでなく、早大学部（w）よりもやや少ない。

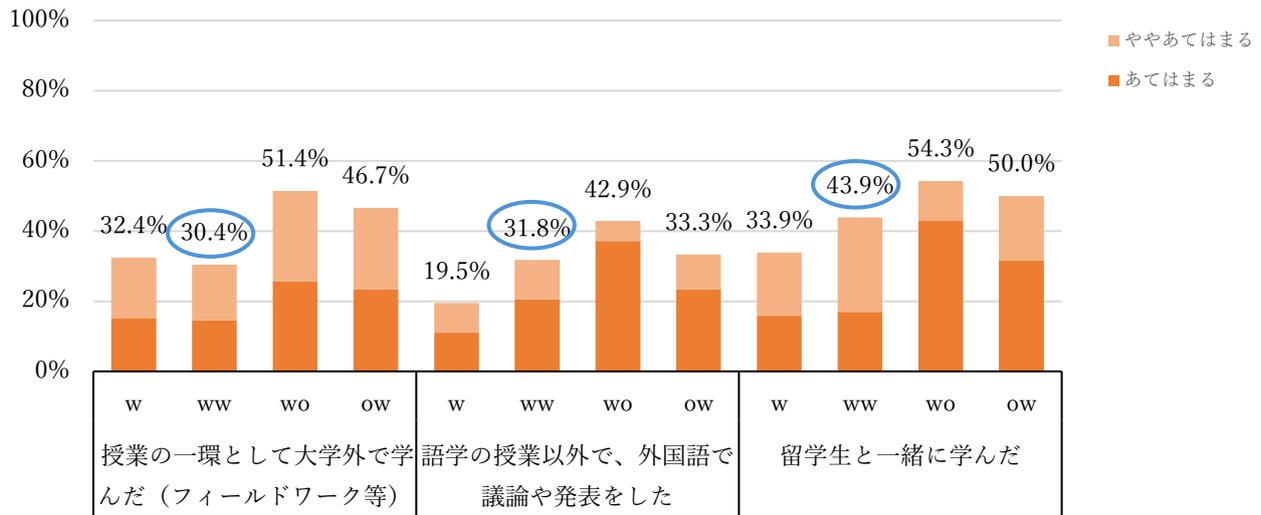


図 2-5 学修経験

この結果からは、早大学部・早大大学院 (ww) の卒業生は、授業の一貫として大学外で学んだ経験や、外国語での議論や発表経験、また留学生と共に学ぶという経験については、他のタイプと比べて少なかったという様相が浮かび上がってくる。

図 2-3 と図 2-4 の結果も併せて考えると、早大学部・早大大学院 (ww) は、早稲田大学内での学びや活動 (「ゼミ・研究室」「卒業論文作成」や「学内アルバイト (TA など) 」) については熱心に取り組んでいたものの、授業の一環として大学外で学ぶことが少ないといえそうである。ここから早大学部・早大大学院 (ww) の卒業生が早稲田大学内での活動や学びを志向する傾向をみることもできる。

このような早大学部・早大大学院 (ww) の傾向が、学部や大学院での留学経験を減じさせるように機能したということも考えられるだろう。

2-5. 本学の学修環境をうまく利用する学生

ここまでの比較から、早大学部・早大大学院 (ww) の卒業生は、早稲田大学内での学びや活動を志向する傾向があることが示唆された。ここで調査データからは離れて、本学の特徴についていまいちど考えてみたい。早稲田大学は大規模大学であり、国内外の認知度も高いといえるだろう。また 2012 年には早稲田大学創立 150 周年に向けた中長期計画 Waseda Vision 150 が発表され、グローバルリーダーの育成をひとつの柱とし、外国語の修得にも力を入れている。学生には海外留学を勧めるとともに、学内でも外国語の修得ができるような学修環境を整えているといえる。また海外からの留学生が多いという特徴もある。

図 2-5 では、早大学部・早大大学院 (ww) の卒業生において、「語学の授業以外で、外国語で議論や発表した」、「留学生と一緒に学んだ」という経験をした者が少ないことが示された。これはそもそも早大学部・早大大学院 (ww) では、海外留学をした者の割合が低く、そのため留学先の大学で「語学の授業以外で、外国語で議論や発表した」、「留学生と一緒に学んだ」という経験をするのが少なかったことを反映しているとも考えられる。

では、留学経験のない卒業生のみで比較すると、どのような様相がみえてくるのだろうか。

図2-6は、学部で留学経験のない卒業生のみを対象として、図2-5と同じ項目について4タイプの比較をしたものである。まず、「授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）」については、図2-5と同様の傾向が示された。しかしながら、「語学の授業以外で、外国語で議論や発表した」、「留学生と一緒に学んだ」では、図2-5とは異なる傾向が示された。

留学を経験していない者のみに限定すると、早大学部・早大大学院（ww）以外の3タイプでは、「語学の授業以外で、外国語で議論や発表した」という者の割合が減じている。早大学部（w）は、図2-5では19.5%であったが、図2-6では10.7%となっている（19.5%→10.7%）。同様に早大学部・他大大学院（wo）は42.9%→30.4%、他大学部・早大大学院（ow）は33.3%→24.4%であった。他方、早大学部・早大大学院（ww）は、31.8%→32.3%とほぼ同じ値となっている。

「留学生と一緒に学んだ」についても、早大学部（w）は、33.9%→25.1%、早大学部・他大大学院（wo）は54.3%→34.8%、他大学部・早大大学院（ow）は50.0%→37.8%と、8~20ポイント程度下がっている。他方、早大学部・早大大学院（ww）は、43.9%→41.0%とほぼ同じ値であった。また、早大学部・早大大学院（ww）は、4タイプのなかで「語学の授業以外で、外国語で議論や発表した」、「留学生と一緒に学んだ」の割合がもっとも多くなっている。

これらの結果からは、留学経験のない者に限定すると、早大学部・早大大学院（ww）の卒業生は、早稲田大学の学修環境を生かして、授業において外国語で議論や発表をしたり、留学生と一緒に学んだりという経験を積み重ねていたと推測される。

卒業生だけでなく、いまの学生であっても何らかの理由で留学へと踏み出せない者がいると考えられる。そのようななか、授業において外国語で議論・発表をしたり、留学生とともに学んだりという環境を、大学として積極的に提供していくことも必要ではないかと考える。

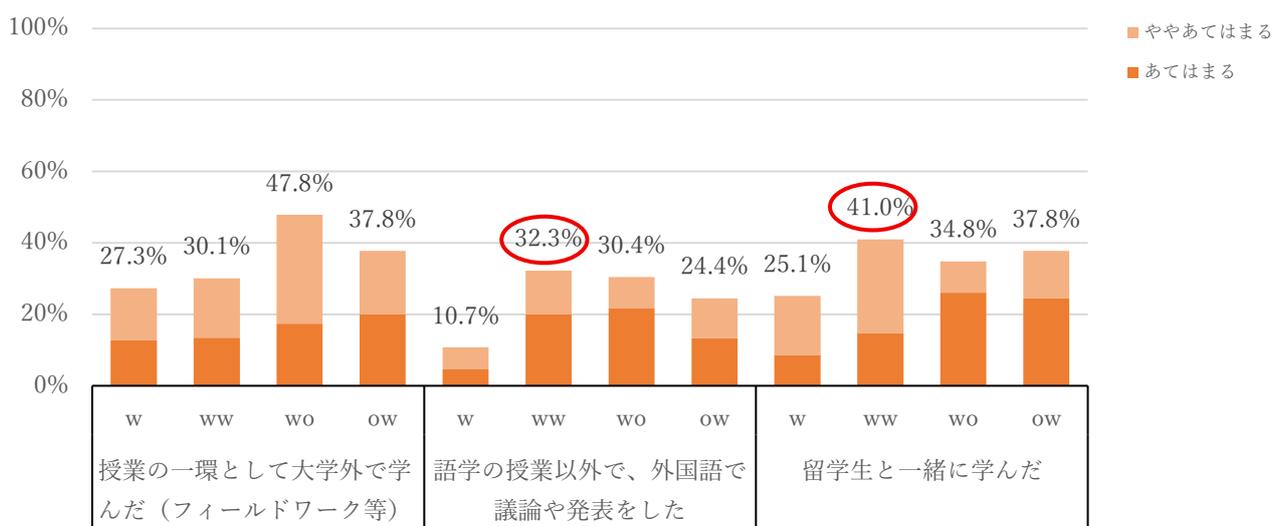


図2-6 学修経験（留学経験のない者のみ）

2-6. まとめ

本章では、卒業生を教育段階（学部、大学院修士課程）と、所属した大学、大学院に着目して分類し、4つのタイプ（早大工学部、早大工学部・早大大学院、早大工学部・他大大学院、他大工学部・早大大学院）で、留学経験や各種活動への熱心さ、学修経験について比較を行った。

その結果、早稲田大学で学部・大学院を過ごした卒業生（ww）は、学部においても大学院においても留学経験者の割合が低いことが明らかになった。

さらに、学修活動や課外活動の熱心さについて比較したところ、早大工学部・早大大学院（ww）は、ゼミ・研究室活動に熱心であり、卒業論文作成にも熱心に取り組んでいたことが示された。さらに早稲田大学内の「学内アルバイト（TA など）」には、他のタイプと比較して熱心に取り組んでいた者が多いことが示唆された。

学修経験については、早大工学部・早大大学院（ww）の卒業生は、授業の一貫として大学外で学んだ経験が他のタイプと比べて少なかった。また、外国語での議論や発表経験、また留学生と共に学ぶという経験も少なかった。4タイプの比較からは、早大工学部・早大大学院（ww）の卒業生が、早稲田大学内での活動や学びを志向する傾向をみることもできる。

しかし、海外留学経験者であれば、留学先の大学で「語学の授業以外で、外国語で議論や発表した」、「留学生と一緒に学んだ」という経験をしていたと考えられる。そのため留学経験者が少ない早大工学部・早大大学院（ww）では、外国語での議論や発表、留学生と共に学ぶという経験が少ないという結果として示されたのではないかと考えられた。

そこで留学経験のない者のみに限定して比較したところ、早大工学部・早大大学院（ww）は、4タイプのなかで「語学の授業以外で、外国語で議論や発表した」、「留学生と一緒に学んだ」の割合がもっとも多いことが示された。早大工学部・早大大学院（ww）の卒業生は、留学経験がなくとも、早稲田大学の学修環境を生かして、外国語で議論や発表をしたり、留学生と一緒に学んだりという経験をしていたことが推測された。

本章で示した本学卒業生に見られる上記のような傾向は、いまの学生においてもみられるのか、改めて確認する必要がある。本学で全員留学を目指して海外留学を促進するにあたっては、本学学部から本学大学院への進学を希望する学生、またゼミ・研究室での活動や卒業論文作成に熱心な学生、また TA などの学内バイトに熱心に取り組む学生に対して、より積極的に大学外での学びを促したり、学部や大学院での留学を勧めたりすることも必要なのではないだろうか。

第3章 学修経験と学修成果の推移：2007-2011年度入学者を対象とした分析

3-1. 本章の目的

2012年のいわゆる質的転換答申によって、各大学においてアクティブ・ラーニングの導入が推進されたと考えられる。今回の調査では、2011年度に本学学部に入学者を対象としており、これらの卒業生は、アクティブ・ラーニング導入初期に大学生活を過ごしたといえるだろう。しかし、卒業生にとって大学でのアクティブ・ラーニング経験は、それほど明確に意識されるものなのだろうか。また、学修成果については、何らかの変化はみられるものなのだろうか。

そこで本章では、2020年度から2024年度の5年間の卒業生調査を用いて、2007年度、2008年度、2009年度、2010年度、2011年度に本学学部に入学者を対象として、学修経験および学修成果の推移について比較分析した結果を示す。

3-2. 分析対象・分析方法

分析対象とする2020年度から2024年度の各卒業生調査の概要を表3-1に示す。本章では、学部での学修経験や学修成果を対象として分析するために、2024年度調査から本学学部卒業生を抽出して分析対象とした。

入学から卒業までの標準年限を4年とすると、2011年度学部入学者であれば、2011年度から2014年度までを本学学部で過ごしたことになる。

表3-1 各卒業生調査の概要

調査年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
対象者	2007年度学部入学者	2008年度学部入学者	2009年度学部入学者	2010年度学部入学者	2011年度学部入学者
調査時期	2020年12月26日～2021年2月10日	2021年12月25日～2022年1月31日	2022年12月22日～2023年1月23日	2023年12月25日～2024年1月22日	2024年8月6日～2024年9月16日
対象者数	8,762	9,807	9,848	9,897	9,761
回答者数	1,350	1,013	970	1,292	1,159
回収率	15.4%	10.3%	9.8%	13.0%	11.8%

次節より、本学学部での学修経験や学修経験の5年間の推移を示していく。本調査では、学修経験や学修成果について4件法で尋ねている。そこで肯定的な回答（たとえば、「ややあてはまる」、「あてはまる」）の割合をグラフで示すとともに、肯定的な回答の割合を加算した値をラベルで示すこととした。

3-3. 学修経験の5年間の推移

2010年頃に本学学部に入学者は、どのような学修経験をしてきたのだろうか、また2012年の質的転換答申前後では、本学での学修経験に何らかの変化は見られるのだろうか。2007年度から2011年度の入学者を対象として5年間の推移について確認していこう。

図3-1などのグラフでは、調査年とともに、調査対象者の入学年を〔 〕で示している。たとえば、2020〔2007〕は、2020年調査の結果であり、対象とした卒業生の学部入学は2007年であったことを意味している。今回の調査対象者である2024〔2011〕の卒業生は、大学2年生のときに、いわゆる質的転換答申が示されたことから、本学における学修経験もその影響を受けたものと推察される。本節では、まず学修経験について、次に学修成果について、5年間の推移を示すこととしよう。

学修経験の変化①ーアクティブ・ラーニング

講義型授業以外のアクティブ・ラーニング経験（「自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした」「授業内容について、他の学生と議論した」「授業内容について、教員と議論した」）の推移を示したのが図3-1である。

この3項目のいずれにおいても増加傾向がみられた。まず、「自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした」については、2010年度入学者で増加傾向に転じ、2011年度入学者ではさらに増加していた（2009年60.9% → 2010年64.2% → 2011年68.2%）。

「授業内容について、他の学生と議論した」についても、2010年度入学者から増加傾向が見られ、2011年度入学者では、さらにその割合が増えていた（2009年58.2% → 2010年62.5% → 2011年68.1%）。

「授業内容について、教員と議論した」についても、2010年度入学者から増加傾向が見られ、2011年度入学者ではさらに増加していた（2009年40.6% → 2010年45.3% → 2011年49.1%）。

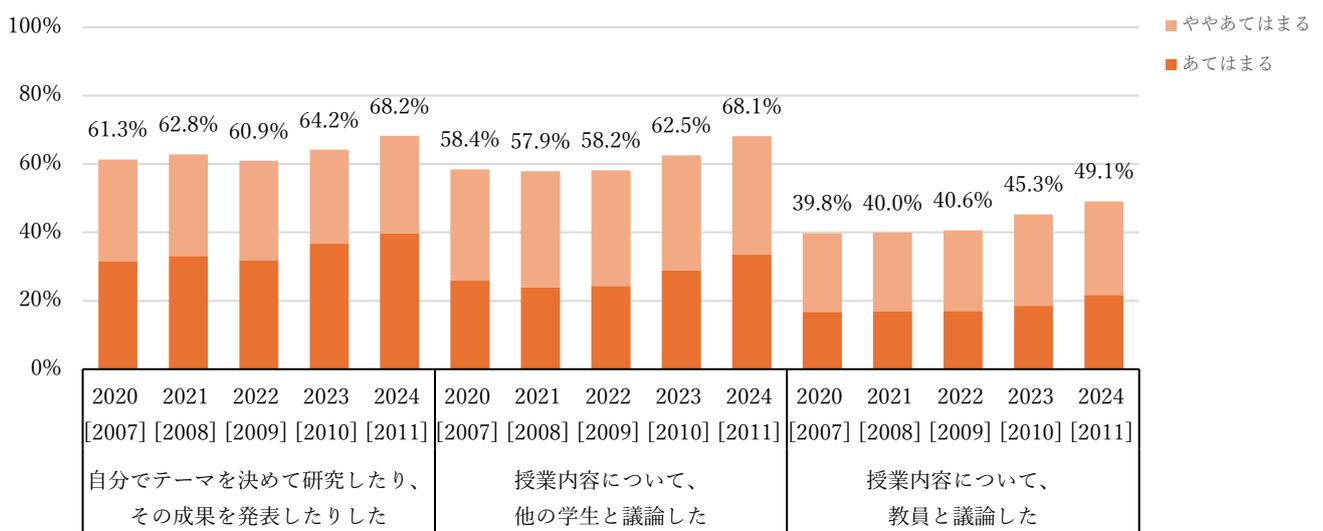


図 3-1 学修経験（アクティブ・ラーニング）

このように質的転換答申が示された 2012 年前後から、本学では、授業で学生が発表をしたり、授業のなかで他学生や教員と議論をしたりといったアクティブ・ラーニング経験を増やしており、その経験をした学生は、学部を卒業して約 10 年を経たのちであっても、その経験についてきちんと認識していたことがうかがえる。

学修経験の変化②—多様な他者との学び

次に、外国語での議論・発表や、留学生との学びなどに着目してその推移をみてみよう。なお、これらの学修経験については「多様な他者との学び」としてまとめておく。

図 3-2 をみると、前述の図 3-1 と比べて、肯定的に答えた回答者の割合が低いことがみてとれる。「語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした」については、2010 年度入学者でやや増加傾向がみられるが、2011 年度入学者ではそれほど大きな変化はない。また、「留学生と一緒に学んだ」は、2010 年度入学者で増加傾向がみられ、2011 年度入学者ではやや減少していた。しかし、2007 年度入学者から 2011 年度入学者までの傾向をみると、「語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした」も、「留学生と一緒に学んだ」とも増加傾向にあるようである。

他方、「授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）」については、2010 年度入学者でやや増加傾向がみられたが、2011 年度入学者はやや減少しており、明確な増加傾向はみられなかった。

このように外国語での議論・発表や、留学生との学びについては、やや増加傾向が認められたものの、授業の一環として「大学外で学ぶこと」についてはそれほど明確な変化はなかったといえるだろう。

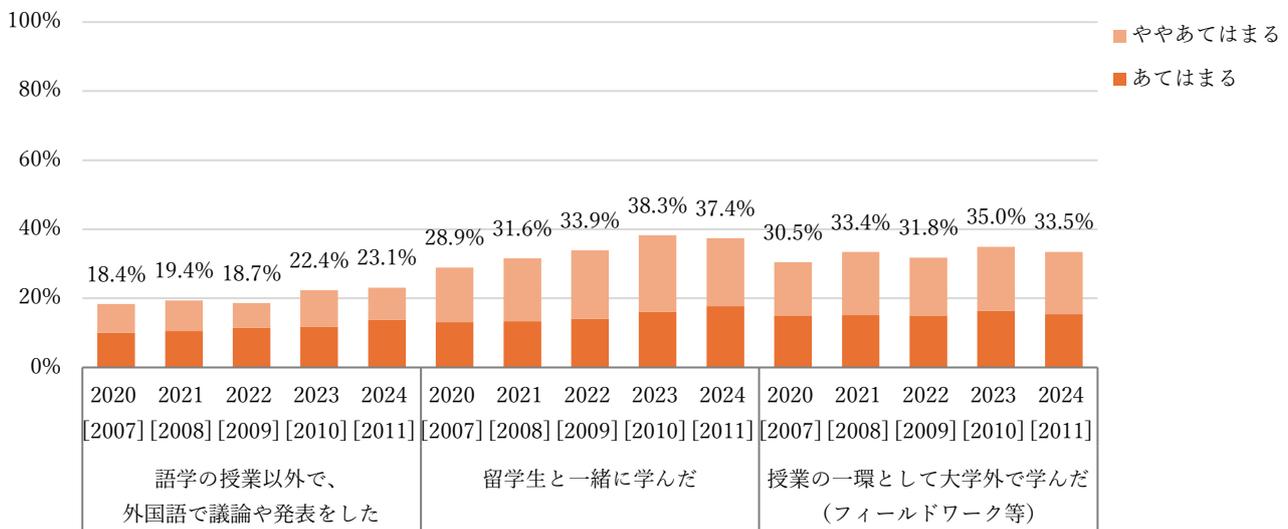


図 3-2 学修経験（多様な他者との学び）

では学修成果については、どのような傾向が見られるのだろうか。次に学修成果の推移について確認していこう。

3-4. 学修成果の5年間の推移

学修成果として取り上げるのは、次の10項目である。調査では「学部で次のようなことをどの程度身につけましたか」と問うたのちに、これらの項目の自己認識について尋ねた。

1. 既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる
2. 物事を論理的に考えることができる
3. 物事を多面的に考えることができる
4. 自分の考えを分かりやすく表現できる
5. 課題の解決方法を提案できる
6. 健全に批判することができる
7. 相手の状況や考え方を尊重できる
8. 公正な視点で多様性を受け入れられる
9. 外国語を理解し、話せる
10. 異文化を理解できる

次項以降、1、2、3を「考えること」、4、5、6を「伝えること」、7、8を「他者の尊重」、9、10を「外国語・多文化」としてまとめて提示する。なお2024年調査では、新しく「新しいことに挑戦できる」を追加したが、他年度との比較ができないためここでは取り上げない。

学修成果の変化①—考えること

図3-3は、考えることに関わる3項目の5年間の推移を示している。まず、「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」をみると、2011年度入学者でやや上がったものの、2007年度入学者から2010年度入学者まではそれほど差がない。参考として、「身についた」を選んだ者の割合をみると、2010年度入学者は22.5%、2011年度入学者は27.1%と増加傾向が認められた。

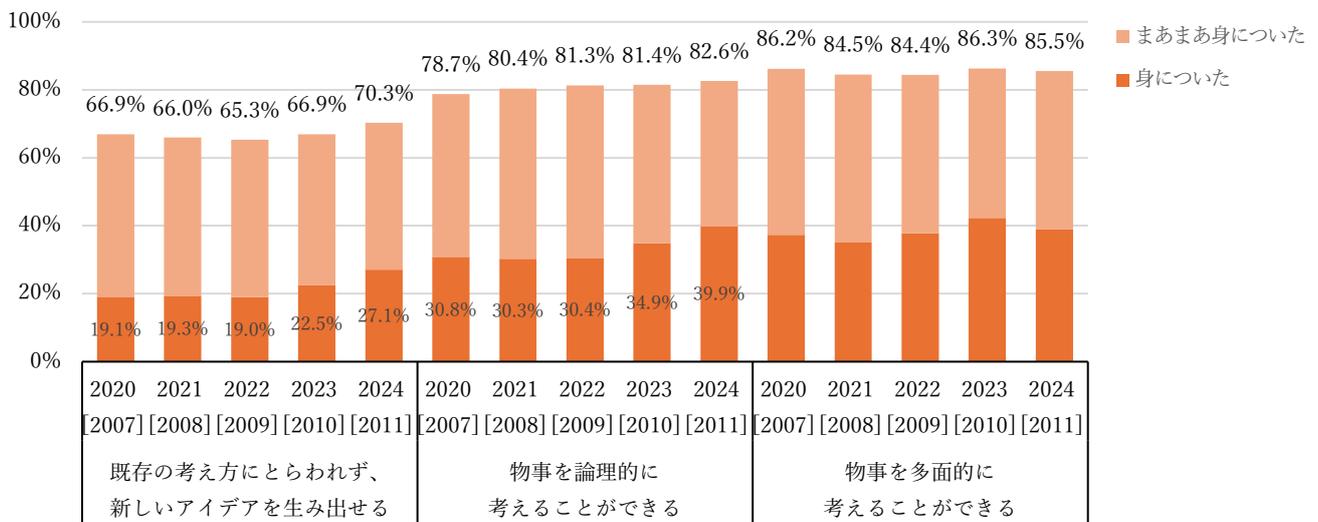


図 3-3 学修成果（考えること）

次に「物事を論理的に考えることができる」をみると、2007年度入学者以降、少しずつ増加しているもののそれほど大きな変化はない（2007年 78.7%、2011年 82.6%）。参考として「身についた」とした者の割合を確認すると、2010年度入学者から2011年度入学者において増加傾向が認められた（2009年 30.4% → 2010年 34.9% → 2011年 39.9%）。

他方、「物事を多面的に考えることができる」については、明確な増加傾向は認められなかった。

学修成果の変化②—伝えること

次に図3-4をみてみよう。「自分の考えを分かりやすく表現できる」については、明確な増加傾向まではみられなかった。また「課題の解決方法を提案できる」でも、明確な増加傾向はみられない。「健全に批判することができる」では、やや増加傾向が認められた。

どの項目でも、70%程度が肯定的な回答をしてはいるものの、大学教育において伝えること（自分の考えを分かりやすく表現する、提案する）を身につけさせることの難しさも感じられる。

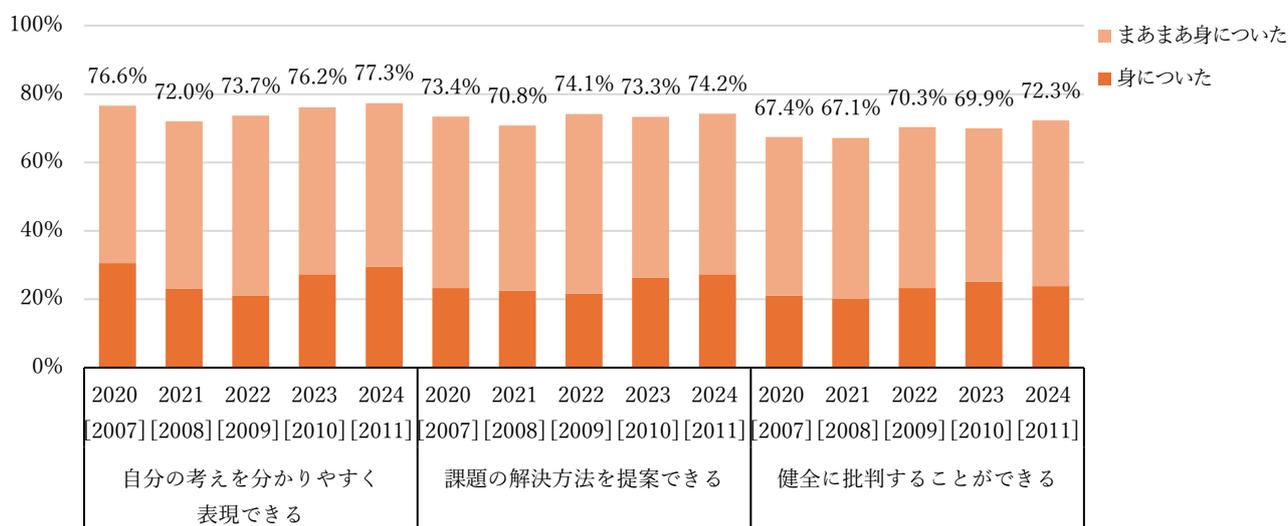


図 3-4 学修成果（伝えること）

学修成果の変化③—他者の尊重

次の図3-5では2つの項目を取り上げる。まず「相手の状況や考え方を尊重できる」については、増加傾向はみられない。

次の「公正な視点で多様性を受け入れられる」だが、2020年調査から2024年調査まで「多様性を受け入れられる」という質問文が用いられており、2024年度調査では質問文が「公正な視点で多様性を受け入れられる」へと変わった。2024年度調査（2011年度入学者）では、肯定的に回答する者の割合が下がっているが、これは質問文の変更が影響しているためとも考えられる。この「公正な視点で多様性を受け入れられる」についても、増加傾向はみられない。

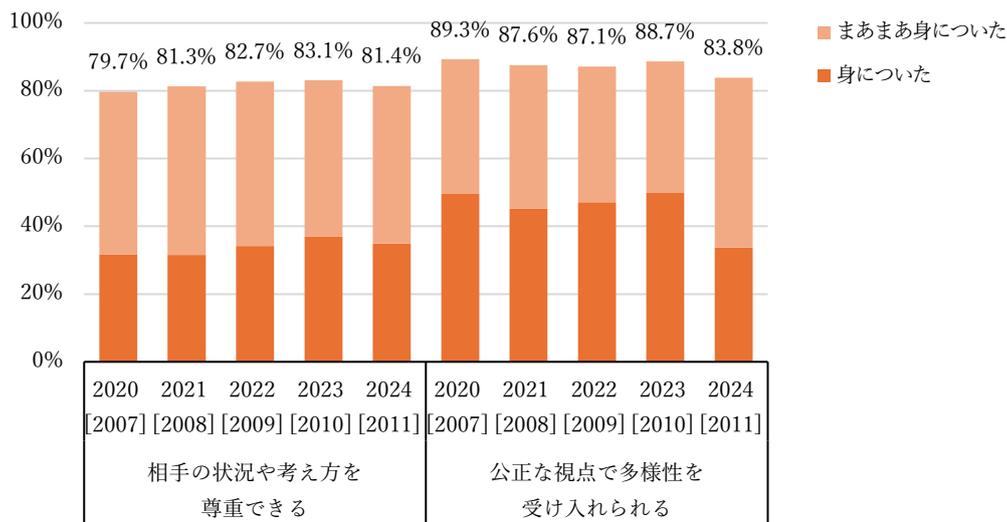


図 3-5 学修成果（他者の尊重）

学修成果の変化④—外国語・異文化

図 3-6 で外国語、異文化についてもみてみよう。「外国語を理解し、話せる」は、2007 年度入学者は 35.6%、2011 年度入学者は 40.2%とやや増加傾向がみられる。

「異文化を理解できる」については、2011 年度入学者で下がっており、増加傾向はみられなかった。

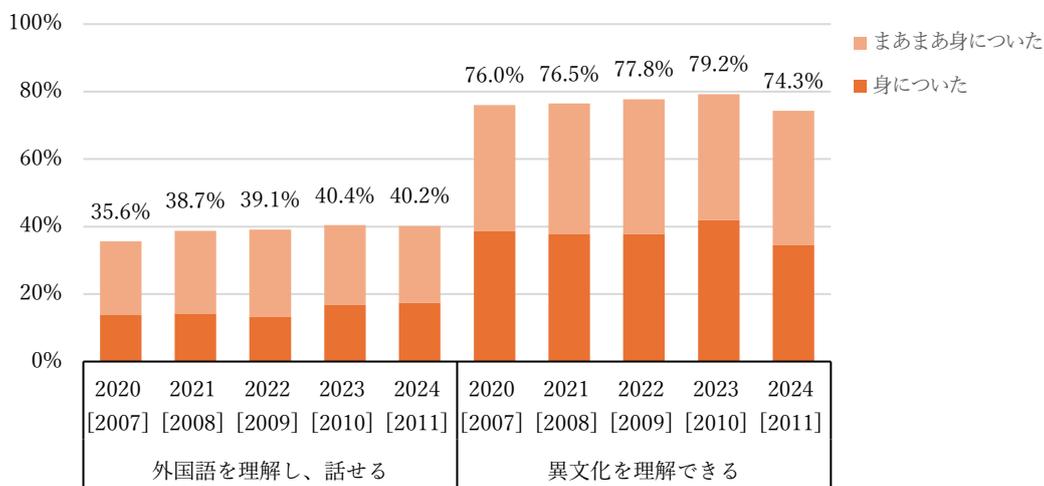


図 3-6 学修成果（外国語・異文化）

3-5. まとめ

本章では、2012年のいわゆる質的転換答申などの影響によって、本学での学修経験や学修成果がどのように推移したのか、2020年度から2024年度の5年間の卒業生調査を用いて示すことを試みた（対象者の学部入学年度は、2007年度から2011年度）。

卒業生にも意識されるアクティブ・ラーニング経験

本章で明らかになったのは、「自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした」や「授業内容について、他の学生と議論した」「授業内容について、教員と議論した」については、2010年度入学者から増加傾向が見られ、2011年度入学者ではさらに増加していたことである。

学部卒業後、約10年を経た卒業生にとっても、本学でのアクティブ・ラーニング経験は、印象深いものであったと考えられる。

「語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした」、「留学生と一緒に学んだ」は、2007年度入学者から2011年度入学者まで、やや増加傾向が見られた。一方、これらの項目について肯定的に回答する卒業生の割合は低い。たとえば、2011年度入学者で、「授業内容について、他の学生と議論した」というアクティブ・ラーニング経験について肯定的に回答した卒業生は68.1%と7割近かったが、「語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした」としたのは23.1%に留まっていた。

他方、「授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）」については、明確な増加傾向はみられなかった。いわゆる質的転換答申では、サービ斯拉ーニングなど大学外での学びについても言及されていた。しかし、約10年前の本学では、フィールドワークなど授業の一環として大学外で学ぶという経験はそれほど一般的ではなかったとも考えられる。

「考えること」の伸び

学修成果において、考えることに関する項目では明確な増加傾向はみられなかったものの、参考として「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」、「物事を論理的に考えることができる」について、「身についた」と回答した者の割合をみると増加傾向がみられた。

具体的には、「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」に「身についた」と回答した者の割合は、2007年19.1% → 2008年19.3% → 2009年19.0% → 2010年22.5% → 2011年27.1%と、2010年度入学者から増加傾向がみられた。また「物事を論理的に考えることができる」に「身についた」と回答した者の割合は、2007年30.8% → 2008年30.3% → 2009年30.4% → 2010年34.9% → 2011年39.9%と、こちらも2010年度入学者から増加傾向がみられた。

本学学部において、「既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる」、「物事を論理的に考えることができる」を身につけたと考える卒業生の割合が増加傾向にあることは、大学としても望ましいことであろう。他方、このような「考えること」の変化に何が影響しているのかについては、さらなる分析が必要だと考える。

「伝えること」の不十分さ

一方、「伝えること」としてまとめた「自分の考えを分かりやすく表現できる」や「課題の解決方法を提案できる」などを身につけたと思う卒業生の割合には、増加傾向がみられなかった。この「自分の考えを分かりやすく表現できる」、「課題の解決方法を提案できる」には、70%程度の卒業生が肯定的な回答をしてはいるものの、自分が「伝えること」について肯定的に捉える者の割合を、どうすれば増やすことができるのか、さらなる調査、分析が必要である。

外国語の理解と海外留学

「外国語を理解し、話せる」については、やや増加傾向がみられたものの、2024年度調査（2011年度入学者）で、「身についた」と「まあまあ身についた」を加算した割合は40.2%に留まった。

本学の全員留学の取り組みによって留学経験者が増えることで、「外国語を理解し、話せる」者の割合も増えていくものと考えられる。一方、どのような要因が、学生が留学をするという行動を阻害しているのか、現在の学生への調査によって阻害要因を明らかにしていくことも必要だと考えている。

第4章 学部学修経験の現在の仕事への役立ち度の分析

4-1. 本章の目的

本章では、学部時代の学修経験の現在の仕事への役立ち度の分析を行う。本調査では、学部での学修経験の現在の仕事への役立ち度に関する質問項目を設定しており、こうした役立ち度の項目と、入学時、在学時、卒業時、そして卒業後（現在）に関する質問項目との関連を明らかにすることが本章の目的である。

まず第2節で、学部での学修経験の現在の仕事への役立ち度に関する質問項目やその他の変数を整理し本章での分析方法をまとめ、続いて第3節では、「専門科目の現在の仕事への役立ち（以降：専門役立ち）」度との関連を、第4節では、「一般科目の現在の仕事への役立ち（以降：一般役立ち）」度との関連を、第5節では、「ゼミ・研究室の現在の仕事への役立ち（以降：ゼミ・研究室役立ち）」度との関連を分析し、第6節はまとめである。

4-2. 変数の整理と分析方法

本卒業生調査では、在学中に有職者だった者も回答者に含まれているが、学部での学修経験の現在の仕事への役立ち度を正確に把握するために、本章で用いるデータは、本調査全体のサンプルから、在学中に有職者だった者（ $n=42$, 3.6%）を除外したデータ（ $n=1094$ ）を用いる。

本章では、学部学修経験の現在の仕事への役立ち度の項目として、「あなたの学部時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください」という設問の、「専門科目」「一般教育科目」「ゼミ・研究室」という3つに関する項目を用いる。それぞれの選択肢は「1. 経験しなかった, 2. まったく役に立っていない, 3. あまり役に立っていない, 4. やや役に立っている, 5. かなり役に立っている」であり、ここから「1. 経験しなかった」を選択した回答者を除き、「1. まったく役に立っていない, 2. あまり役に立っていない, 3. やや役に立っている, 4. かなり役に立っている」の4件法に置き換えた項目を作成し、以降用いることにする。この手続きにより、全体のデータ数（ $n=1094$ ）は、「専門役立ち」は $n=914$ 、「一般役立ち」は $n=928$ 、「ゼミ・研究室役立ち」は $n=874$ とそれぞれ多少異なっている。

本章では学部での学修経験（専門科目、一般科目、ゼミ・研究室）の、現在の仕事への役立ち度を目的変数とした、階層的重回帰分析を実施する。説明変数として投入した変数は、入学時点に関しては、入試形態（一般入試ダミー）、大学第一志望、学部第一志望、早稲田を受験した理由、そして在学中に関しては、学部学修経験、在学時に熱心に取り組んだこと、学部で身につけたこと（DP項目）、通算GPA、卒業時点に関しては、卒業後最初の就職先を決定するに当たって最も重視したこと（ダミー）、現在に関しては、現在の収入、現在の仕事満足度、である。それぞれの項目の記述統計は巻末資料（資料4-1）に添付した。

階層的重回帰分析では、Step 1に入学時点の変数、Step 2に在学中の変数、Step 3に卒業時点の変数、Step 4に現在の変数を投入した。特にStep 1、2、3では、ステップワイズ法（変数増減法）を用い、Step 4は強制投入法を用いた。本調査のように仮説検証型ではなく、大量の調査項目を用いながら意味のある回帰式を得ようとする場合、一定のルールに従って独立変数の選別をするステップワイズ法によるモデルの選択が有効である。

ただしステップワイズ法を基本としながらも、AIC（赤池情報量規準）、BIC（ベイズ情報量基準）、MallowsのCpといったモデルの当てはまりの良さを評価するための指標も確認しながら、各ステップの変数の補足的な選択をした。分析にはIBM SPSS Statistics Ver. 30を用いた。

4-3. 「専門科目」の現在の仕事への役立ち度

表4-1は、「専門科目」の現在の仕事への役立ち度を目的変数とした、階層的重回帰分析の結果である。ここでは目的変数である「専門役立ち」の個人差を説明・予測する、入学時・在学時・卒業時・現在の要因について調べていく。Step 1からStep 4は、階層的重回帰分析で実施された各ブロックである。

表4-1 「専門役立ち」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (n = 914)

	Step 1		Step 2		Step 3		Step 4	
	β		β		β		β	
早大第一志望	.12	***	.09	**	.09	**	.09	**
早大受験理由_勉強したい分野	.18	***	.07	*	.08	*	.07	*
早大受験理由_希望する職業分野の勉強	.19	***	.17	***	.15	***	.15	***
早大受験理由_指導してほしい教員	.10	**	.00		-.01		-.01	
学部専門熱心			.25	***	.22	***	.21	***
学部で身につけたこと_物事の論理的思考			.09	*	.09	*	.09	*
学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現			.08	*	.07	†	.07	†
学部で身につけたこと_健全な批判			.10	**	.11	**	.11	**
就職先最重要視_大学での専門分野との関連					.15	***	.15	***
現在の年収							-.05	†
現在の仕事の満足度							.04	
R^2	.13	***	.25	***	.28	***	.28	***
adj. R^2	.12		.25		.27		.27	
ΔR^2			.13	***	.02	***	.00	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表の記載内容を簡単にまとめると、標準偏回帰係数 (β) は、各ステップにおいて、それぞれの説明変数が「専門科目」の現在の仕事への役立ち度の個人差を、どの程度説明・予測しているかを示す指標である。 β の値が正に大きいほど、その変数の値が高い場合に「専門科目」の役立ち度も高くなる傾向を示し、負に大きい場合は、変数の値が高くなるにつれて役立ち度が低くなる傾向を示す。また、 β の値が0に近い場合には、当該変数と役立ち度との間に明確な関連がみられないことを意味する。表の下段にある、 R^2 およびadj. R^2 は、回帰モデルによって、目的変数である「専門役立ち」の個人差（分散）が、どの程度説明されているかを示す決

定係数という指標である。 R^2 は説明変数群が目的変数の全体的な変動の何%を説明できるかを示し、adj. R^2 (自由度調整済み決定係数) は説明変数の数を考慮して自由度調整を行い、不要な変数を追加した場合の過大評価を防ぐ役割を持った指標である。例えば「専門役立ち」は、Step 1 で選択された4個の(説明)変数によって、分散の約12%が説明されることを意味する。また表の最下段の ΔR^2 は、ひとつ前のステップからの R^2 の変化量を意味し、 ΔR^2 が極めて小さい、または統計的に有意でない場合は、そのステップで新たに投入した変数の独立した説明力が乏しい、または先行ステップや同じステップで同時に投入した他の変数によって、その影響が既に説明されている可能性があることが示唆される。また本文中で記載する「 r 」は、各説明変数と目的変数との単純相関(ピアソンの積率相関係数)を示しており、各回帰モデルに投入された分析対象者(欠損値等除外後)の範囲内で算出されたものである。

Step 1 では入学時の変数を投入した。ステップワイズ法により、「早大第一志望」($r=.11$)、「早大受験理由_勉強したい分野」($r=.27$)、「早大受験理由_希望する職業分野の勉強」($r=.27$)、「早大受験理由_指導してほしい教員」($r=.16$)が選択され、調整済み R^2 は.12であった。標準化係数(β)の大きさから、「受験理由_勉強したい分野」と「受験理由_希望する職業分野の勉強」が、卒業後の「専門役立ち」度に対して、相対的に大きな影響を与えることがわかった。

Step 2 では在学時の変数を投入した。ステップワイズ法により「学部専門熱心」($r=.39$)、「学部で身につけたこと_物事の論理的思考」($r=.31$)、「学部で身につけたこと_健全な批判」($r=.27$)、「学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現」($r=.31$)が選択され、決定係数(R^2)の変化量である ΔR^2 は.13であった。このことから、入学時の変数で統制したうえでも、学部で身につけたことや学部専門に熱心に取り組むことが、卒業後の「専門役立ち」度に正の影響を与えることがわかった。またこれにより入学時の「受験理由_指導してほしい教員」の β が統計的に有意でなくなり、「受験理由_勉強したい分野」の β が大きく減少したことから、それらの影響は、「学部専門熱心」、「学部で身につけたこと_物事の論理的思考」、「学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現」、「学部で身につけたこと_健全な批判」といった、在学時の学修経験・成果に媒介されることが推測される。一方で、ステップワイズ法により「通算GPA」($r=.22$)が除かれた。このことは大学における成績(GPA)が、卒業後の「専門役立ち」度を説明しないのではなく、先行のStep 1の変数、またはStep 2で同時に投入した他の変数によって、その影響が既に説明されている可能性が大きく、説明力が相対的に低かったため選択されなかったと考えられる。

Step 3 では、就職先の決定において最重要視した内容を、ダミー変数として投入した。ステップワイズ法により「就職先最重要視_大学での専門分野との関連」($r=.28$)が選択され、それによる ΔR^2 は.02で、統計的に有意であった。このことから、在学時までの変数で統制したうえでも、大学での専門分野との関連を重要視した就職が、卒業後の「専門役立ち」度に影響を与えることがわかった。

Step 4 では、現在の仕事に関わる変数として、「現在の年収」($r=-.03$)と「現在の仕事の満足度」($r=.11$)を強制投入法によって投入した。しかしこのステップにおける変数の投入による ΔR^2 は.00で、統計的にも有意でなかった。「現在の年収」は10%水準で統計的に有意傾向な負の影響を与えているが、 $\beta=-.05$ と影響は相対的に小さかった。そのため、「現在の年収」と「現在の仕事の満足度」は、「専門役立ち」度の変動を、ほぼ説明していないと判断できる。

あらためて表4-1のStep4をみると、「専門役立ち」に影響を与える変数は、入学前、在学時、就職先決定時における変数であって、現在の仕事に関わる変数ではない。つまり、入学前から就職先決定に至るまでの意欲や姿勢が、「専門役立ち」度を高めるうえで重要であるといえる。また、選択されたDP項目のうち、特に「学部で身につけたこと_健全な批判」の β が相対的に大きかった。

4-4. 「一般科目」の現在の仕事への役立ち度

表4-2は、「一般科目」の現在の仕事への役立ち度を目的変数とした、階層的重回帰分析の結果である。ここでは目的変数である「一般役立ち」の個人差を説明・予測する、入学時・在学時・卒業時・現在の要因について調べていく。表内の記載内容は、4-3. 節にてまとめた通りである。

表4-2 「一般役立ち」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 ($n = 928$)

	Step 1	Step 2	Step 3	Step 4
	β	β	β	β
早大第一志望	.08 **	.07 *	-	.07 *
早大受験理由_勉強したい分野	.14 ***	.06 *	-	.04
早大受験理由_就職に有利	-.10 **	-.05	-	-.06 †
早大受験理由_希望する職業分野の勉強	.13 ***	.10 **	-	.11 ***
早大受験理由_指導してほしい教員	.11 **	.02	-	.02
早大受験理由_進路選択の幅広い学部	.09 *	.04	-	.05 †
早大受験理由_高校の先生・家族・塾などの勧め	.06 †	.03	-	.02
学部一般熱心		.24 ***	-	.25 ***
学部で身につけたこと_物事の論理的思考		.16 ***	-	.16 ***
学部で身につけたこと_異文化理解		.11 ***	-	.11 ***
学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現		.10 **	-	.09 *
学部在学中経験_よい教員に巡り会えた		.06 *	-	.05 †
現在の年収				-.08 *
現在の仕事の満足度				.10 ***
R^2	.10 ***	.29 ***	-	.30 ***
adj. R^2	.09	.28	-	.29
ΔR^2		.19 ***	-	.01 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

1) Step 3 では、ステップワイズ法によっていずれの変数も選択されなかった。

Step 1 では入学時の変数を投入した。ステップワイズ法により、「早大第一志望」($r = .07$)、「早大受験理由_

勉強したい分野」($r=.22$)、「早大受験理由_就職に有利」($r=-.04$)、「早大受験理由_希望する職業分野の勉強」($r=.21$)、「早大受験理由_指導してほしい教員」($r=.17$)、「早大受験理由_進路選択の幅広い学部」($r=.10$)、「早大受験理由_高校の先生・家族・塾などの勧め」($r=.05$)が選択され、調整済み R^2 は.09であった。 β の大きさから、「受験理由_勉強したい分野」と「受験理由_希望する職業分野の勉強」が、卒業後の「一般役立ち」度に対して、相対的に大きな影響を与えることがわかった。

Step 2 では在学時の変数を投入した。ステップワイズ法により「学部一般熱心」($r=.39$)、「学部で身につけたこと_物事の論理的思考」($r=.37$)、「学部で身につけたこと_異文化理解」($r=.27$)、「学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現」($r=.35$)、「学部在学中経験_よい教員に巡り会えた」($r=.29$)が選択され、 ΔR^2 は.19であった。このことから、入学時の変数で統制したうえでも、一般教育に熱心に取り組むことや学部で身につけたことが、卒業後の「一般役立ち」度に正の影響を与えることが示されたといえる。また、Step 1 で選択された入学時の変数の β が減少した。とくに、「受験理由_勉強したい分野」、「受験理由_就職に有利」(負の影響)、「受験理由_指導してほしい教員」、「受験理由_進路選択の幅広い学部」の β が大きく減少していることから、それらの影響は、「学部一般熱心」、「学部で身につけたこと_物事の論理的思考」、「学部で身につけたこと_健全な批判」、「学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現」、「学部在学中経験_よい教員に巡り会えた」といった、在学時の学修経験・成果に媒介されると推測される。一方で、ステップワイズ法により「通算 GPA」($r=.13$)が除かれた。これは「専門役立ち」と同様の傾向であり、このことは大学における成績(GPA)が、卒業後の「一般役立ち」度を説明しないのではなく、Step 2 で同時に投入した他の変数、または先行ステップの変数によって、その影響が既に説明されている可能性が大きく、説明力が相対的に低かったため選択されなかったと考えられる。

Step 3 では、就職先の決定において最重要視した内容をダミー変数として投入したが、ステップワイズ法によっていずれの変数も選択されなかった。そのため、就職先の決定において重要視する内容は、現在の「一般役立ち」度を説明しないと考えられる。

Step 4 では、現在の仕事に関わる変数を検討しており、「現在の年収」($r=-.04$)と「現在の仕事の満足度」($r=.16$)を強制投入法によって投入した。それによる ΔR^2 は.01であった。 β をみると、「現在の年収」は「一般役立ち」に負の影響を与えており、一方「現在の仕事の満足度」は「一般役立ち」に正の影響を与えることがわかった。

あらためて表4-2のStep 4をみると、「一般役立ち」に影響を与える変数は、在学時および現在の仕事に関わる変数に集中していることがわかる。入学前の「早大第一志望」「早大受験理由_希望する職業分野の勉強」は正の影響を与えてはいるものの、それ以外の入学前の変数は大きな影響を与えておらず、また、就職先の決定において重要視する内容はいずれも説明力を持っていない。このことから、「一般役立ち」度に相対的に大きな影響を与えるのは、大学における学びや現在の仕事の状態であると考えられる。また、選択されたDP項目のうち、特に「学部で身につけたこと_物事の論理的思考」の β が相対的に大きかった。

4-5. 「ゼミ・研究室」の現在の仕事への役立ち度

表4-3は、「ゼミ・研究室」の現在の仕事への役立ち度を目的変数とした、階層的重回帰分析の結果である。

ここでは目的変数である「ゼミ・研究室役立ち」の個人差を説明・予測する、入学時・在学時・卒業時・現在の要因について調べていく。表内の記載内容は、4-3. 節にてまとめた通りである。

表4-3 「ゼミ・研究室役立ち」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (n = 874)

	Step 1		Step 2		Step 3		Step 4	
	β		β		β		β	
早大第一志望	.10	**	.05	†	.05	†	.05	†
早大受験理由_勉強したい分野	.12	***	.02		.02		.02	
早大受験理由_就職に有利	-.07	*	-.03		-.02		-.03	
早大受験理由_希望する職業分野の勉強	.13	***	.08	**	.07	*	.08	*
早大受験理由_指導してほしい教員	.14	***	.01		.00		.00	
学部ゼミ・研究室熱心			.36	***	.33	***	.33	***
学部で身につけたこと_健全な批判			.13	***	.14	***	.14	***
学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現			.09	*	.08	*	.08	*
学部で身につけたこと_物事の論理的思考			.09	*	.08	*	.08	*
学部で身につけたこと_公正な視点・多様性受け入れ			-.08	*	-.07	†	-.07	†
学部在学中経験_よい教員に巡り会えた			.13	***	.12	***	.12	***
就職先最重要視_大学での専門分野との関連					.12	***	.12	***
現在の年収							.00	
現在の仕事の満足度							.07	*
R^2	.09	***	.35	***	.36	***	.37	***
adj. R^2	.09		.34		.35		.36	
ΔR^2			.26	***	.01	***	.01	*

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Step 1 では入学時の変数を投入した。ステップワイズ法により、「早大第一志望」($r = .10$)、「早大受験理由_勉強したい分野」($r = .20$)、「早大受験理由_就職に有利」($r = -.06$)、「早大受験理由_希望する職業分野の勉強」($r = .19$)、「早大受験理由_指導してほしい教員」($r = .19$)が選択され、調整済み R^2 は .09 であった。 β の大きさから、「早大受験理由_勉強したい分野」、「早大受験理由_希望する職業分野の勉強」、「早大受験理由_指導してほしい教員」が、卒業後の「ゼミ・研究室役立ち」度において、相対的に大きな影響を与えていることがわかった。

Step 2 では在学時の変数を投入した。ステップワイズ法により「学部ゼミ・研究室熱心」($r = .52$)、「学部で身につけたこと_健全な批判」($r = .30$)、「学部在学中経験_よい教員に巡り会えた」($r = .29$)、「学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現」($r = .36$)、「学部で身につけたこと_物事の論理的思考」($r = .35$)、「学

部で身につけたこと_公正な視点・多様性受け入れ」($r = .20$)が選択され、 ΔR^2 は.26であった。これにより、入学時の変数で統制したうえでも、学部で身につけたことやゼミ・研究室での学びに熱心に取り組むことが、卒業後の「ゼミ・研究室役立ち」度に正の影響を与えることが示されたといえる。またこれによりすべての入学時の変数の β が減少した。とくに、「受験理由_勉強したい分野」、「受験理由_就職に有利」、「受験理由_指導してほしい教員」の β が大きく減少していることから、それらの影響は、「学部ゼミ・研究室熱心」、「学部で身につけたこと_健全な批判」、「学部在学中経験_よい教員に巡り会えた」、「学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現」、「学部で身につけたこと_物事の論理的思考」、「学部で身につけたこと_公正な視点・多様性受け入れ」といった、在学時の学修経験・成果に媒介されることが推測される。一方で、ステップワイズ法により「通算 GPA」($r = .24$)が除かれた。これは「専門役立ち」や「一般役立ち」と同様の傾向であり、このことは大学における成績 (GPA) が、卒業後の「ゼミ・研究室役立ち」度を説明しないのではなく、Step 2で同時に投入した他の変数、または先行ステップの変数によって、その影響が既に説明されている可能性が大きく、説明力が相対的に低かったため選択されなかったと考えられる。

Step 3では、就職先の決定において最重要視した内容をダミー変数として投入した。ステップワイズ法により「就職先最重要視_大学での専門分野との関連」($r = .26$)が選択され、それによる ΔR^2 は.012で、統計的に有意であった。つまり、在学時までの変数で統制したうえでも、大学での専門分野との関連を重要視した就職が、卒業後の「ゼミ・研究室役立ち」度に正の影響を与えると見える。

Step 4では、現在の仕事に関わる変数を検討しており、「現在の年収」($r = .03$)と「現在の仕事の満足度」($r = .17$)を強制投入法によって投入した。このステップにおける変数の投入による ΔR^2 は.01であった。 β をみると、「現在の年収」は「ゼミ・研究室役立ち」に影響を与えておらず、一方「現在の仕事の満足度」は「ゼミ・研究室役立ち」に正の影響を与えていることがわかる。

あらためて表4-3のStep 4をみると、「ゼミ・研究室役立ち」に影響を与える変数は、在学時および就職先選択時に関わる変数に集中していることがわかる。入学前の「早大第一志望」「早大受験理由_希望する職業分野の勉強」はいずれも「ゼミ・研究室役立ち」に正の影響を与えてはいるものの、それ以外の入学前の変数は大きな影響を与えておらず、また現在の仕事は「仕事の満足度」のみが、統計的に有意となっている。このことから、「ゼミ・研究室役立ち」度に影響を与えるのは、入学前の状況や就職先への意識ではなく、大学における学びと就職先の選択であると考えられる。ゼミ・研究室が役立つか否かは、大学においてどのように学ぶかという点、そして就職活動においていかに専門分野との関連を活かすことができるかという点にかかっているといえるだろう。また、選択された DP 項目のうち、特に「学部で身につけたこと_健全な批判」の β が相対的に大きかった。ここで、「学部で身につけたこと_公正な視点・多様性受け入れ」($r = .20$)は、他の DP 項目と中程度の相関 ($r = .43 \sim .61$)を有しており、多重共線性により説明力が分散された結果、 β が負に転じたと解釈できる。このため、当該項目が実質的に負の影響を及ぼしているとはいえない。

4-6. まとめ

本章では、学部時代の学修経験の現在の仕事への役立ち度の分析を行った。学部での学修経験の現在の仕事への役立ち度に関する質問項目と、入学時、在学時、卒業時、そして卒業後 (現在) に関する質問項目との関

連を明らかにすることを試みた。まず第2節で、学部での学修経験の現在の仕事への役立ち度に関する質問項目やその他の変数を整理し本章での分析方法をまとめた。第3節では、「専門科目の現在の仕事への役立ち度」と各変数の関連を、第4節では、「一般科目の現在の仕事への役立ち度」と各変数の関連を、第5節では、「ゼミ・研究室の現在の仕事への役立ち度」と各変数の関連を分析した。

本章では分析手法として、階層的重回帰分析を用い、Step 1 に入学時点の変数、Step 2 に在学中の変数、Step 3 に卒業時点の変数、Step 4 に現在の変数を投入した。Step 1、2、3 では、ステップワイズ法（変数増減法）を用い、Step 4 は強制投入法を用いた。本章の分析で用いた IBM SPSS Statistics Ver.30 では、ステップワイズ法は説明変数の回帰係数の有意差の検定に基づいている。本章ではステップワイズ法を用いつつ、AIC・BIC・Mallows の Cp を確認しながら、変数をモデルに含めるべきかを適宜検討した。

全体の傾向として、目的変数と対応したそれぞれの学修経験について「熱心だった」という変数が、最も β が大きかった。また Step 4 の最終モデルは、その学修経験に対する熱心度で統制したうえで、各説明変数がどの程度目的変数に対する影響を持っているのかという観点でみることができる。興味深いのは「専門役立ち」と「ゼミ・研究室役立ち」のみ、「就職先最重要視_大学での専門分野との関連」が統計的に有意であり、 β も相対的に大きいことが認められたことである。このことから、専門性を高める学修経験が現在の仕事に役立つためには、卒業後の就職先の選択において大学の専門分野との関わりを重視することが有効であると考えられる。また「早大受験理由_希望する職業分野の勉強」は Step 1 で投入されたが、その後のステップを経ても、 β が大きく減衰しない傾向にあり、このことから大学での学修経験が現在の仕事に役立つためには、早稲田大学を受験する際に職業を意識した学修の動機を持っていることの影響があることが示唆された。

またそれぞれの「役立ち度」と、学部で身につけた大学 DP 項目の関係もみられた。まず各分析における β の大きさを確認すると、「専門役立ち」および「ゼミ・研究室役立ち」に対しては、「健全な批判」が相対的に大きな影響を与えており、「一般役立ち」に対しては、「物事の論理的思考」が相対的に大きな影響を与えていた。また、本章で検討した全ての「役立ち」に共通して、「物事の論理的思考」と「自分の考えを分かりやすく表現」が統計的に有意な正の影響を与えていたことは注目できる。この結果から、学部で身につけた「物事の論理的思考」と「自分の考えを分かりやすく表現」の力は、本章で扱った「専門役立ち」、「一般役立ち」、「ゼミ・研究室役立ち」のいずれにも正の影響を与える汎用的な資質であることが推測される。

現在の項目としては、現在の年収はほぼ影響がないか負の影響がみられ、一方で現在の仕事の満足度は、「一般科目役立ち」と「ゼミ・研究室役立ち」に対して、相対的にある程度の大きさの正の影響がみられた。章末資料の表 4-2 に、本章のそれぞれの分析で最終的に選択された変数のみを抜粋して、相関係数（Spearman の順位相関係数 ρ ）を提示した。「現在の年収」と「現在の仕事の満足度」の相関係数は、 $\rho = .24$ と小程度の大きさの関連が認められる。そのうえで本章の分析によると、大学での学修経験の現在の仕事への役立ちを説明する上では、年収はほぼ関連がないか負の影響であり、一方で仕事満足度は概ね正の影響を持つことがわかった。

卒業生（校友）の早稲田大学への愛校心や、大学と関わろうとする行動に対して、大学での経験や学修の仕事への役立ち度は影響し、その影響の大きさは大学 DP の獲得度と同程度であることがわかっている（山田ら，2024）。本章ではさらに一歩進めて、大学での学修経験の仕事への役立ち度を、入学時・在学時の事柄、卒業時の職業選択の理由、現在の仕事の状況によって説明することを試み、部分的にはあるがそれが可能となった。

4-7. 資料

資料4-1 本章で用いた変数の記述統計

	度数	平均値	標準偏差
学部専門役立ち	1032	2.65	0.99
学部一般役立ち	1036	2.53	0.89
学部ゼミ・研究室役立ち	982	2.62	1.00
入試形態：一般入試（ダミー）	1093	0.66	0.47
入学した大学は第一志望でしたか：大学	1093	1.28	0.45
入学した学部は第一志望でしたか：学部	1080	1.33	0.47
本学の受験を決めた理由：勉強したい分野がその学部にあったから	1009	3.35	0.78
本学の受験を決めた理由：就職に有利であると思ったから	1010	2.98	0.94
本学の受験を決めた理由：将来の希望する職業分野を勉強できるから	1008	2.72	0.98
本学の受験を決めた理由：資格の取得が有利であるから	1006	1.95	0.93
本学の受験を決めた理由：指導してほしい教員がその学部にいたから	1004	1.67	0.82
本学の受験を決めた理由：学力（偏差値など）が適当であったから	1009	3.17	0.85
本学の受験を決めた理由：進路選択の幅が広い学部があったから	1010	2.97	1.01
本学の受験を決めた理由：高校の先生や家族または塾などで勧められたから	1008	2.41	1.12
本学の受験を決めた理由：伝統・校風が好きだから	1010	2.96	1.04
本学の受験を決めた理由：国際化が進んでいるから	1007	2.19	1.01
学部在学中経験：読書（漫画や雑誌を除く）をした	1091	3.41	0.82
学部在学中経験：自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした	1092	2.94	1.06
学部在学中経験：授業内容について、他の学生と議論した	1091	2.90	1.00
学部在学中経験：授業内容について、教員と議論した	1092	2.47	1.07
学部在学中経験：語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした	1090	1.78	1.11
学部在学中経験：留学生と一緒に学んだ	1091	2.12	1.17
学部在学中経験：授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）	1090	2.00	1.16
学部在学中経験：できるだけ授業を休まないようにした	1092	3.05	1.01
学部在学中経験：よい教員に巡り会えた	1093	3.11	0.96
学部在学中熱心取り組み：学部専門熱心	1070	2.94	0.90
学部在学中熱心取り組み：学部一般熱心	1078	2.67	0.88
学部在学中熱心取り組み：学部ゼミ・研究室熱心	1021	3.03	0.95
学部でどの程度身につけたか：新しいことに挑戦できる	1091	3.05	0.83

学部でどの程度身につけたか：既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる	1091	2.92	0.85
学部でどの程度身につけたか：物事を論理的に考えることができる	1092	3.17	0.82
学部でどの程度身につけたか：課題の解決方法を提案できる	1092	2.95	0.83
学部でどの程度身につけたか：自分の考えを分かりやすく表現できる	1092	3.00	0.82
学部でどの程度身につけたか：相手の状況や考え方を尊重できる	1091	3.13	0.80
学部でどの程度身につけたか：物事を多面的に考えることができる	1091	3.20	0.76
学部でどの程度身につけたか：健全に批判することができる	1090	2.89	0.83
学部でどの程度身につけたか：公正な視点で多様性を受け入れられる	1092	3.13	0.78
学部でどの程度身につけたか：異文化を理解できる	1092	3.02	0.91
学部でどの程度身につけたか：外国語を理解し、話せる	1092	2.34	1.05
通算 GPA	1094	2.47	0.61
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：大学での専門分野との関連（ダミー）	1091	0.14	0.35
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：業種	1091	0.36	0.48
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：地域条件（勤務地・転勤の有無など）	1091	0.07	0.26
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：規模	1091	0.02	0.13
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：知名度やイメージ	1091	0.10	0.29
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：国際性	1091	0.05	0.21
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：経営方針	1091	0.03	0.16
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：安定性	1091	0.08	0.27
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：給与	1091	0.04	0.21
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：OBやOGの存在	1091	0.01	0.10
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：勤務時間・休暇・福利厚生など	1091	0.04	0.20
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：在学中に既に就職していた	1091	0.01	0.07
卒業後最初の就職先を決定するうえで最も重視したこと：その他（具体的に）	1091	0.06	0.23
現在の年収（税込）	1037	7.72	3.29
現在の仕事の満足度	1042	7.11	1.93

資料4-2 本章の分析で最終的にモデルに選択された変数の相関
(Spearman の順位相関係数 ρ , $n = 908 \sim 1092$)

	b.	c.	d.	e.	f.	g.	h.	i.	j.	k.	l.	m.	n.	o.	p.	q.	r.	s.	t.	u.	v.
a.	.57**	.61**	.10**	.28**	.17**	.28**	-.01	.06	.02	.38**	.24**	.28**	.31**	.31**	.26**	.21**	.09**	.26**	.26**	-.02	.14**
b.	-	.45**	.07*	.21**	.17**	.20**	-.04	.10**	.05	.31**	.39**	.21**	.33**	.33**	.31**	.26**	.24**	.26**	.13**	-.02	.17**
c.	-	-	.08**	.23**	.17**	.19**	-.07*	.06	-.03	.30**	.22**	.50**	.34**	.36**	.30**	.21**	.12**	.41**	.26**	.03	.17**
d.	-	-	-	-.03-	.09**	0-	.09**	-.06	-.05	.04	.01	.08*	.01	-.01	.03	.01	-.03	-.00	.06	.06	-.04
e.	-	-	-	-	.19**	.38**	-.08*	.02-	.10**	.36**	.17**	.28**	.20**	.23**	.15**	.18**	.13**	.27**	.14**	-.05	.12**
f.	-	-	-	-	-	.21**	-.04	.10**	.15**	.24**	.17**	.24**	.19**	.20**	.20**	.17**	.14**	.23**	.11**	-.00	.08**
g.	-	-	-	-	-	-	.23**	.17**	.05	.19**	.11**	.16**	.15**	.18**	.08*	.09**	.07*	.09**	.18**	.09**	.13**
h.	-	-	-	-	-	-	-	.33**	.25**	-.12**	-.07*	.12**	-.00	-.03	-.04	-.03	-.00	-.06-	.08**	.14**	.08**
i.	-	-	-	-	-	-	-	-	.22**	-.02	.04	.02	.09**	.11**	.12**	.14**	.12**	.04	-.07*	.16**	.11**
j.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.01	.05	-.04	-.01	.03	.03	.09**	.11**	.01	-.00	-.04	.04
k.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.59**	.54**	.33**	.33**	.23**	.21**	.16**	.40**	.25**	-.08**	.11**
l.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.34**	.25**	.25**	.27**	.28**	.23**	.30**	.13**	-.05	.06
m.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.31**	.35**	.22**	.21**	.15**	.53**	.22**	-.02	.11**
n.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.60**	.51**	.42**	.19**	.34**	.15**	.05	.17**
o.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.52**	.42**	.25**	.35**	.17**	.03	.16**
p.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.60**	.35**	.30**	.05	.09**	.12**
q.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.55**	.29**	.03	.07*	.10**
r.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.21**	-.00	.00	.08**
s.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	.14**	-.07*	.15**
t.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-.03	.04
u.	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-.24**

** $p < .01$, * $p < .05$

1) $\rho \geq 0.4$ (中程度の相関), $\rho \geq 0.2$ (弱い相関)

2) 各アルファベットの変数は以下の通り: a.学部専門役立ち, b.学部一般役立ち, c.学部ゼミ・研究室役立ち, d.早大第一志望, e.早大受験理由_勉強したい分野, f.早大受験理由_指導してほしい教員, g.早大受験理由_希望する職業分野の勉強, h.早大受験理由_就職に有利, i.早大受験理由_進路選択の幅広い学部, j.早大受験理由_高校の先生・家族・塾などの勧め, k.学部専門熱心, l.学部一般熱心, m.学部ゼミ・研究室熱心, n.学部で身につけたこと_物事の論理的思考, o.学部で身につけたこと_自分の考えを分かりやすく表現, p.学部で身につけたこと_健全な批判, q.学部で身につけたこと_公正な視点・多様性受け入れ, r.学部で身につけたこと_異文化理解, s.学部在学中経験_よい教員に巡り会えた, t.就職先最重要視_大学での専門分野との関連, u.現在の年収, v.現在の仕事の満足度

参考文献

山田寛邦・遠藤健・丸川拓己 (2024) 「大学卒業生の愛校心・行動に対する在学時の経験・学修行動の影響 — 早稲田大学卒業生調査をもとに —」『早稲田教育学研究』, (15), pp. 49-65

2024年度 卒業生調査 集計表

目次

I. 調査概要

II. 調査項目

1. 基本情報

- Q01. あなたの年齢（2024年1月1日現在）を記入してください。
- Q02. あなたの性別について、あてはまるものをお選びください。
- Q03. あなたの最終学歴について、あてはまるものを一つだけお選びください。
- Q04. あなたが卒業した大学・学部名をお選びください。
- Q05. あなたが卒業した早稲田大学の学部名をお選びください。
- Q06. あなたが修士課程を修了した、または在学している大学・研究科名をお選びください。
- Q07. あなたが修了または在学している早稲田大学の研究科名（修士課程）をお選びください。
- Q08. あなたが博士後期課程を修了した（単位取得退学を含む）、または在学している大学・研究科名をお選びください。
- Q09. あなたが修了または在学している早稲田大学の研究科名（博士後期課程）をお選びください。
- Q10. あなたの高校卒業時の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください）。
- Q11. あなたの現在の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください）。
- Q12. あなたのご両親の最終学歴をお選びください。

2. 学部入学時及び、学部在学時の経験について

- Q13. あなたが大学に入学した試験の形態を、次の選択肢の中から一つだけお選びください。
- Q14. 入学した大学は第一志望でしたか。また、入学した学部は第一志望でしたか。それぞれお選びください。
- Q15. あなたは現役で入学しましたか（学部）。あてはまるものを一つだけお選びください。
- Q16. 本学の受験を決めた理由として、次の項目はそれぞれどのくらいあてはまりますか。
- Q17. 高校卒業までに留学したこと、海外に住んでいたことはありますか。
- Q18. 学部在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか。
- Q19. 学部在学中に、以下のような経験をしましたか。
- Q20. 学部在学中に留学をしたことはありますか。複数ある場合には、より長い期間を選んでください。

Q21. 学部在学中において、あなたの成績は、全体的に学部の中でどのあたりでしたか。

Q22. 学部で次のようなことをどの程度身につけましたか。

3. 大学院受験時及び、大学院在学時について

Q23. 本学大学院の受験を決めた理由として、次の項目はそれぞれどのくらいあてはまりますか。

Q24. 大学院在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか。

Q25. 大学院在学中に、以下のような経験をしましたか。

Q26. 大学院在学中に留学をしたことはありますか。複数ある場合には、より長い期間を選んでください。

4. 卒業・修了後の経験と生活

Q27. あなたは学部を4年間で卒業しましたか。

Q28. あなたは学部卒業時にどのような進路選択をしましたか。該当するものを一つだけお選びください。

Q29. あなたは大学院（修士課程）修了時にどのような進路選択をしましたか。該当するものを一つだけお選びください。

Q30. あなたは大学院（博士後期課程）修了時にどのような進路選択をしましたか。該当するものを一つだけお選びください。

Q31. 学部・大学院等の卒業・修了後最初の就職先を決定するに当たって最も重視したことは何ですか。該当するものを一つだけお選びください。

Q32. 学部・大学院等の卒業・修了後最初の居住地について都道府県名をお選びください。

Q33. 学部・大学院等の卒業・修了後最初に就いたお仕事は、現在も継続されていますか。出向や転勤などで異動している場合は、同じ会社・団体・組織としてください。

Q34. 学部・大学院等の卒業・修了後最初に就いたお仕事の勤続年数を記入してください。

Q35. あなたの現在の就業形態について、該当するものを一つだけお選びください。

Q36. 転職または辞職された理由は何ですか。最も大きい理由を一つだけお選びください。

Q37. 現在働いている企業・団体等の業種について、該当するものを一つだけお選びください。

Q38. 現在働いている企業・団体等の職種について、該当するものを一つだけお選びください。

Q39. 現在働いている企業・団体等の従業員規模について、該当するものを一つだけお選びください。

Q40. 現在のお仕事の勤続年数を記入してください。

Q41. 現在の学習活動について、最もあてはまるものをお選びください。

Q42. あなたの現在の年収（税込）について、該当するものを一つだけお選びください。

Q43. あなたの学部時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。

Q44. あなたの大学院時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。

Q45. (仕事上の難しい問題に直面したときに、個人的に相談できる) 友人は、どのような関係にある方ですか。あてはまるものすべてをお選びください。

Q46. あなたの現在の仕事の満足度はどの程度ですか。

Q47. あなたの生活(仕事を除く)の満足度はどの程度ですか。

5. 校友関連

Q48. あなたは早稲田大学の校友(こうゆう)として、現在、早稲田大学とどのように関わっていますか。あてはまるものすべてを選んでください。

Q49. 早稲田大学の校友(卒業生)であることを誇りに思う時はどのような時ですか。あてはまるものすべてを選んでください。

Q50. あなたが早稲田大学に関する情報に触れる機会・手段として、どのようなものがありますか。あてはまるものすべてを選んでください。

注1: Q番号は本集計表のための番号である。

注2: グレーの設問の自由記述については省略した。

注3: 「2. 学部入学時及び、学部在学時の経験について」の括弧内の数値は、本学学部入学者のみを対象にした値である。

I. 調査概要

- ◆ **調査方法**：ダイレクトメールの送付とメール配信を通じた「Qualtrics」を用いたオンライン調査
- ◆ **調査時期**：2024年8月6日～2024年9月6日
- ◆ **調査対象者**：早稲田大学の2011年度学部入学者及び早稲田大学以外で学部を卒業し2015年度に早稲田大学大学院（修士課程）に入学した者 11,023名
- ◆ **回収状況**：1,408件 回収率（12.8%）
- ◆ **調査結果引用に関するお願い**

本調査結果を引用される際には、下記の出典を明記くださいますようお願いいたします。

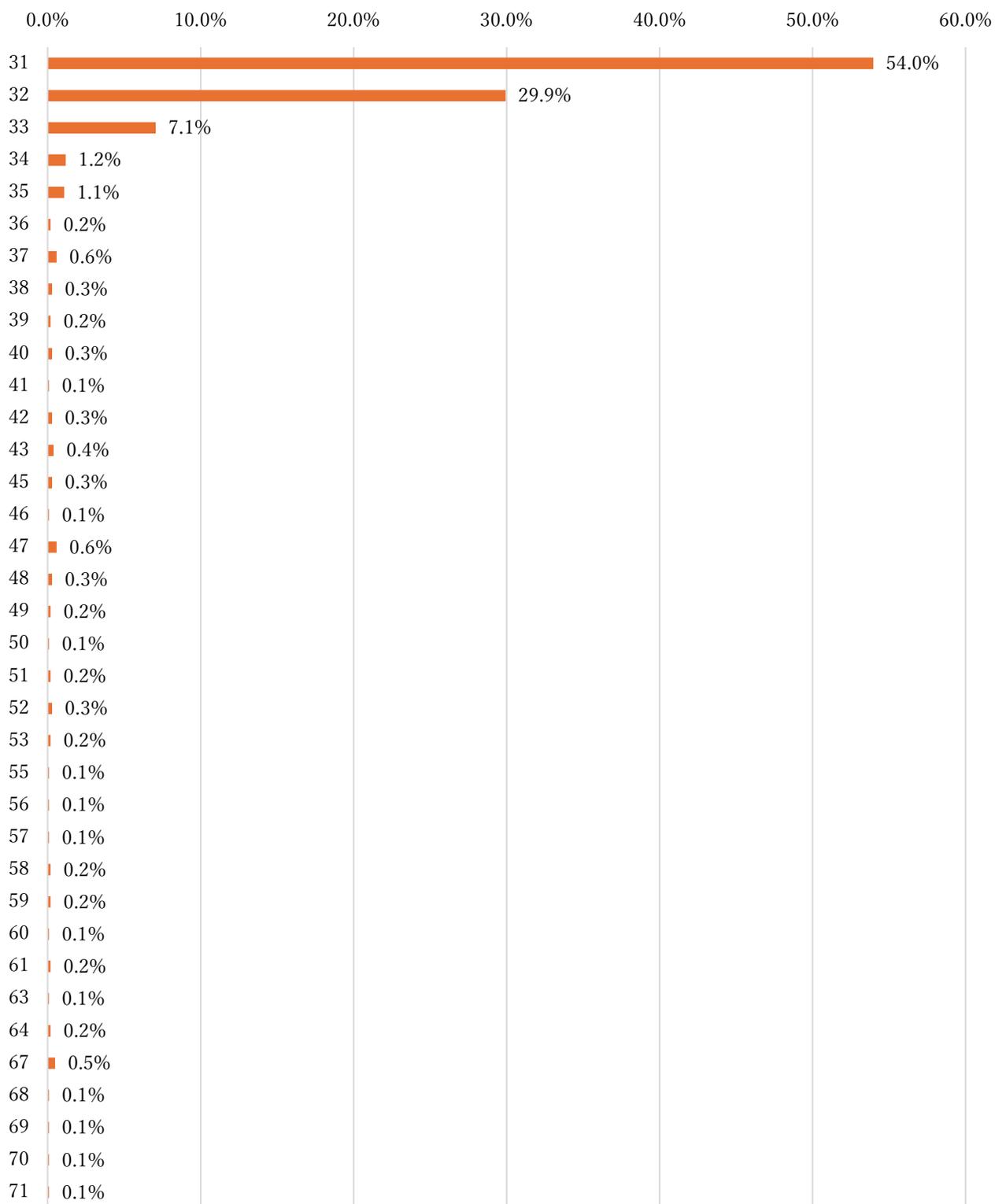
著者：早稲田大学大学総合研究センター

タイトル：2024年度 早稲田大学卒業生調査報告書

II. 調査項目

1. 基本情報

Q01. あなたの年齢（2024年1月1日現在）を記入してください。



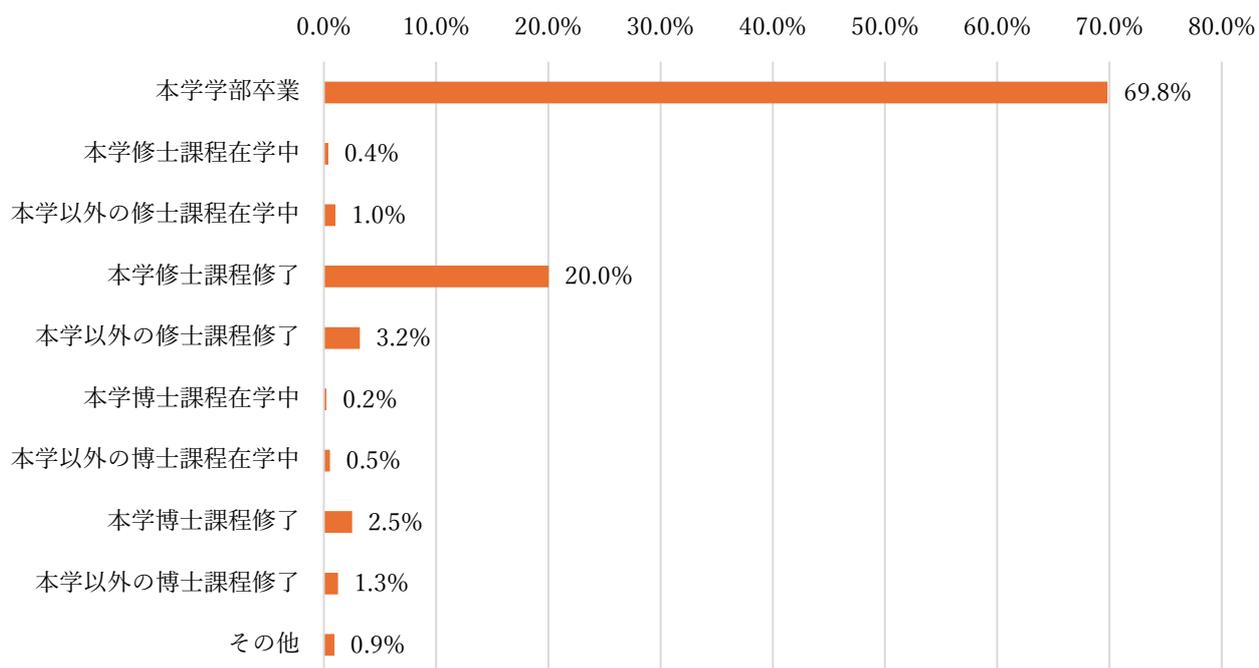
31	550	50	1
32	305	51	2
33	72	52	3
34	12	53	2
35	11	55	1
36	2	56	1
37	6	57	1
38	3	58	2
39	2	59	2
40	3	60	1
41	1	61	2
42	3	63	1
43	4	64	2
45	3	67	5
46	1	68	1
47	6	69	1
48	3	70	1
49	2	71	1

Q02. あなたの性別について、あてはまるものをお選びください。



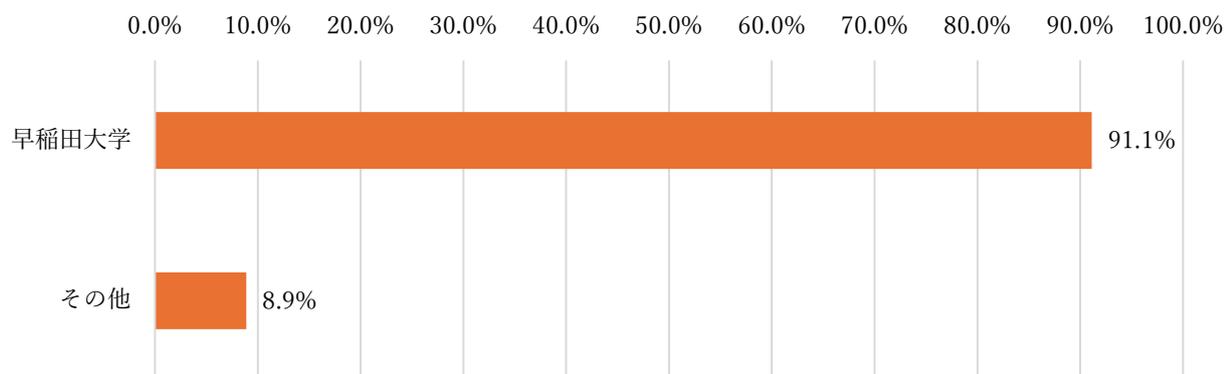
男	758
女	496
その他・分からない・答えたくない	12

Q03. あなたの最終学歴について、あてはまるものを一つだけお選びください。



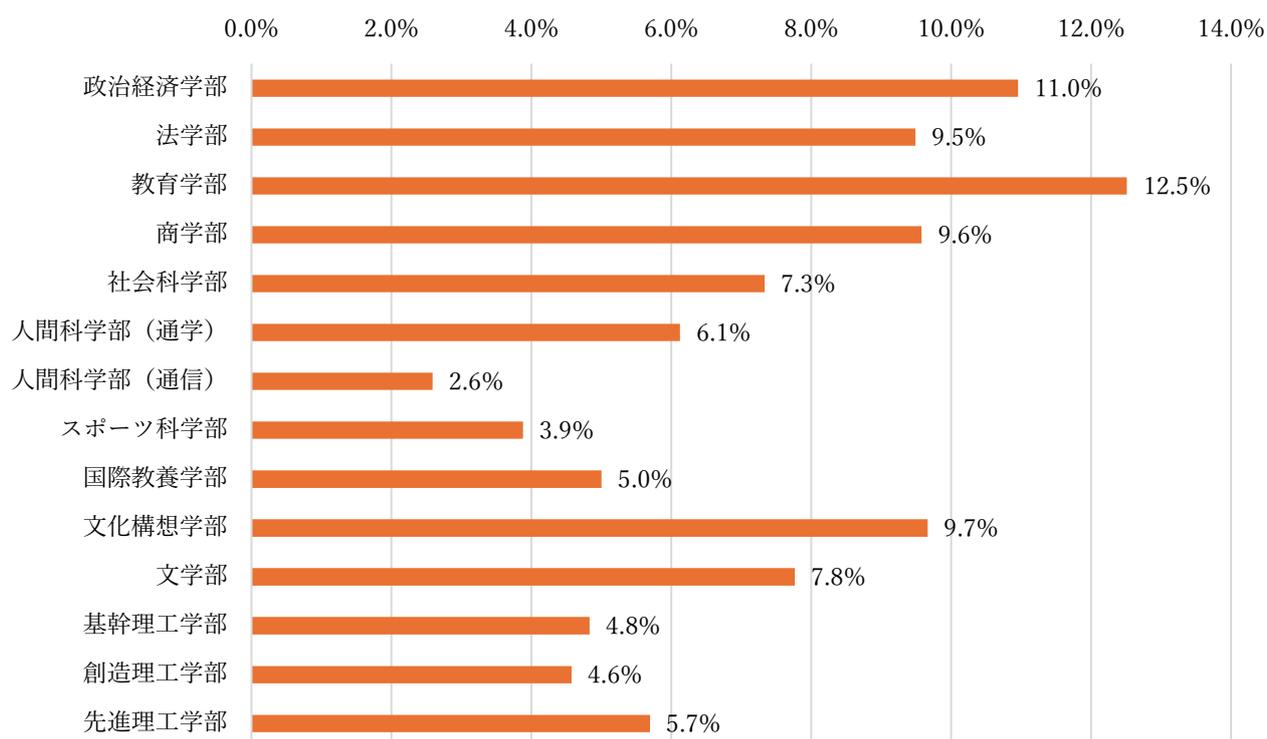
本学学部卒業	889	本学博士課程在学中	3
本学修士課程在学中	5	本学以外の博士課程在学中	7
本学以外の修士課程在学中	13	本学博士課程修了	32
本学修士課程修了	255	本学以外の博士課程修了	16
本学以外の修士課程修了	41	その他	12

Q04. あなたが卒業した大学・学部名をお選びください。



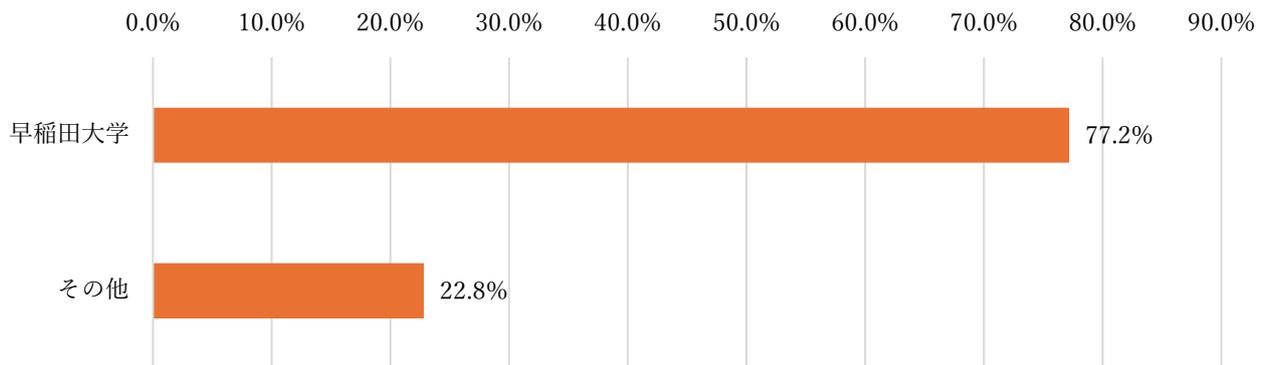
早稲田大学	1159
その他	113

Q05. あなたが卒業した早稲田大学の学部名をお選びください。



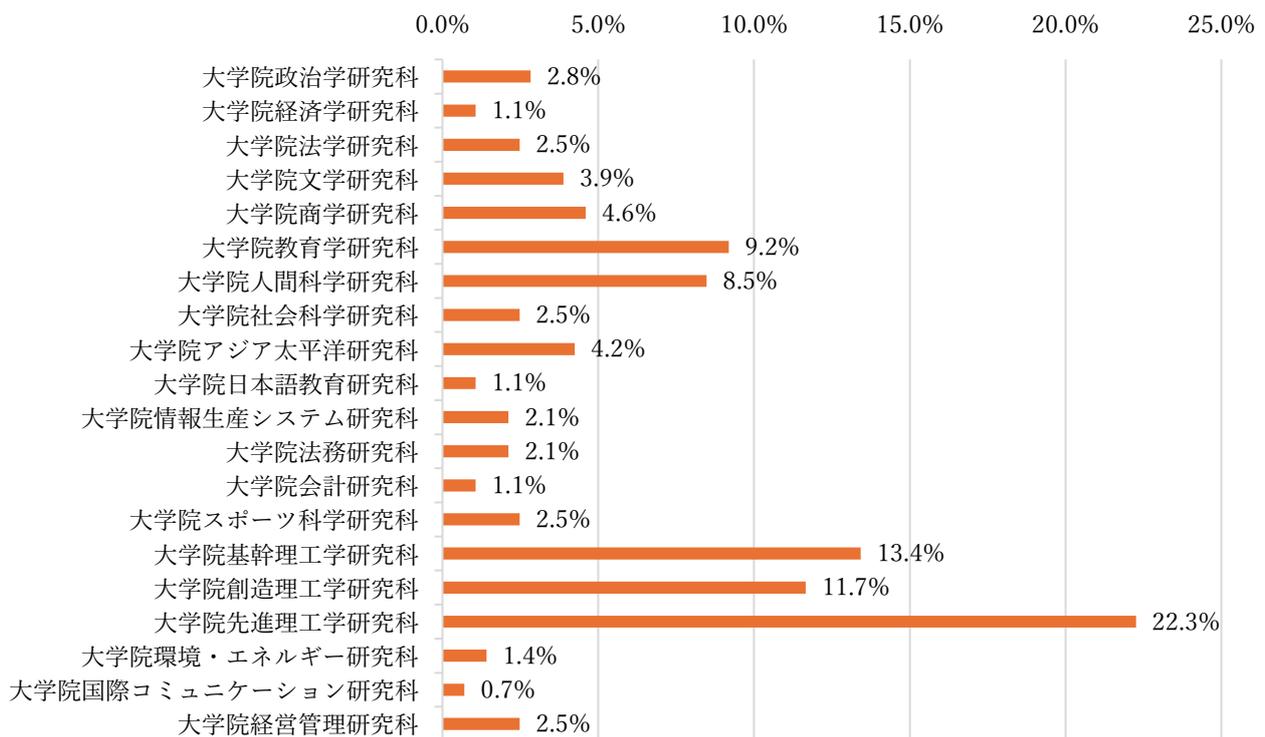
政治経済学部	127	文学部	90
法学部	110	基幹理工学部	56
教育学部	145	創造理工学部	53
商学部	111	先進理工学部	66
社会科学部	85		
人間科学部 (通学)	71		
人間科学部 (通信)	30		
スポーツ科学部	45		
国際教養学部	58		

Q06. あなたが修士課程を修了した、または在学している大学・研究科名をお選びください。



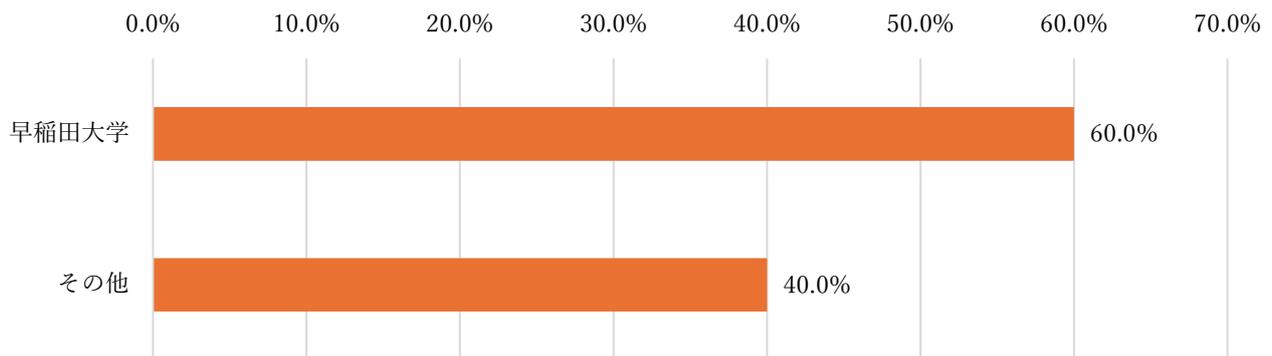
早稲田大学	284
その他	84

Q07. あなたが修了または在学している早稲田大学の研究科名（修士課程）をお選びください。



大学院政治学研究科	8	大学院情報生産システム研究科	6
大学院経済学研究科	3	大学院法務研究科	6
大学院法学研究科	7	大学院会計研究科	3
大学院文学研究科	11	大学院スポーツ科学研究科	7
大学院商学研究科	13	大学院基幹理工学研究科	38
大学院教育学研究科	26	大学院創造理工学研究科	33
大学院人間科学研究科	24	大学院先進理工学研究科	63
大学院社会科学研究科	7	大学院環境・エネルギー研究科	4
大学院アジア太平洋研究科	12	大学院国際コミュニケーション研究科	2
大学院日本語教育研究科	3	大学院経営管理研究科	7

Q08. あなたが博士後期課程を修了した（単位取得退学を含む）、または在学している大学・研究科名をお選びください。



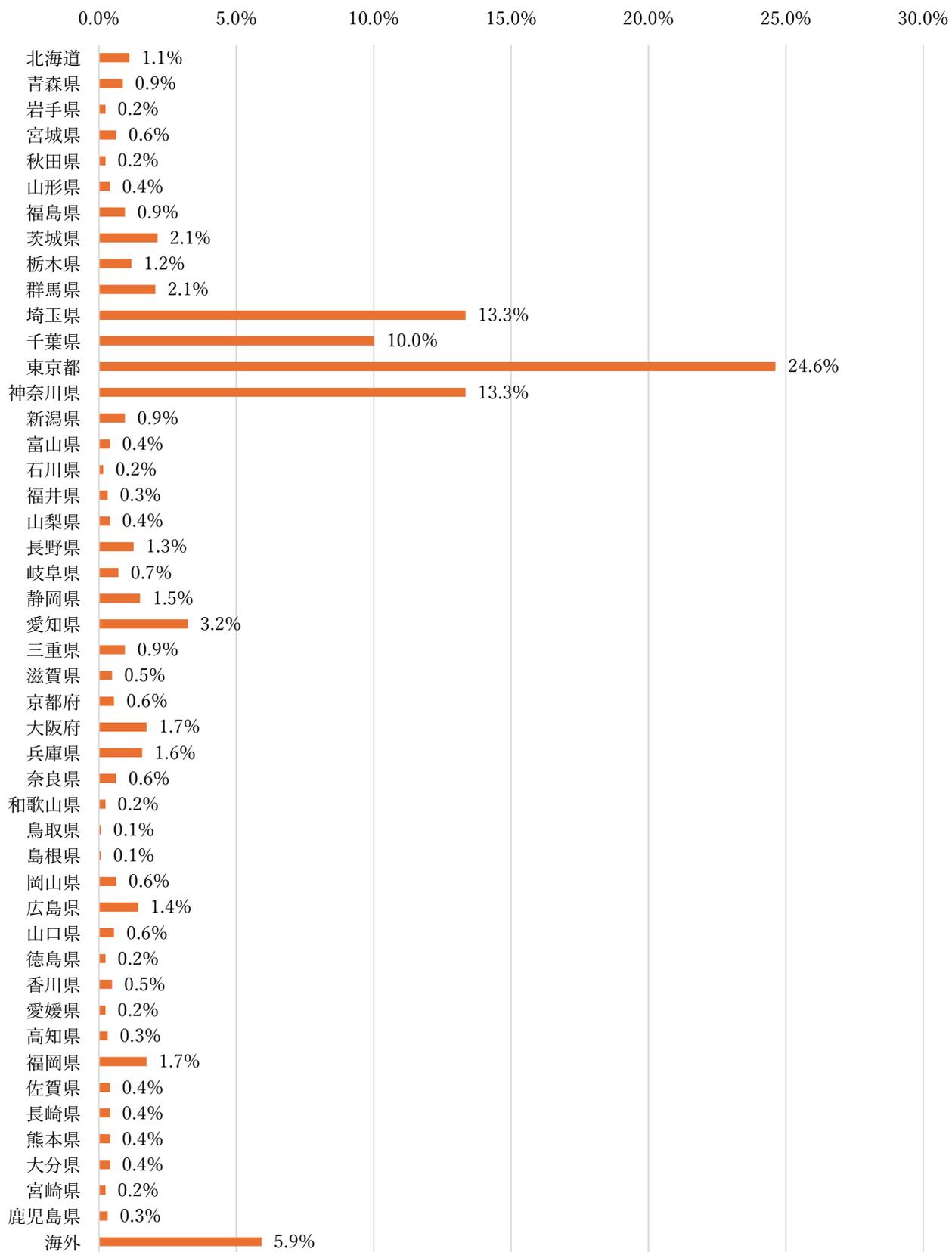
早稲田大学	33
その他	22

Q09. あなたが修了または在学している早稲田大学の研究科名（博士後期課程）をお選びください。



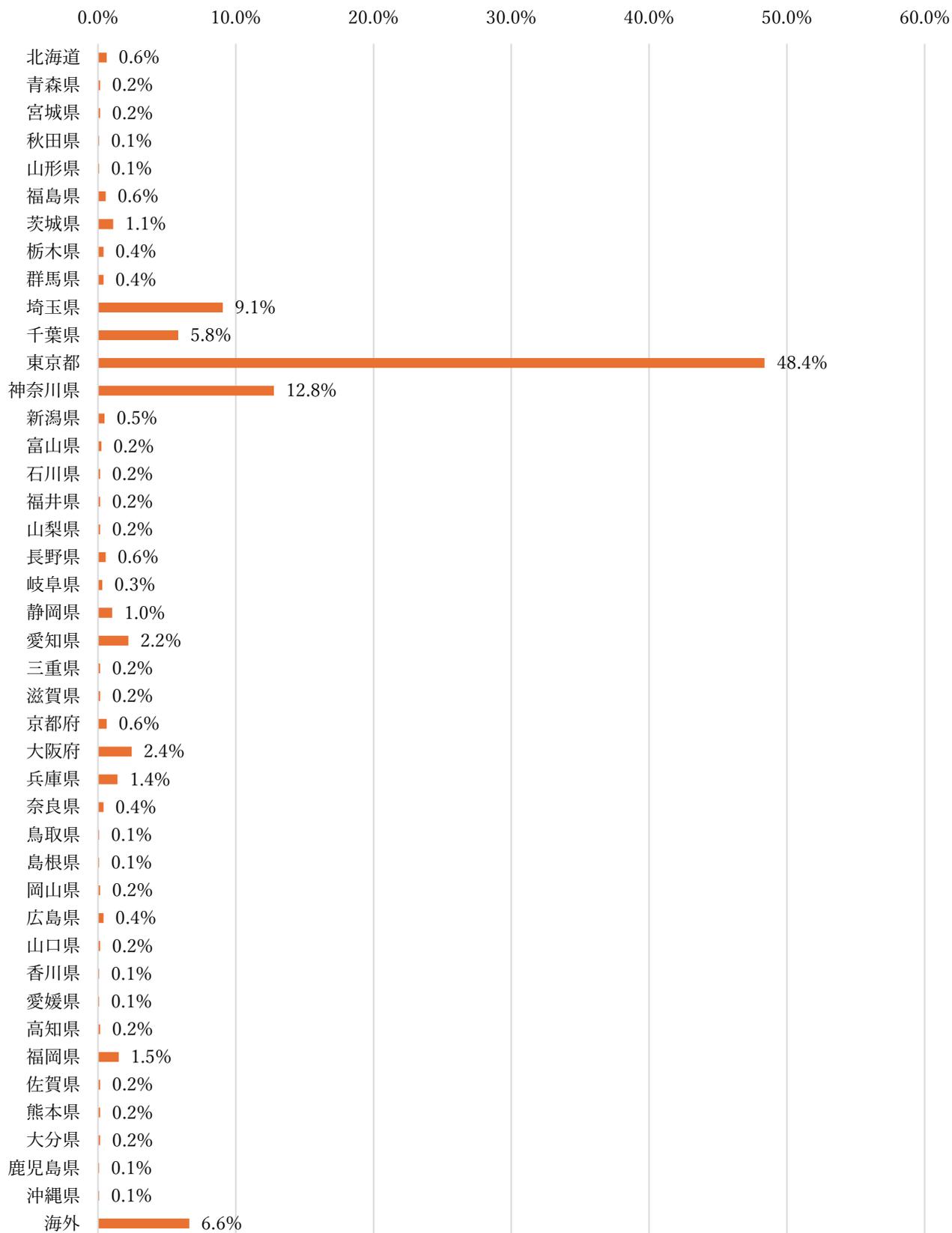
大学院経済学研究科	2	大学院日本語教育研究科	1
大学院法学研究科	3	大学院法務研究科	2
大学院文学研究科	4	大学院スポーツ科学研究科	4
大学院教育学研究科	2	大学院基幹理工学研究科	3
大学院人間科学研究科	5	大学院創造理工学研究科	1
大学院社会科学研究科	1	大学院先進理工学研究科	2
大学院アジア太平洋研究科	2	大学院国際コミュニケーション研究科	1

Q10. あなたの高校卒業時の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください）。



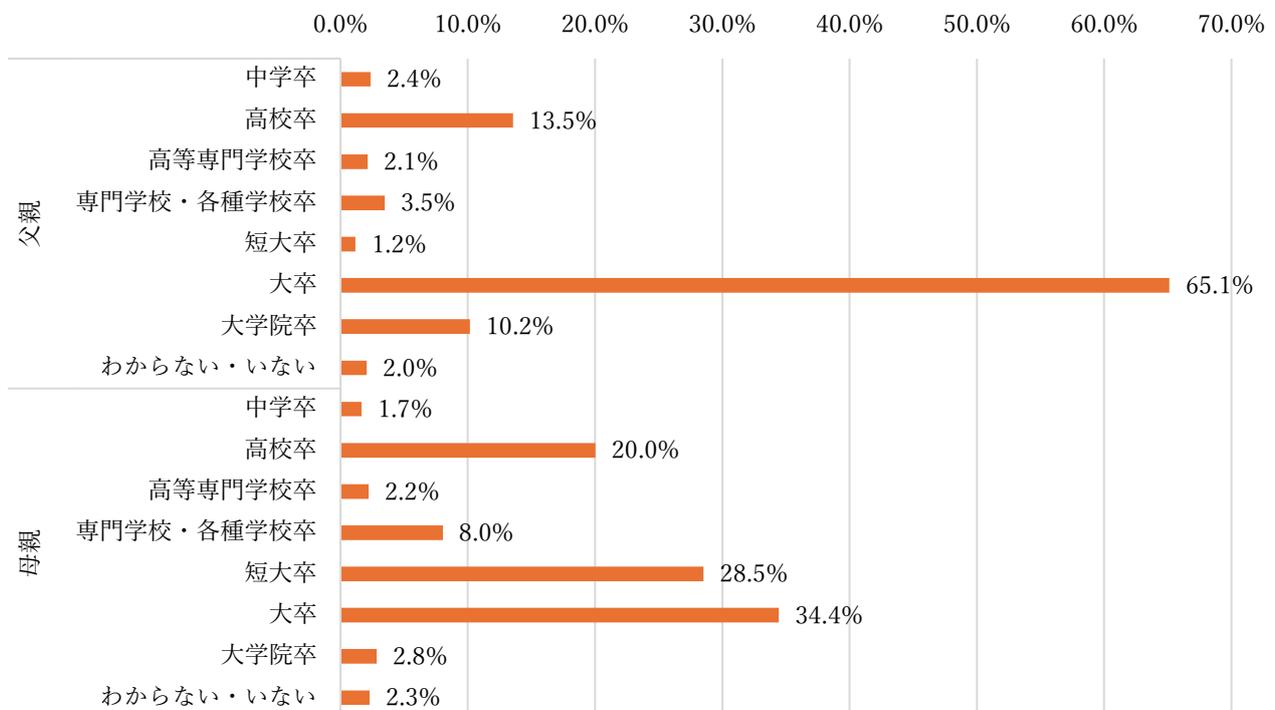
北海道	14	石川県	2	岡山県	8
青森県	11	福井県	4	広島県	18
岩手県	3	山梨県	5	山口県	7
宮城県	8	長野県	16	徳島県	3
秋田県	3	岐阜県	9	香川県	6
山形県	5	静岡県	19	愛媛県	3
福島県	12	愛知県	41	高知県	4
茨城県	27	三重県	12	福岡県	22
栃木県	15	滋賀県	6	佐賀県	5
群馬県	26	京都府	7	長崎県	5
埼玉県	169	大阪府	22	熊本県	5
千葉県	127	兵庫県	20	大分県	5
東京都	312	奈良県	8	宮崎県	3
神奈川県	169	和歌山県	3	鹿児島県	4
新潟県	12	鳥取県	1	海外	75
富山県	5	島根県	1		

Q11. あなたの現在の居住地について都道府県名をお選びください（海外の場合は海外をお選びください）。



北海道	8	石川県	2	岡山県	2
青森県	2	福井県	2	広島県	5
宮城県	2	山梨県	2	山口県	2
秋田県	1	長野県	7	香川県	1
山形県	1	岐阜県	4	愛媛県	1
福島県	7	静岡県	13	高知県	2
茨城県	14	愛知県	28	福岡県	19
栃木県	5	三重県	2	佐賀県	2
群馬県	5	滋賀県	2	熊本県	2
埼玉県	115	京都府	8	大分県	2
千葉県	74	大阪府	31	鹿児島県	1
東京都	614	兵庫県	18	沖縄県	1
神奈川県	162	奈良県	5	海外	84
新潟県	6	鳥取県	1		
富山県	3	島根県	1		

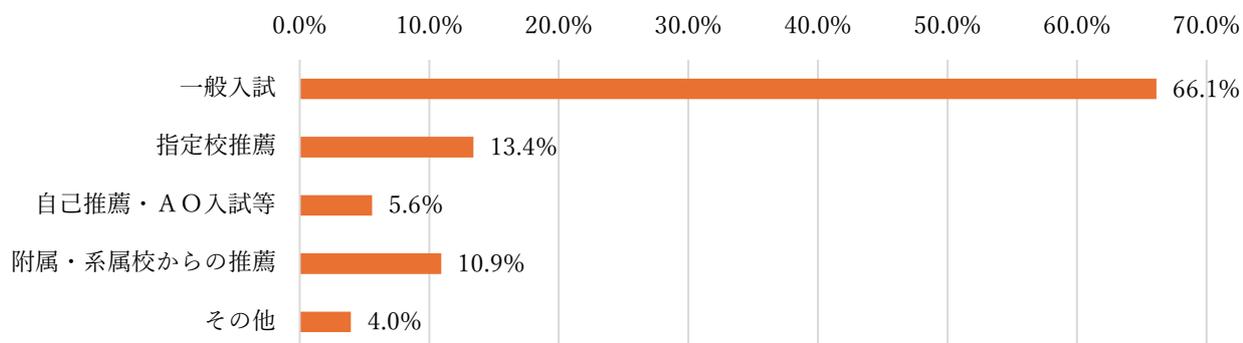
Q12. あなたのご両親の最終学歴をお選びください。



父親	中学卒	30
	高校卒	172
	高等専門学校卒	27
	専門学校・各種学校卒	44
	短大卒	15
	大卒	827
	大学院卒	129
	わからない・いない	26
母親	中学卒	21
	高校卒	254
	高等専門学校卒	28
	専門学校・各種学校卒	102
	短大卒	362
	大卒	437
	大学院卒	36
	わからない・いない	29

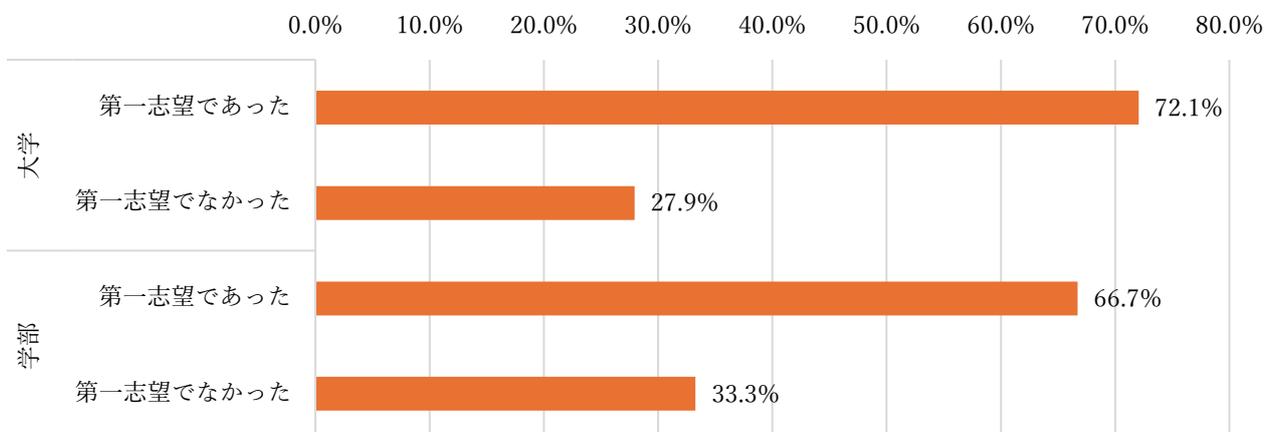
2. 学部入学時及び、学部在学時の経験について

Q13. あなたが大学（学部）に入学した試験の形態を、次の選択肢の中から一つだけお選びください。



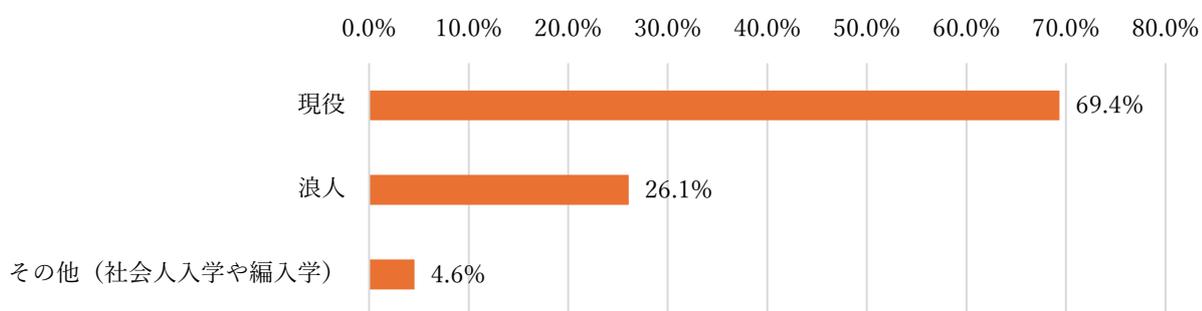
一般入試	769 (696)
指定校推薦	156 (153)
自己推薦・AO入試等	65 (57)
附属・系属校からの推薦	127 (123)
その他	46 (37)

Q14. 入学した大学は第一志望でしたか。また、入学した学部は第一志望でしたか。それぞれお選びください。



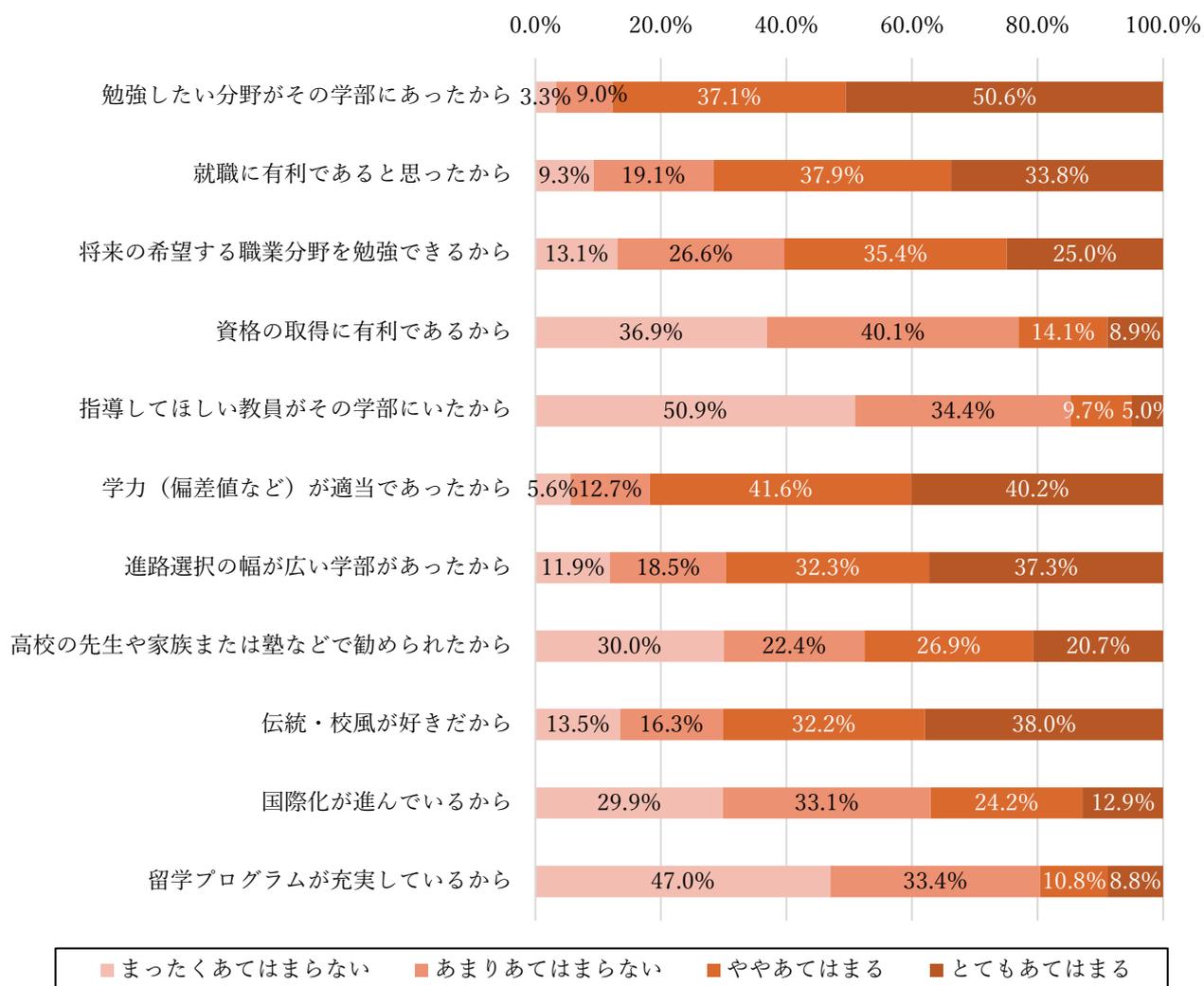
大学	第一志望であった	838 (780)
	第一志望でなかった	325 (286)
学部	第一志望であった	766 (693)
	第一志望でなかった	382 (359)

Q15. あなたは現役で入学しましたか（学部）。あてはまるものを一つだけお選びください。



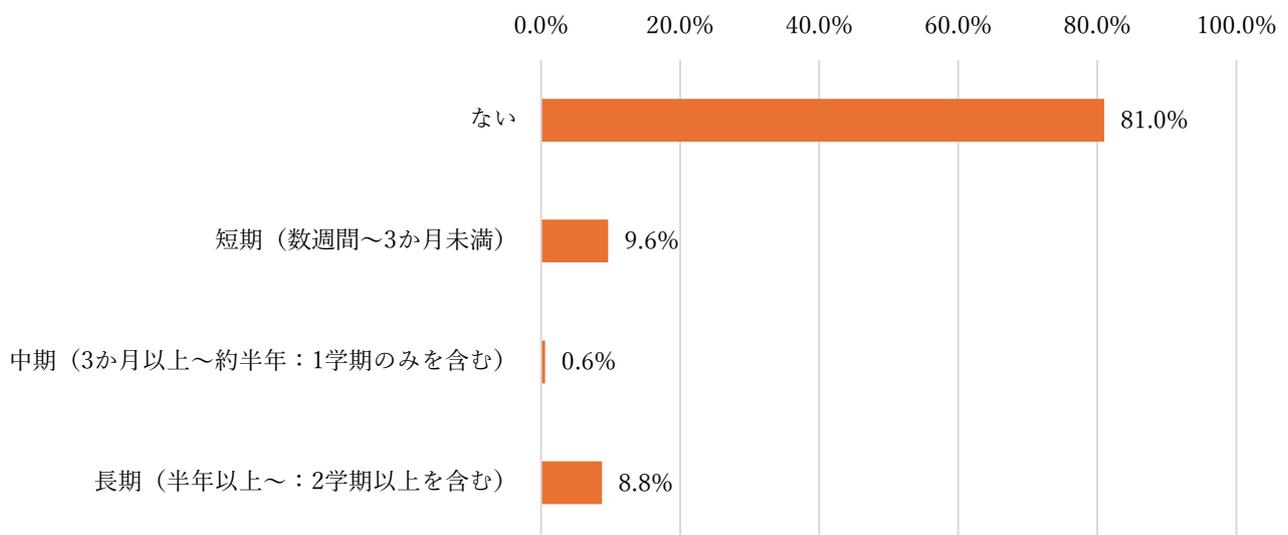
現役	806 (745)
浪人	303 (278)
その他（社会人入学や編入学）	53 (43)

Q16. 本学の受験を決めた理由として、次の項目はそれぞれどのくらいあてはまりますか。



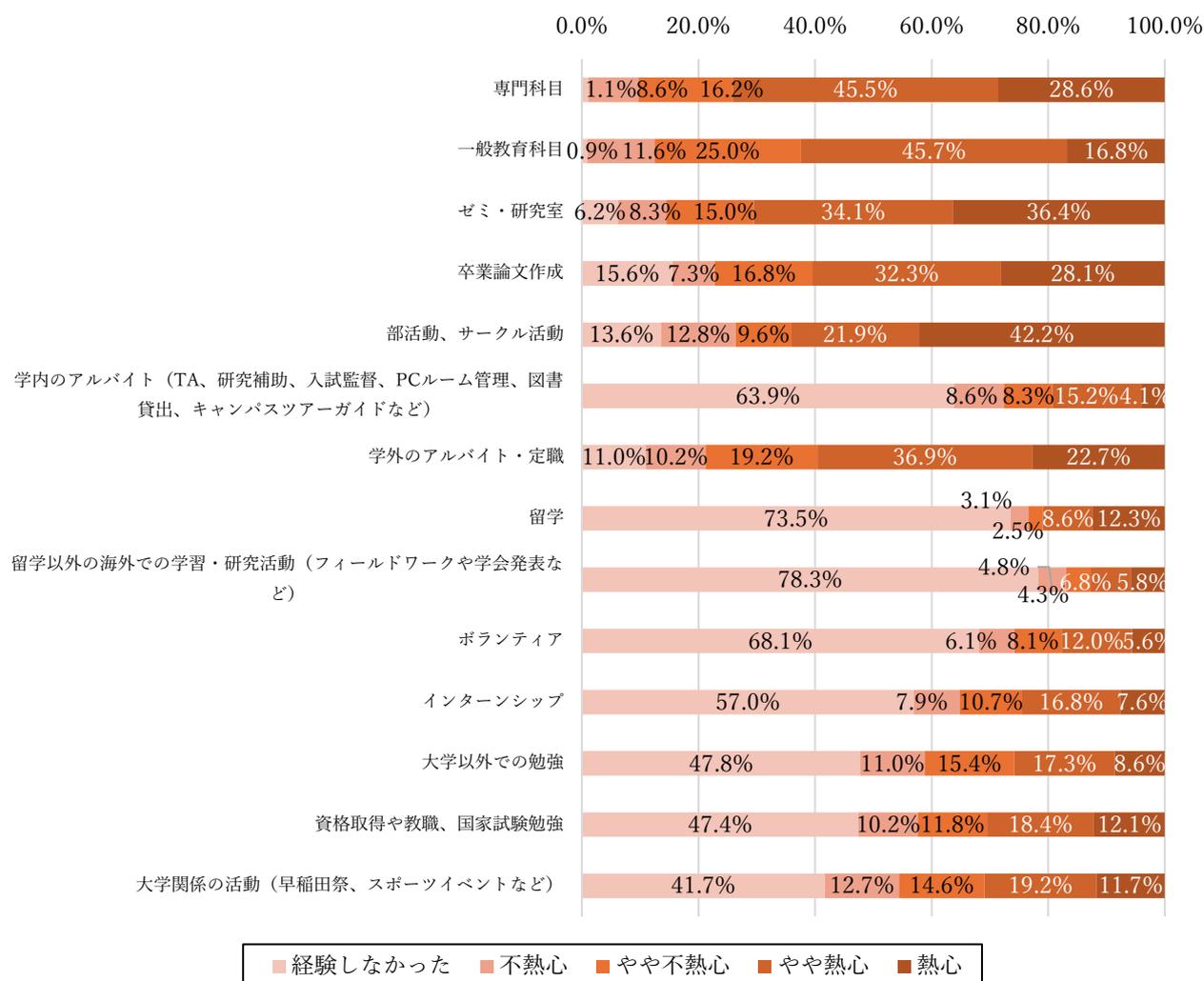
	まったく あてはまらない	あまり あてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる
勉強したい分野がその学部にあったから	35	95	393	535
就職に有利であると思ったから	98	202	401	358
将来の希望する職業分野を勉強できるから	138	281	374	264
資格の取得が有利であるから	389	423	149	94
指導してほしい教員がその学部にいるから	536	362	102	53
学力（偏差値など）が適当であったから	59	134	440	425
進路選択の幅が広い学部があったから	126	196	342	395
高校の先生や家族または塾などで勧められたから	317	237	284	219
伝統・校風が好きだから	143	173	341	402
国際化が進んでいるから	315	349	255	136
留学プログラムが充実しているから	496	353	114	93

Q17. 高校卒業までに留学したこと、海外に住んでいたことはありますか。



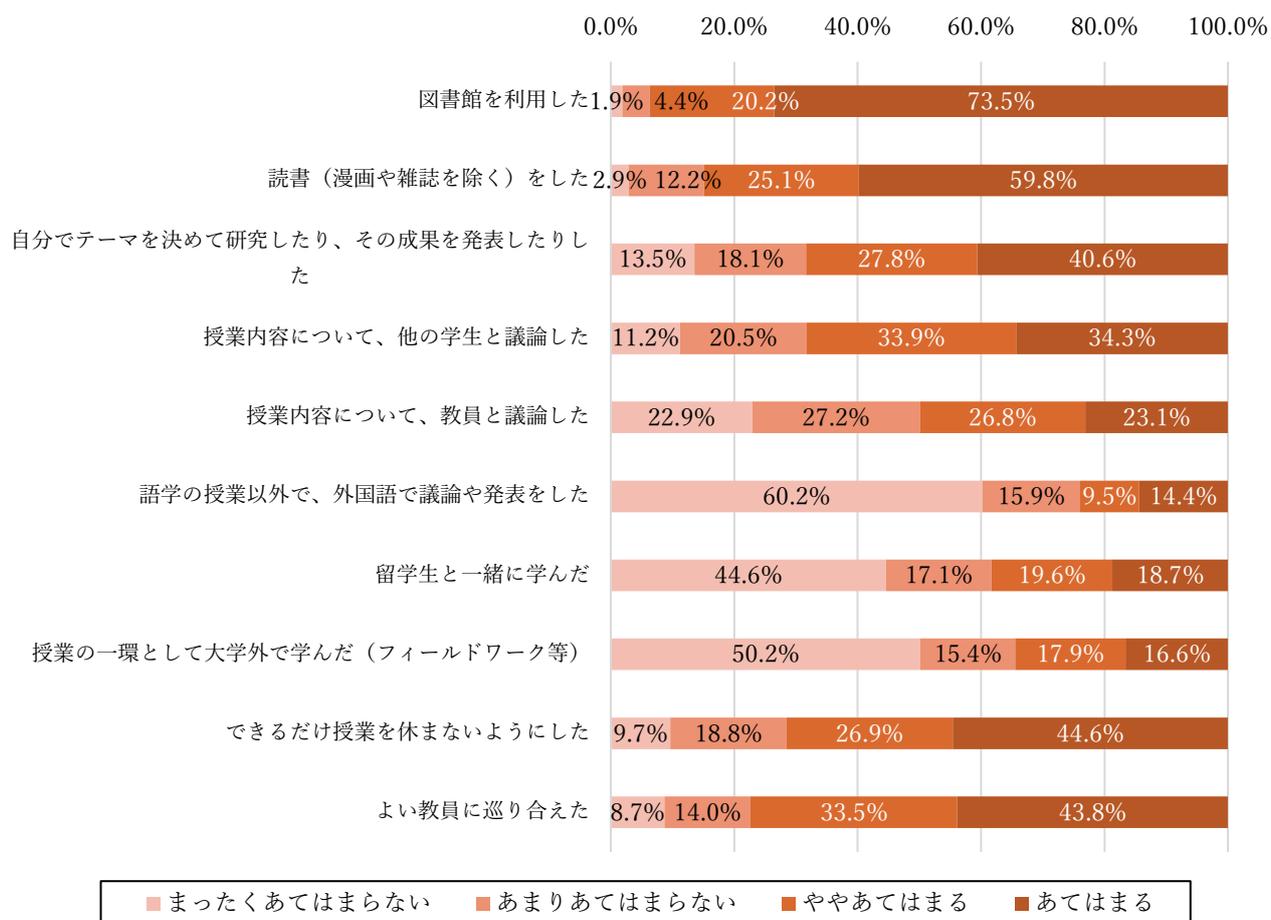
ない	942 (867)
短期（数週間～3か月未満）	112 (100)
中期（3か月以上～約半年：1学期のみを含む）	7 (7)
長期（半年以上～：2学期以上を含む）	102 (92)

Q18. 学部在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか。



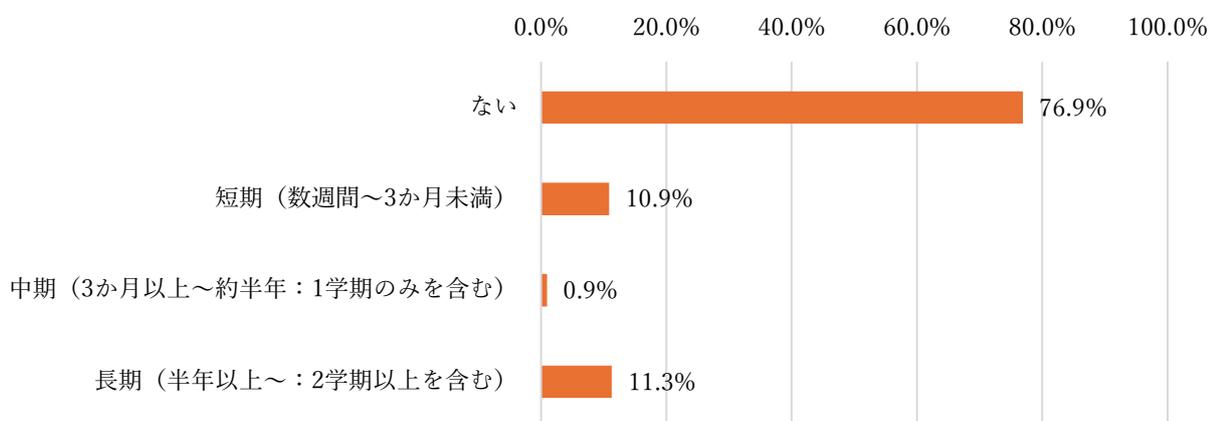
	経験しなかった	不熱心	やや不熱心	やや熱心	熱心
専門科目	13 (11)	99 (88)	186 (173)	524 (498)	329 (283)
一般教育科目	11 (5)	134 (122)	290 (269)	529 (500)	194 (164)
ゼミ・研究室	72 (60)	96 (87)	173 (162)	395 (369)	421 (383)
卒業論文作成	180 (167)	84 (77)	194 (177)	374 (346)	325 (293)
部活動、サークル活動	157 (137)	148 (133)	111 (97)	253 (229)	488 (464)
学内のアルバイト（TA、研究補助、入試監督、PCルーム管理、図書貸出、キャンパスツアーガイドなど）	739 (683)	99 (86)	96 (91)	176 (162)	47 (37)
学外のアルバイト・定職	127 (103)	118 (106)	222 (208)	426 (402)	262 (239)
留学	842 (783)	35 (33)	29 (25)	98 (85)	141 (118)
留学以外の海外での学習・研究活動（フィールドワークや学会発表など）	899 (841)	55 (50)	49 (41)	78 (67)	67 (52)
ボランティア	786 (733)	70 (65)	94 (80)	139 (125)	65 (55)
インターンシップ	657 (602)	91 (87)	123 (112)	194 (181)	88 (76)
大学以外での勉強	551 (517)	127 (121)	177 (164)	199 (178)	99 (77)
資格取得や教職、国家試験勉強	547 (499)	118 (113)	136 (129)	212 (196)	140 (119)
大学関係の活動（早稲田祭、スポーツイベントなど）	481 (448)	147 (132)	169 (156)	222 (205)	135 (117)

Q19. 学部在学中に、以下のような経験をしましたか。



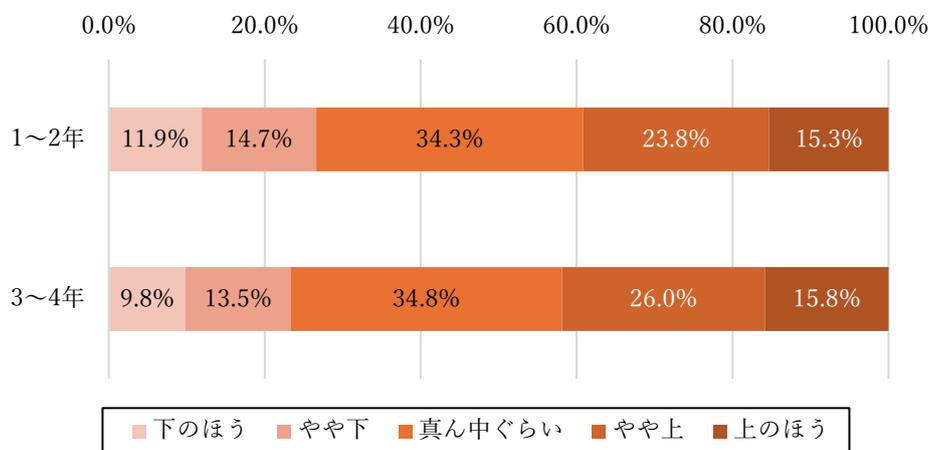
	まったくあて はまらない	あまりあて はまらない	ややあては まる	あてはまる
図書館を利用した	22 (18)	51 (44)	234 (212)	853 (789)
読書（漫画や雑誌を除く）をした	34 (28)	141 (130)	291 (275)	693 (630)
自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした	157 (142)	210 (196)	322 (303)	471 (422)
授業内容について、他の学生と議論した	130 (116)	238 (223)	393 (368)	398 (356)
授業内容について、教員と議論した	266 (245)	315 (296)	311 (291)	268 (231)
語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした	697 (646)	184 (170)	110 (99)	167 (146)
留学生と一緒に学んだ	517 (477)	198 (188)	227 (209)	217 (188)
授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）	581 (541)	178 (165)	207 (191)	192 (164)
できるだけ授業を休まないようにした	112 (100)	218 (207)	312 (290)	517 (465)
よい教員に巡り合えた	101 (91)	162 (147)	389 (361)	509 (465)

Q20. 学部在学中に留学をしたことはありますか。複数ある場合には、より長い期間を選んでください。



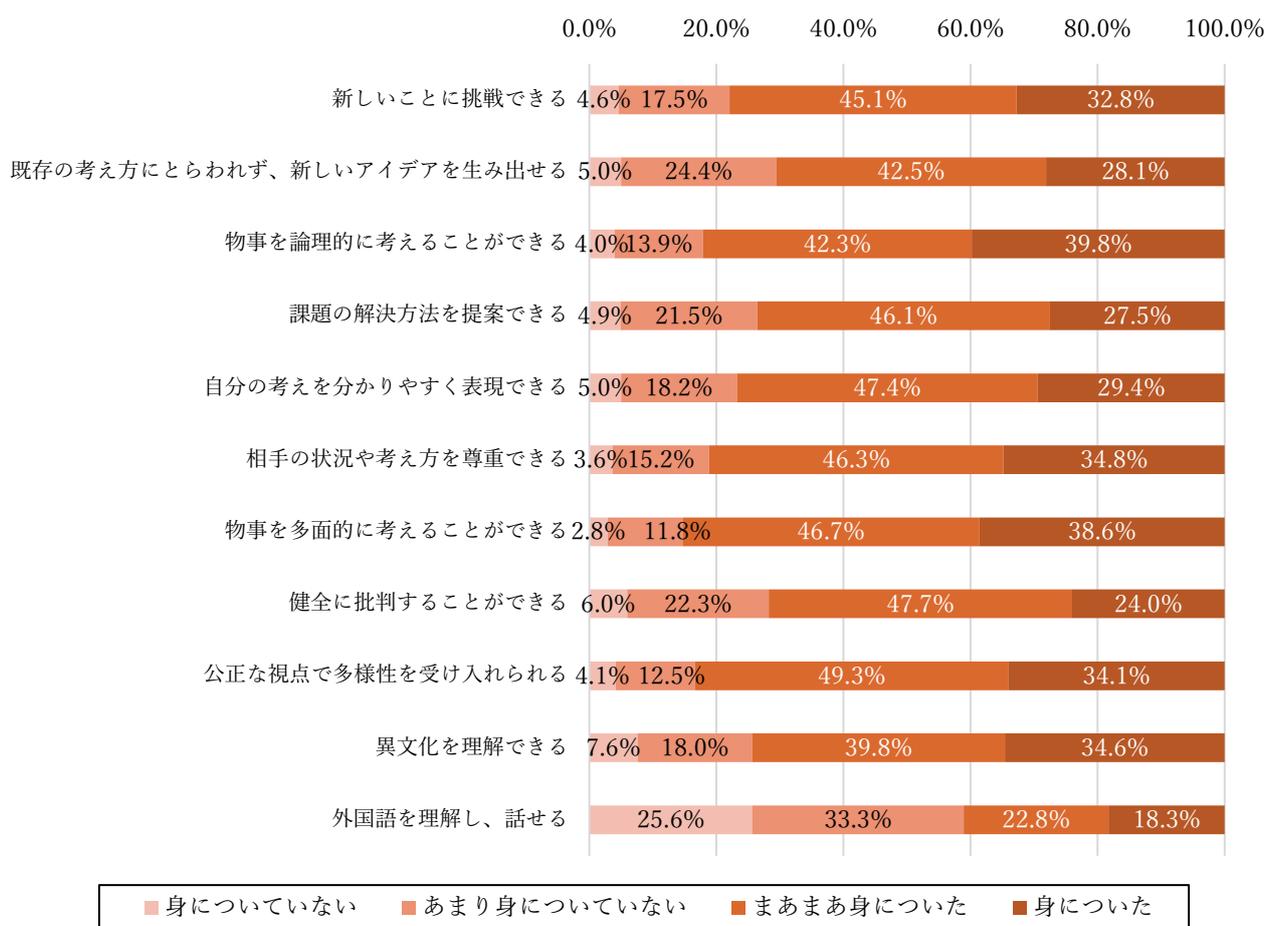
ない	892 (824)
短期（数週間～3か月未満）	126 (116)
中期（3か月以上～約半年：1学期のみを含む）	11 (6)
長期（半年以上～：2学期以上を含む）	131 (117)

Q21. 学部在学中において、あなたの成績は、全体的に学部の中でどのあたりでしたか。



	下のほう	やや下	真ん中ぐらい	やや上	上のほう
1～2年	137 (128)	169 (153)	394 (371)	274 (253)	176 (150)
3～4年	113 (105)	155 (146)	400 (377)	299 (270)	182 (156)

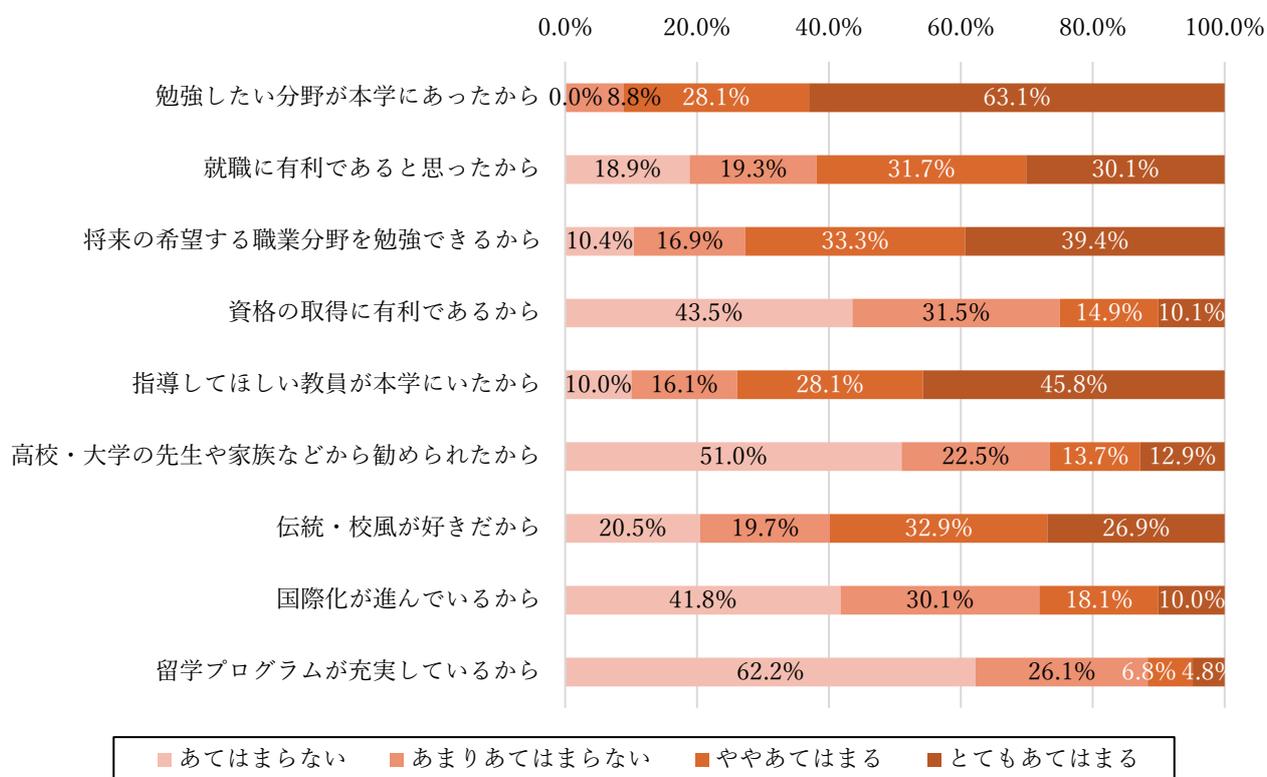
Q22. 学部で次のようなことをどの程度身につけましたか。



	身について いない	あまり身に ついていない	まあまあ 身についた	身についた
新しいことに挑戦できる	53 (47)	203 (191)	523 (491)	380 (334)
既存の考え方にとらわれず、新しいアイデアを生み出せる	58 (49)	283 (266)	492 (459)	326 (288)
物事を論理的に考えることができる	46 (38)	161 (147)	491 (454)	462 (424)
課題の解決方法を提案できる	57 (48)	249 (226)	534 (499)	319 (290)
自分の考えを分かりやすく表現できる	58 (49)	211 (192)	549 (508)	341 (314)
相手の状況や考え方を尊重できる	42 (37)	176 (160)	536 (493)	403 (371)
物事を多面的に考えることができる	33 (28)	137 (126)	541 (494)	447 (414)
健全に批判することができる	69 (63)	258 (231)	552 (515)	278 (253)
公正な視点で多様性を受け入れられる	48 (42)	145 (130)	571 (533)	395 (358)
異文化を理解できる	88 (76)	209 (197)	461 (423)	401 (367)
外国語を理解し、話せる	297 (270)	386 (366)	264 (242)	212 (185)

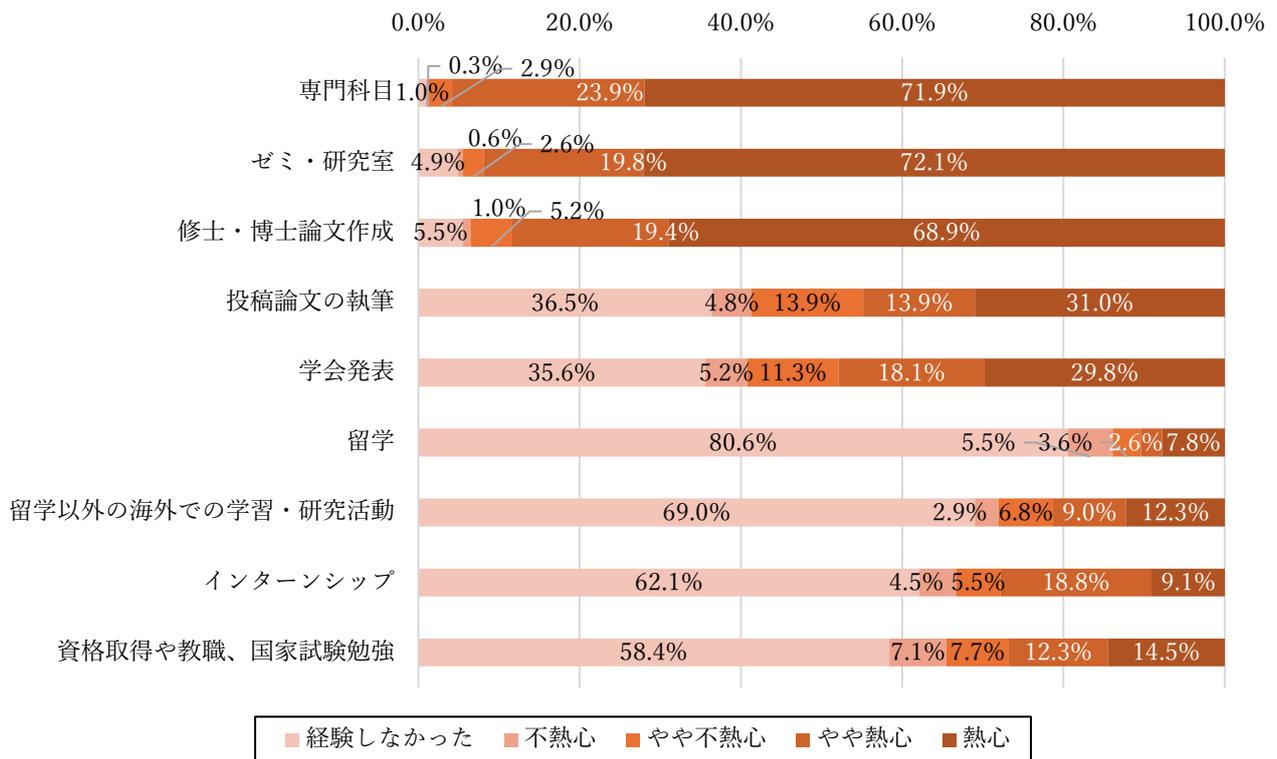
3. 大学院受験時及び、大学院在学時について

Q23. 本学大学院の受験を決めた理由として、次の項目はそれぞれどのくらいあてはまりますか。



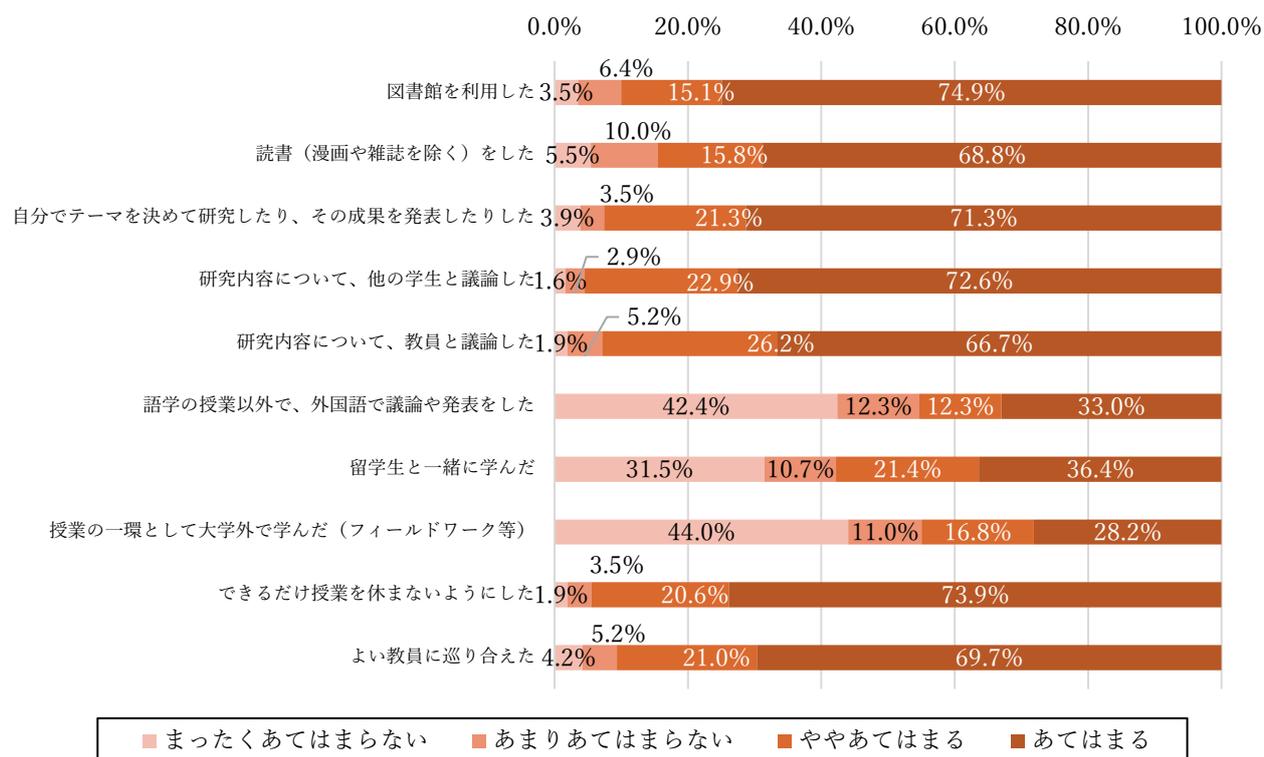
	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	とてもあてはまる
勉強したい分野が本学にあったから	0	22	70	157
就職に有利であると思ったから	47	48	79	75
将来の希望する職業分野を勉強できるから	26	42	83	98
資格の取得に有利であるから	108	78	37	25
指導してほしい教員が本学にいたから	25	40	70	114
高校・大学の先生や家族などから勧められたから	127	56	34	32
伝統・校風が好きだから	51	49	82	67
国際化が進んでいるから	104	75	45	25
留学プログラムが充実しているから	155	65	17	12

Q24. 大学院在学中において、次のような活動にどのくらい熱心に取り組んでいましたか。



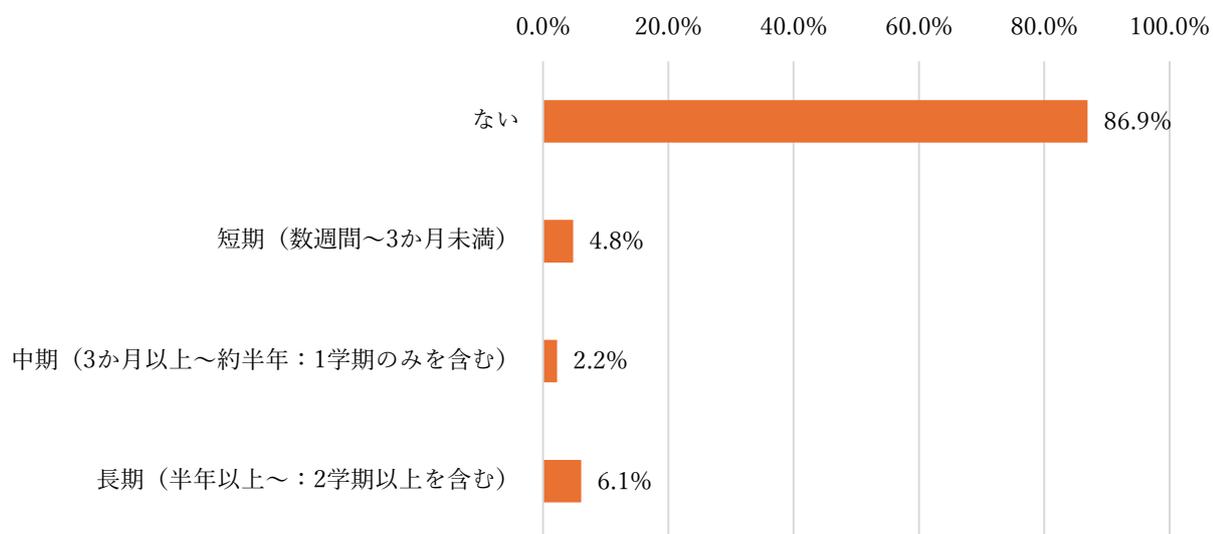
	経験しなかった	不熱心	やや不熱心	やや熱心	熱心
専門科目	3	1	9	74	223
ゼミ・研究室	15	2	8	61	222
修士・博士論文作成	17	3	16	60	213
投稿論文の執筆	113	15	43	43	96
学会発表	110	16	35	56	92
留学	249	17	11	8	24
留学以外の海外での学習・研究活動	214	9	21	28	38
インターンシップ	192	14	17	58	28
資格取得や教職、国家試験勉強	181	22	24	38	45

Q25. 大学院在学中に、以下のような経験をしましたか。



	まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる
図書館を利用した	11	20	47	233
読書（漫画や雑誌を除く）をした	17	31	49	214
自分でテーマを決めて研究したり、その成果を発表したりした	12	11	66	221
研究内容について、他の学生と議論した	5	9	71	225
研究内容について、教員と議論した	6	16	81	206
語学の授業以外で、外国語で議論や発表をした	131	38	38	102
留学生と一緒に学んだ	97	33	66	112
授業の一環として大学外で学んだ（フィールドワーク等）	136	34	52	87
できるだけ授業を休まないようにした	6	11	64	229
よい教員に巡り合えた	13	16	65	216

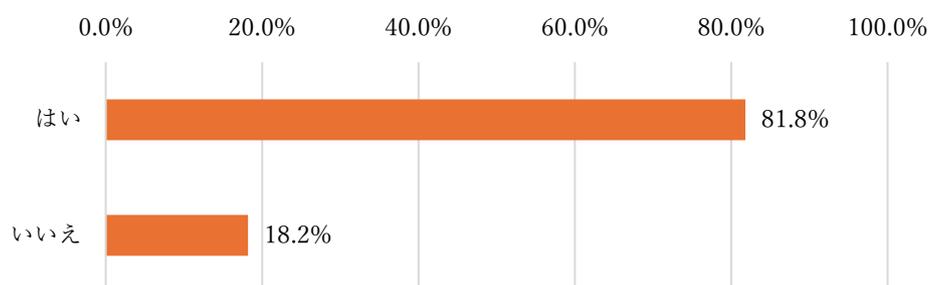
Q26. 大学院在学中に留学をしたことはありますか。複数ある場合には、より長い期間を選んでください。



ない	272
短期 (数週間～3か月未満)	15
中期 (3か月以上～約半年：1学期のみを含む)	7
長期 (半年以上～：2学期以上を含む)	19

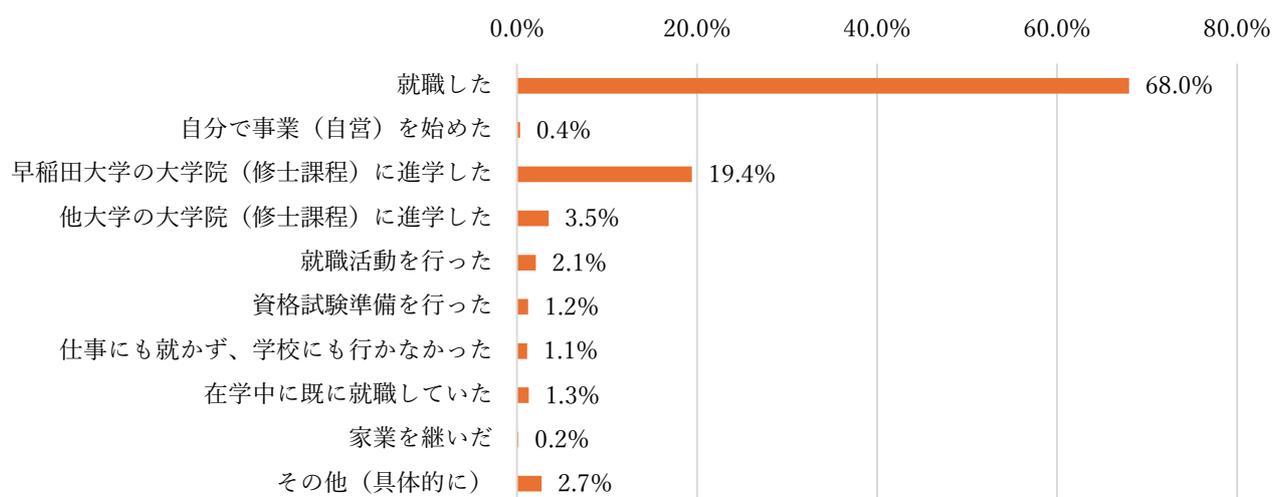
4. 卒業・修了後の経験・生活

Q27. あなたは学部を4年間で卒業しましたか。



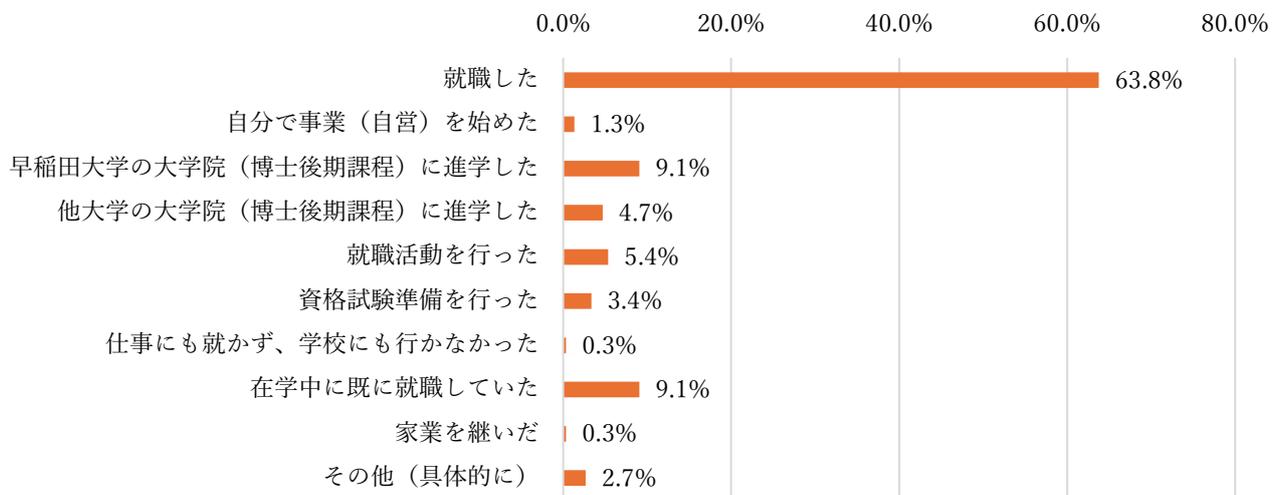
はい	926
いいえ	206

Q28. あなたは学部卒業時にどのような進路選択をしましたか。該当するものを一つだけお選びください。



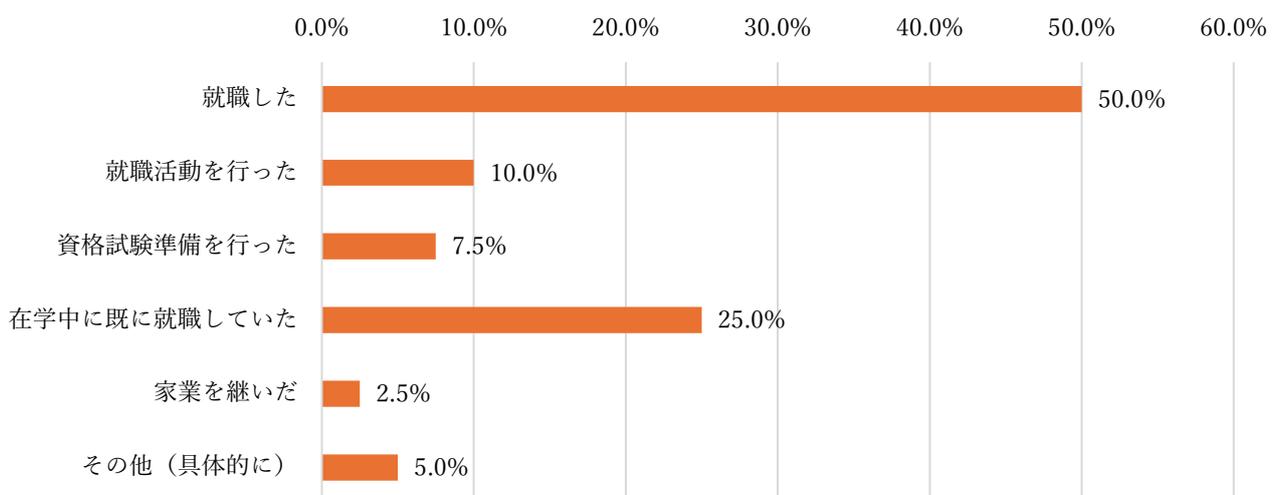
就職した	773	資格試験準備を行った	14
自分で事業（自営）を始めた	4	仕事にも就かず、学校にも行かなかった	13
早稲田大学の大学院（修士課程）に進学した	221	在学中に既に就職していた	15
他大学の大学院（修士課程）に進学した	40	家業を継いだ	2
就職活動を行った	24	その他（具体的に）	31

Q29. あなたは大学院（修士課程）修了時にどのような進路選択をしましたか。該当するものを一つだけお選びください。



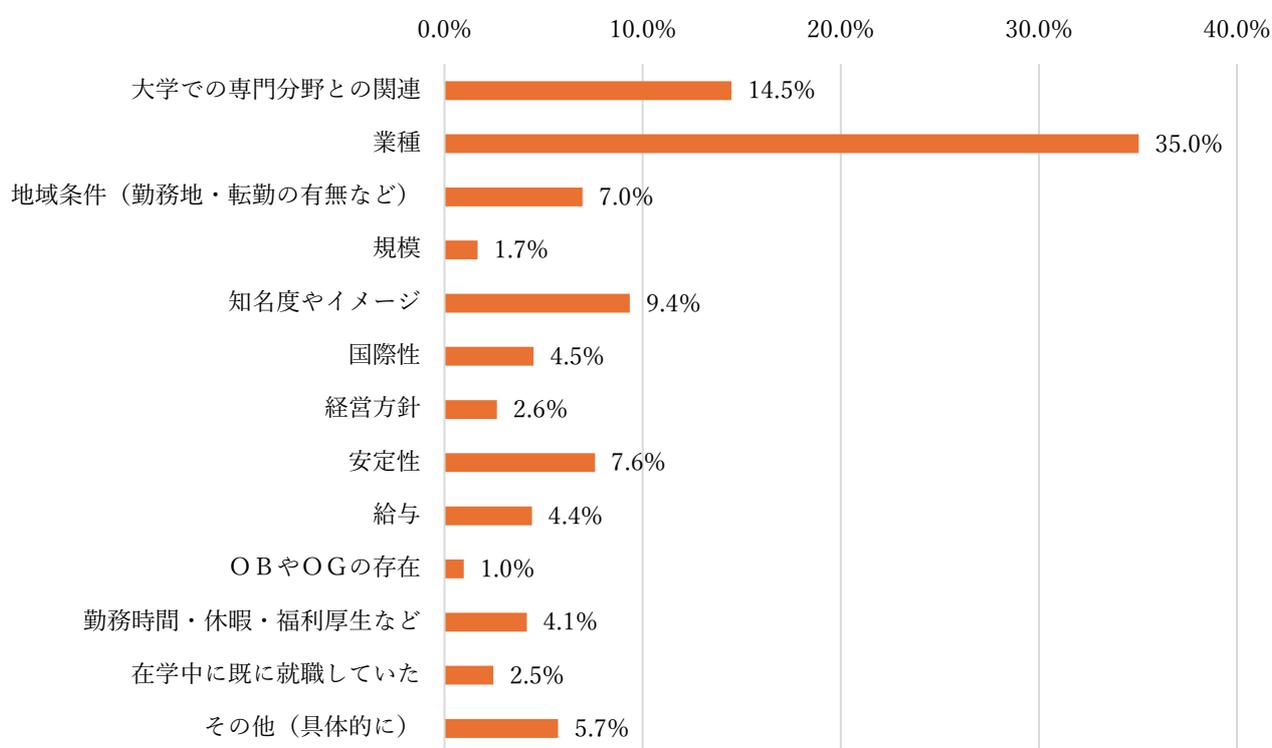
就職した	190	資格試験準備を行った	10
自分で事業（自営）を始めた	4	仕事にも就かず、学校にも行かなかった	1
早稲田大学の大学院（博士後期課程）に進学した	27	在学中に既に就職していた	27
他大学の大学院（博士後期課程）に進学した	14	家業を継いだ	1
就職活動を行った	16	その他（具体的に）	8

Q30. あなたは大学院（博士後期課程）修了時にどのような進路選択をしましたか。該当するものを一つだけお選びください。



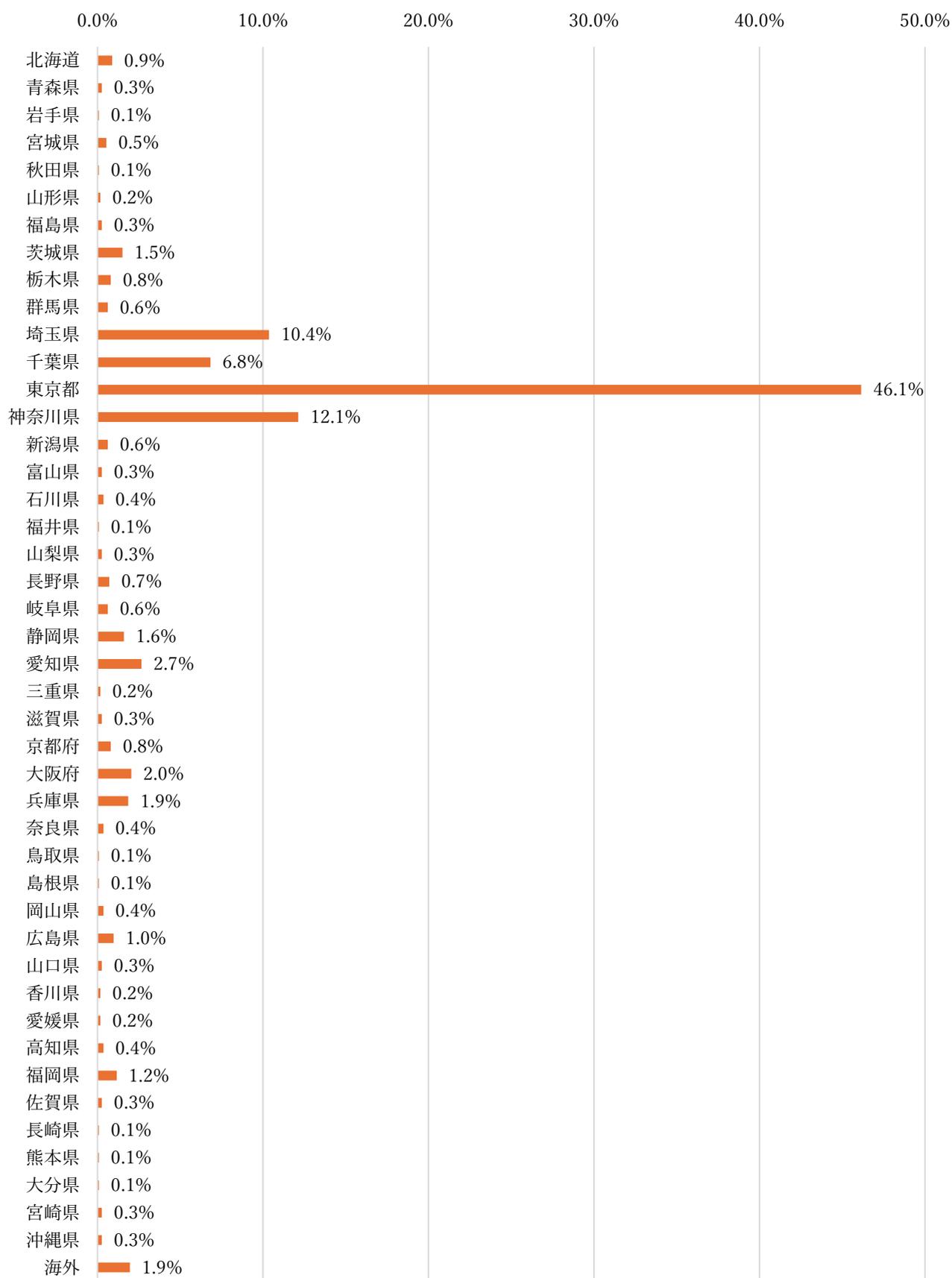
就職した	20
就職活動を行った	4
資格試験準備を行った	3
在学中に既に就職していた	10
家業を継いだ	1
その他（具体的に）	2

Q31. 学部・大学院等の卒業・修了後最初の就職先を決定するに当たって最も重視したことは何ですか。該当するものを一つだけお選びください。



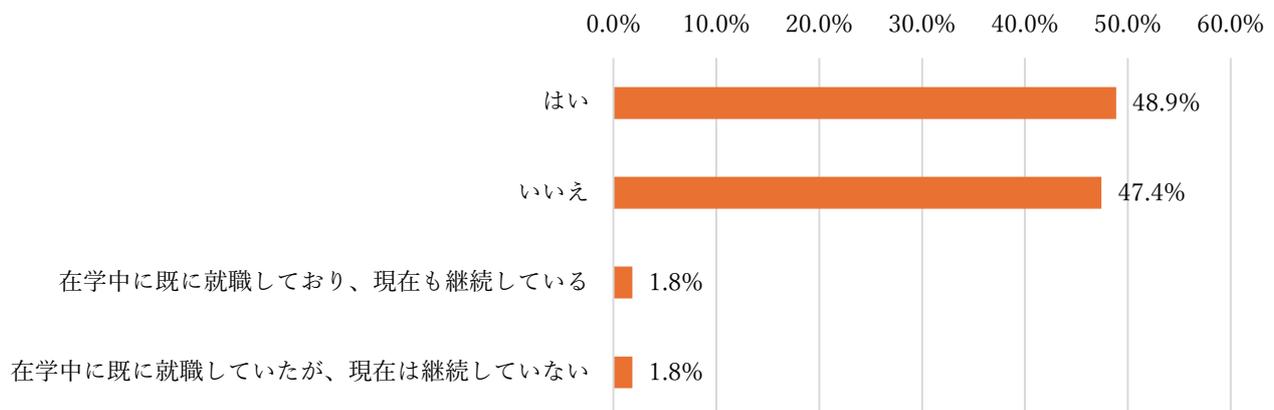
大学での専門分野との関連	164	安定性	86
業種	397	給与	50
地域条件（勤務地・転勤の有無など）	79	OBやOGの存在	11
規模	19	勤務時間・休暇・福利厚生など	47
知名度やイメージ	106	在学中に既に就職していた	28
国際性	51	その他（具体的に）	65
経営方針	30		

Q32. 学部・大学院等の卒業・修了後最初の居住地について都道府県名をお選びください。



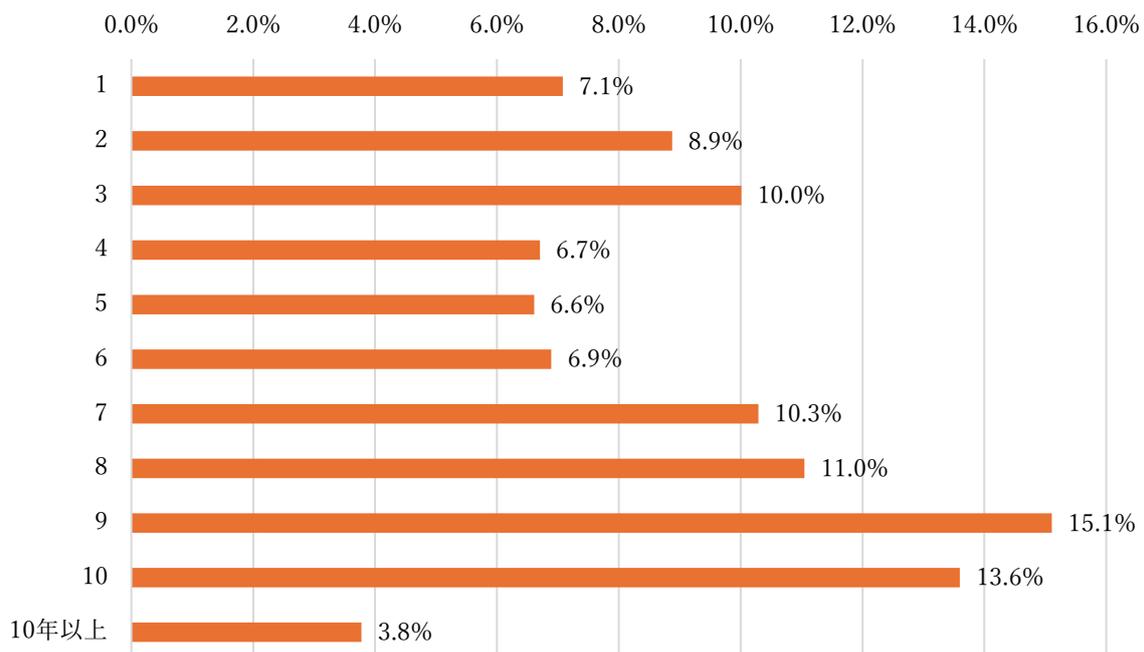
北海道	10	富山県	3	島根県	1
青森県	3	石川県	4	岡山県	4
岩手県	1	福井県	1	広島県	11
宮城県	6	山梨県	3	山口県	3
秋田県	1	長野県	8	香川県	2
山形県	2	岐阜県	7	愛媛県	2
福島県	3	静岡県	18	高知県	4
茨城県	17	愛知県	30	福岡県	13
栃木県	9	三重県	2	佐賀県	3
群馬県	7	滋賀県	3	長崎県	1
埼玉県	117	京都府	9	熊本県	1
千葉県	77	大阪府	23	大分県	1
東京都	521	兵庫県	21	宮崎県	3
神奈川県	137	奈良県	4	沖縄県	3
新潟県	7	鳥取県	1	海外	22

Q33. 学部・大学院等の卒業・修了後最初に就いたお仕事は、現在も継続されていますか。出向や転勤などで異動している場合は、同じ会社・団体・組織としてください。



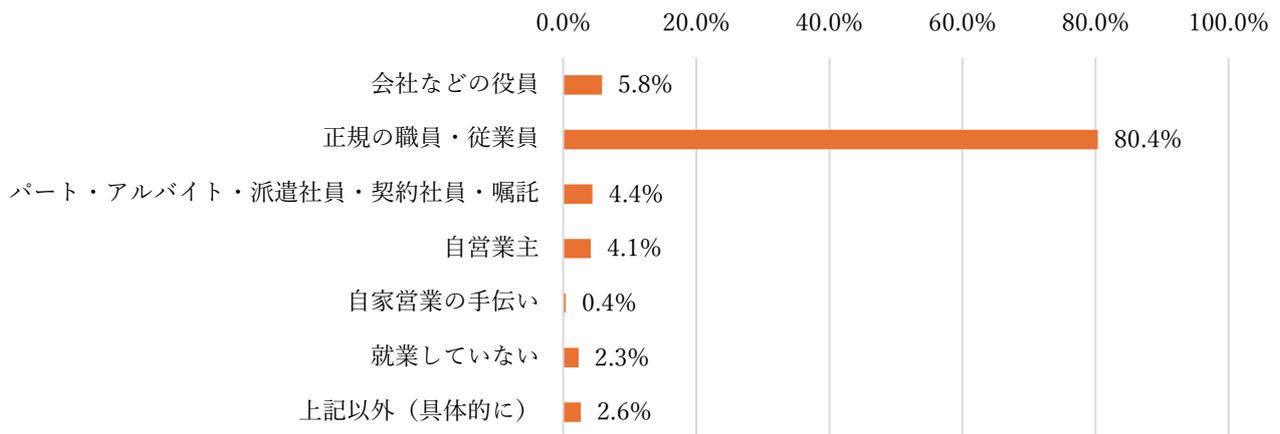
はい	555
いいえ	539
在学中に既に就職しており、現在も継続している	21
在学中に既に就職していたが、現在は継続していない	21

Q34. 学部・大学院等の卒業・修了後最初に就いたお仕事の勤続年数を記入してください。



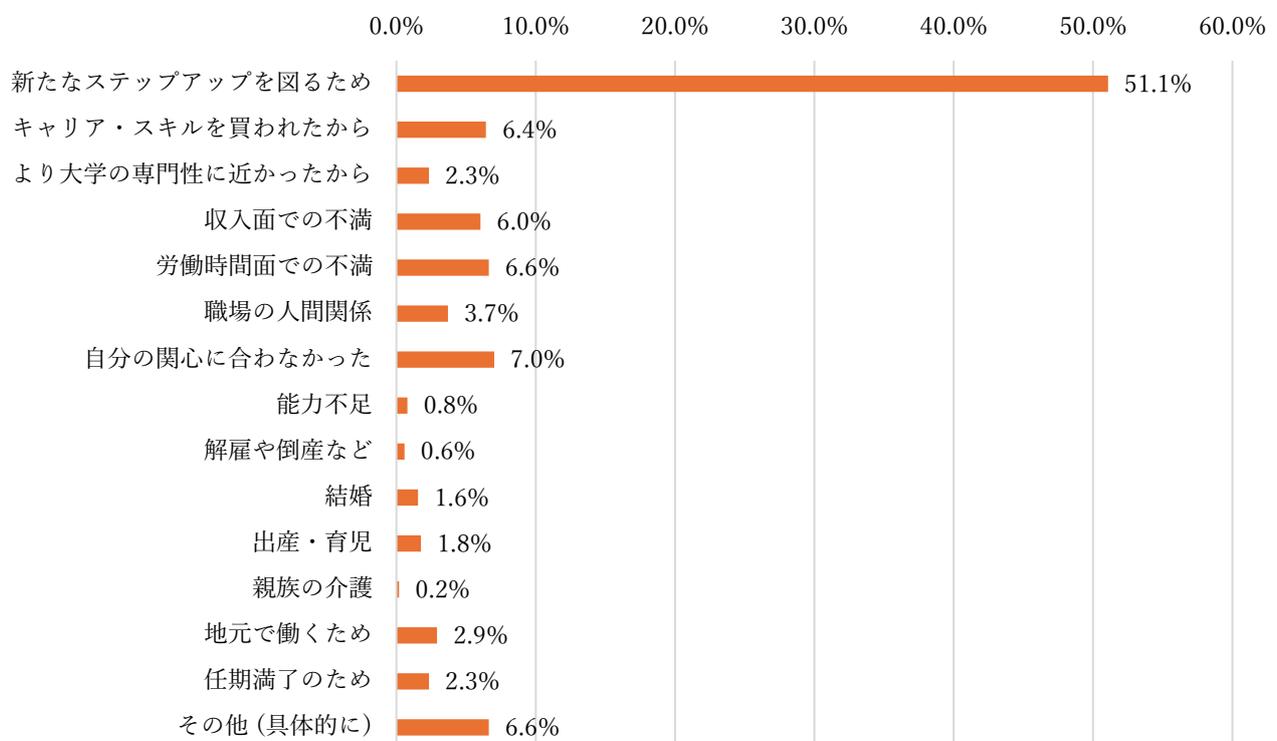
1	75	6	73
2	94	7	109
3	106	8	117
4	71	9	160
5	70	10	144
6	73	10年以上	40

Q35. あなたの現在の就業形態について、該当するものを一つだけお選びください。



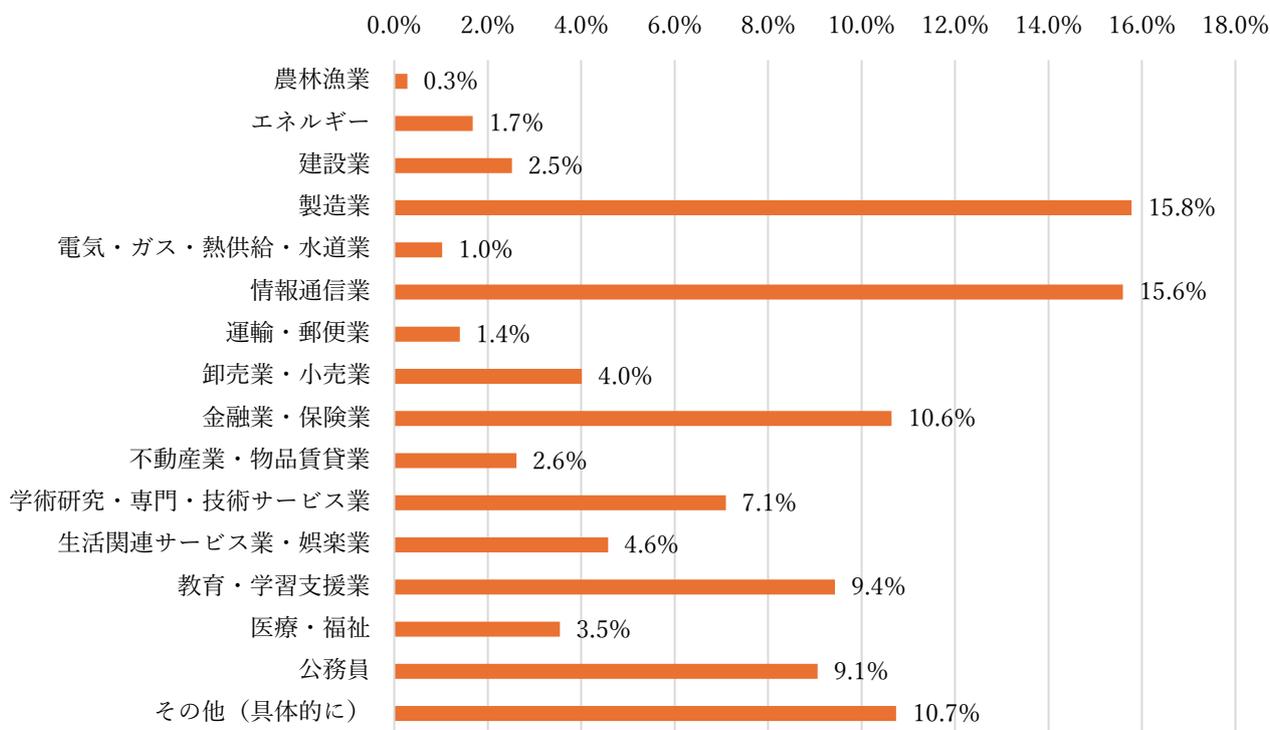
会社などの役員	66	自家営業の手伝い	4
正規の職員・従業員	912	就業していない	26
パート・アルバイト・派遣社員・契約社員・嘱託	50	上記以外（具体的に）	30
自営業主	47		

Q36. 転職または辞職された理由は何ですか。最も大きい理由を一つだけお選びください。



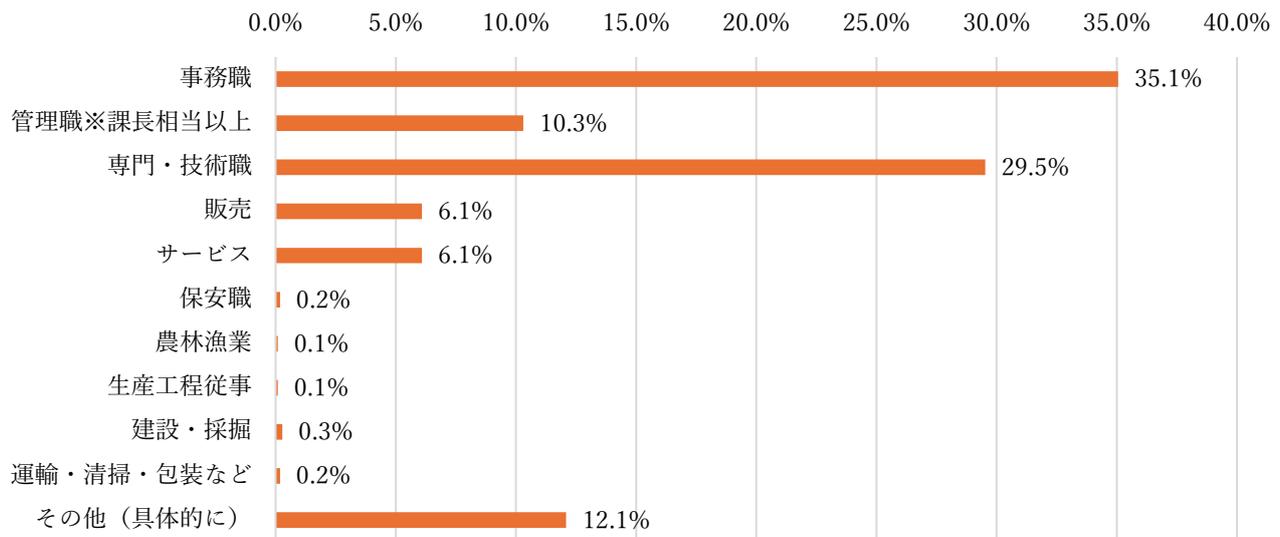
新たなステップアップを図るため	262	解雇や倒産など	3
キャリア・スキルを買われたから	33	結婚	8
より大学の専門性に近かったから	12	出産・育児	9
収入面での不満	31	親族の介護	1
労働時間面での不満	34	地元で働くため	15
職場の人間関係	19	任期満了のため	12
自分の関心に合わなかった	36	その他（具体的に）	34
能力不足	4		

Q37. 現在働いている企業・団体等の業種について、該当するものを一つだけお選びください。



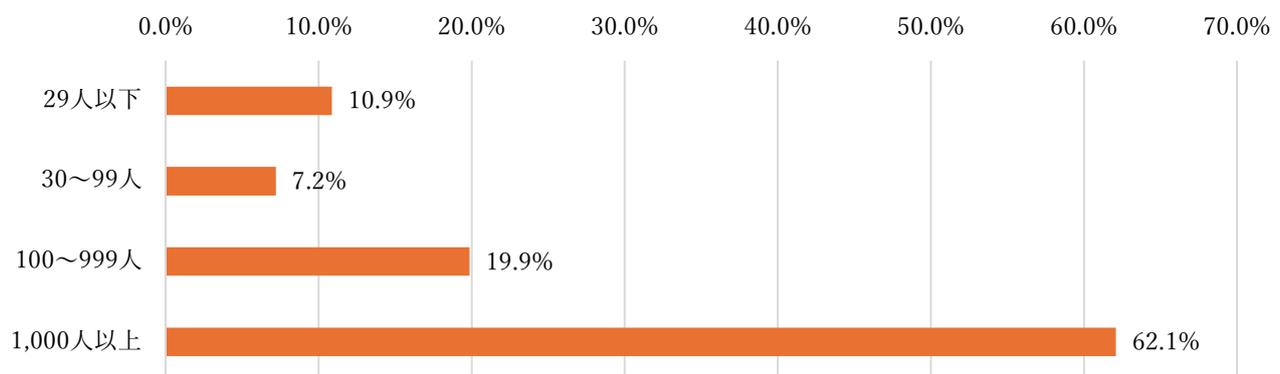
農林漁業	3	金融業・保険業	114
エネルギー	18	不動産業・物品賃貸業	28
建設業	27	学術研究・専門・技術サービス業	76
製造業	169	生活関連サービス業・娯楽業	49
電気・ガス・熱供給・水道業	11	教育・学習支援業	101
情報通信業	167	医療・福祉	38
運輸・郵便業	15	公務員	97
卸売業・小売業	43	その他（具体的に）	115

Q38. 現在働いている企業・団体等の職種について、該当するものを一つだけお選びください。



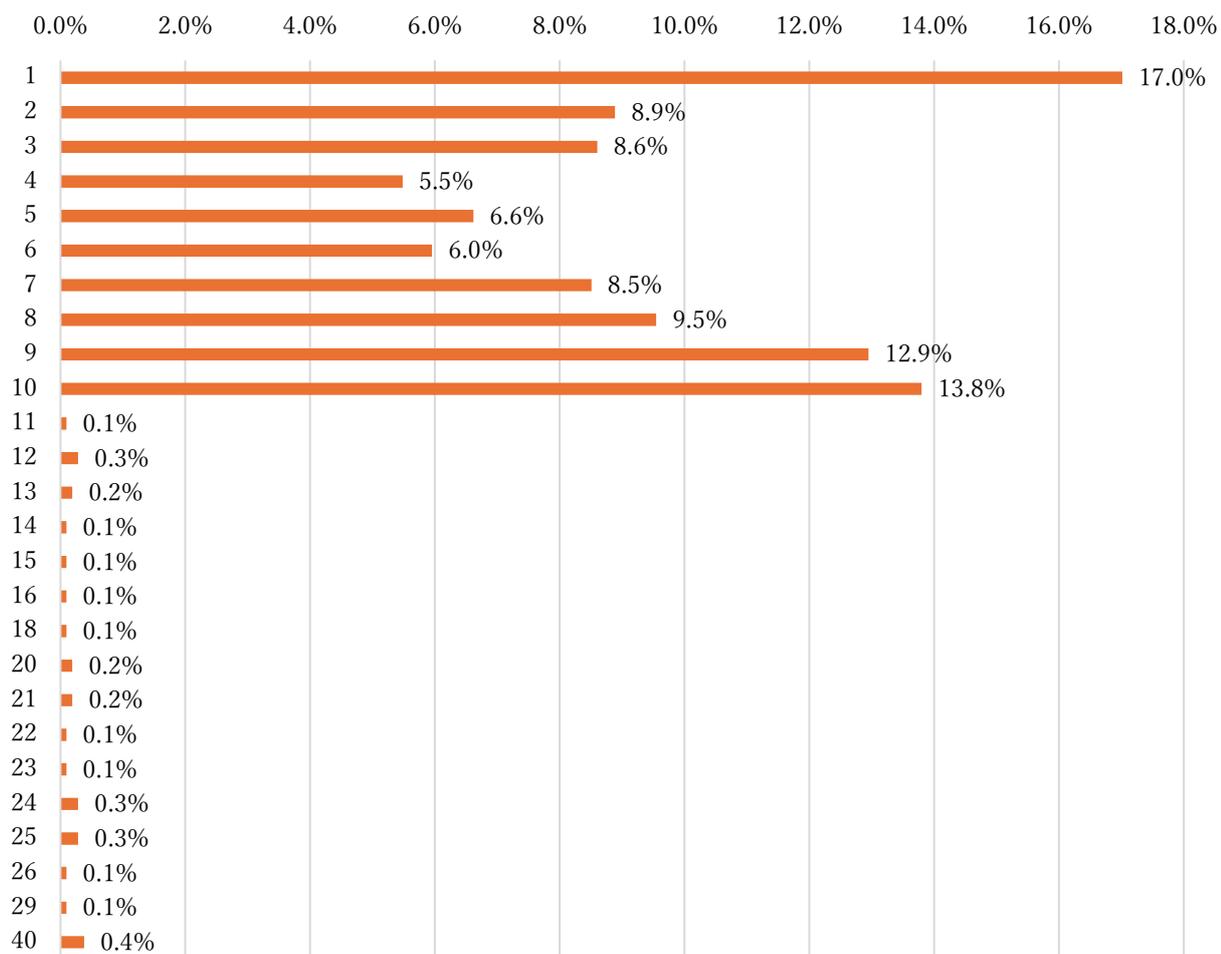
事務職	374	農林漁業	1
管理職※課長相当以上	110	生産工程従事	1
専門・技術職	315	建設・採掘	3
販売	65	運輸・清掃・包装など	2
サービス	65	その他 (具体的に)	129
保安職	2		

Q39. 現在働いている企業・団体等の従業員規模について、該当するものを一つだけお選びください。



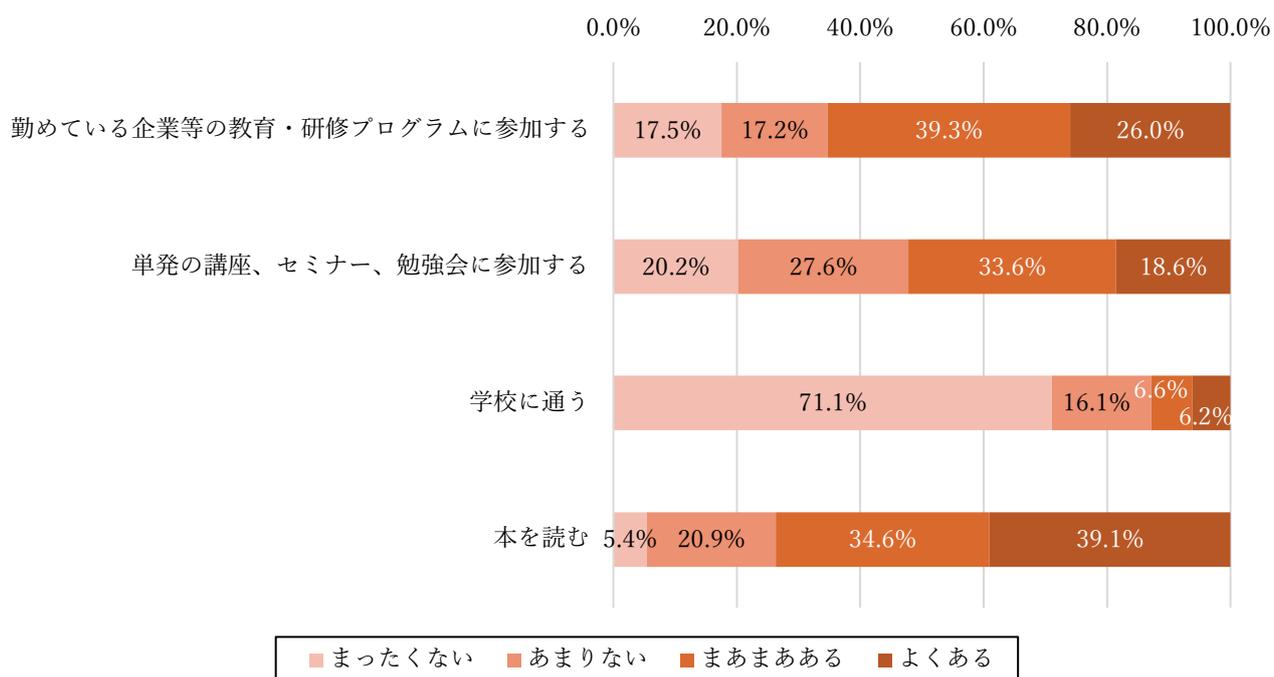
29人以下	116	100~999人	212
30~99人	77	1,000人以上	663

Q40. 現在のお仕事の勤続年数を記入してください。



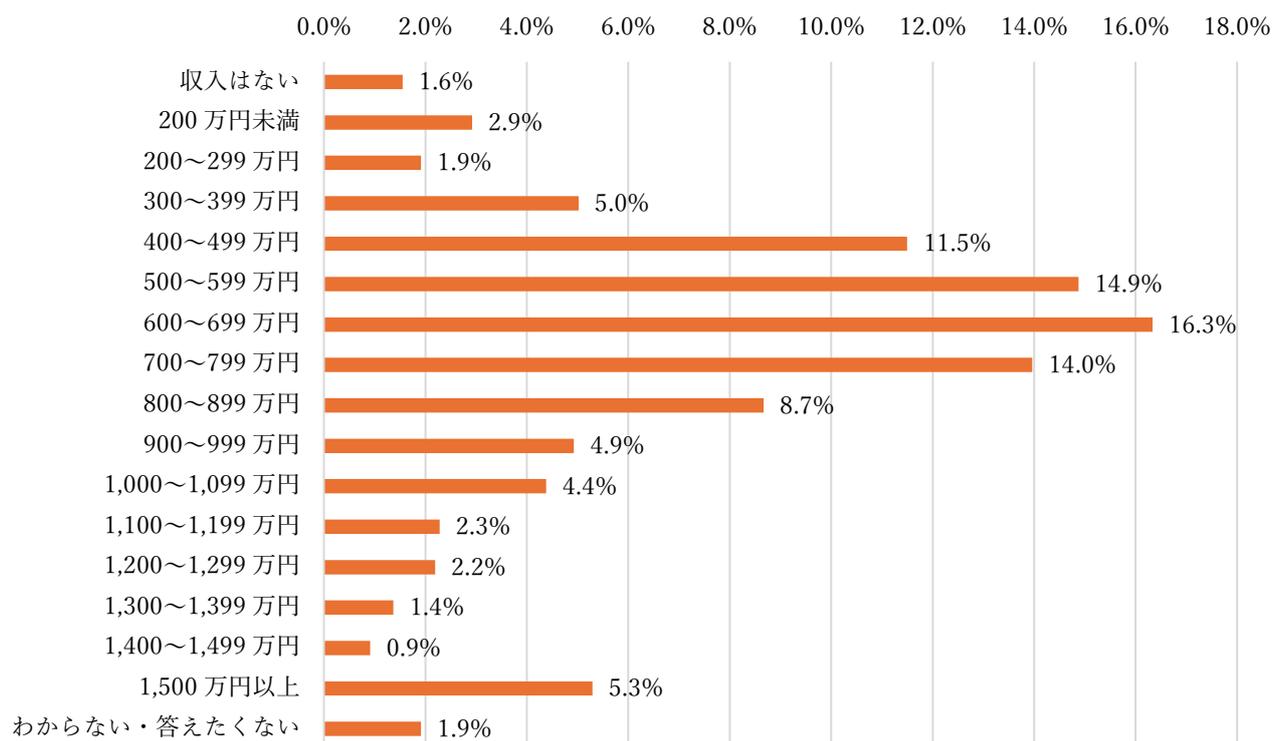
1	180	14	1
2	94	15	1
3	91	16	1
4	58	18	1
5	70	20	2
6	63	21	2
7	90	22	1
8	101	23	1
9	137	24	3
10	146	25	3
11	1	26	1
12	3	29	1
13	2	40	4

Q41. 現在の学習活動について、最もあてはまるものをお選びください。



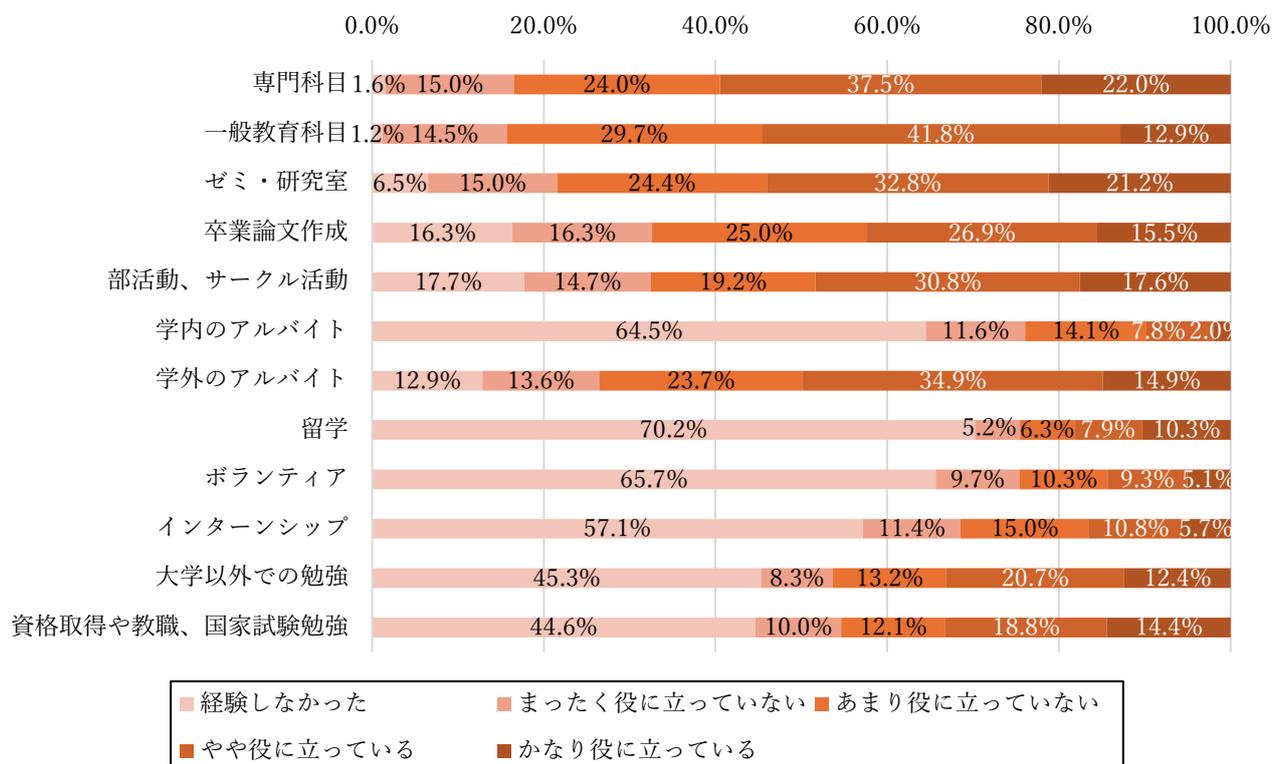
	まったくない	あまりない	まあまあある	よくある
勤めている企業等の教育・研修プログラムに参加する	191	187	428	283
単発の講座、セミナー、勉強会に参加する	221	301	367	203
学校に通う	776	176	72	68
本を読む	59	228	377	426

Q42. あなたの現在の年収（税込）について、該当するものを一つだけお選びください。



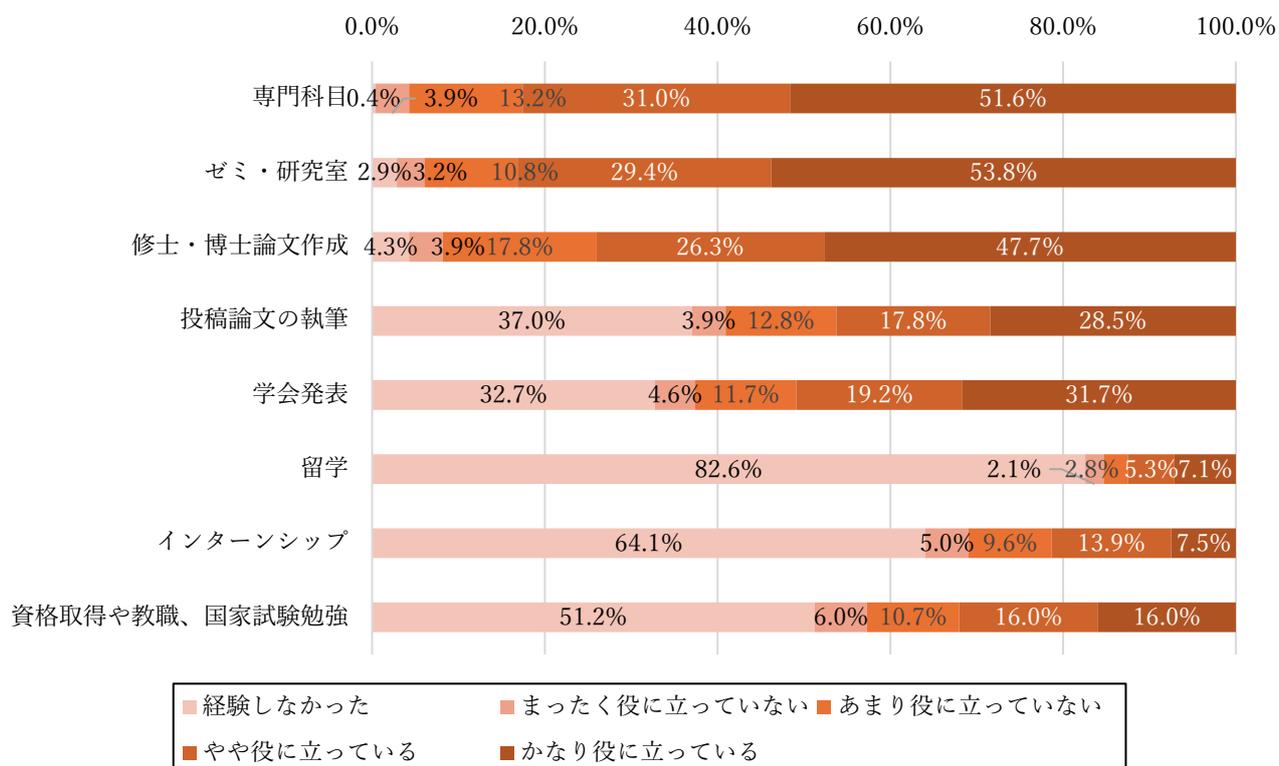
収入はない	17	900～999万円	54
200万円未満	32	1,000～1,099万円	48
200～299万円	21	1,100～1,199万円	25
300～399万円	55	1,200～1,299万円	24
400～499万円	126	1,300～1,399万円	15
500～599万円	163	1,400～1,499万円	10
600～699万円	179	1,500万円以上	58
700～799万円	153	わからない・答えたくない	21
800～899万円	95		

Q43. あなたの学部時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。



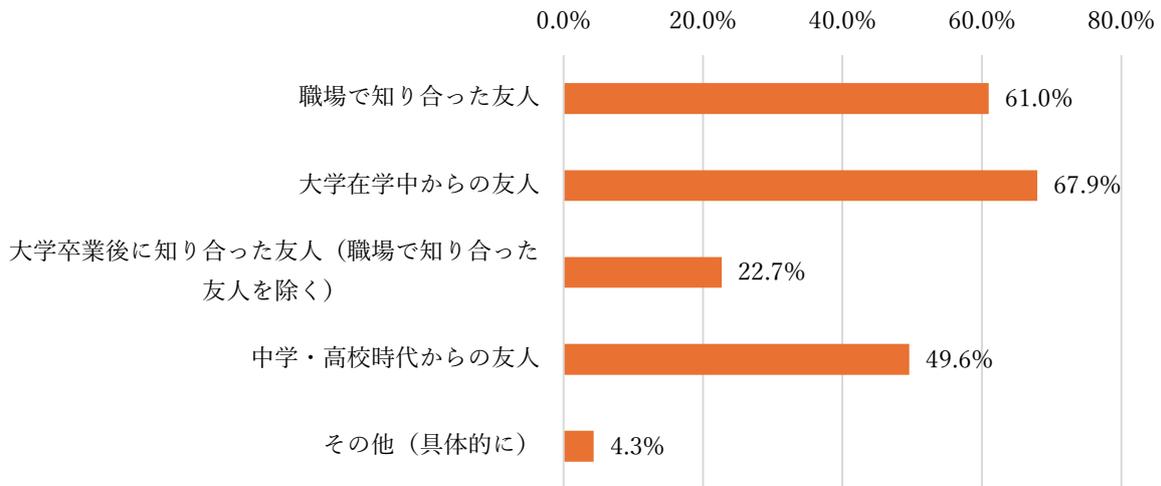
	経験しなかった	まったく役に立っていない	あまり役に立っていない	やや役に立っている	かなり役に立っている
専門科目	17	163	261	408	240
一般教育科目	13	158	323	455	140
ゼミ・研究室	71	164	266	358	231
卒業論文作成	178	177	272	293	169
部活動、サークル活動	193	160	209	335	191
学内のアルバイト	703	126	154	85	22
学外のアルバイト	140	148	258	380	162
留学	764	57	69	86	112
ボランティア	715	106	112	101	55
インターンシップ	621	124	163	117	62
大学以外での勉強	494	91	144	226	135
資格取得や教職、国家試験勉強	486	109	132	205	157

Q44. あなたの大学院時代の経験は、現在の仕事にどの程度役立っていますか。該当するものをお選びください。



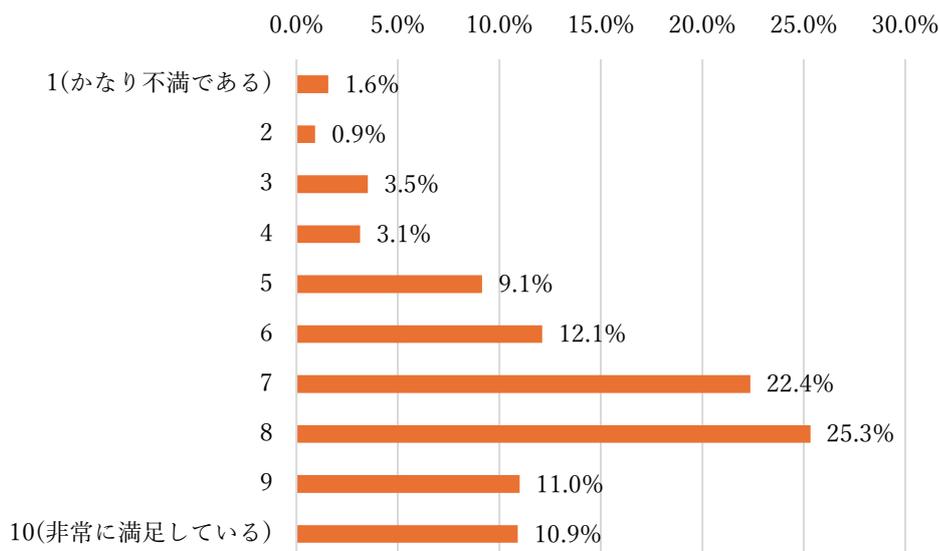
	経験しなかった	まったく役に立っていない	あまり役に立っていない	やや役に立っている	かなり役に立っている
専門科目	1	11	37	87	145
ゼミ・研究室	8	9	30	82	150
修士・博士論文作成	12	11	50	74	134
投稿論文の執筆	104	11	36	50	80
学会発表	92	13	33	54	89
留学	232	6	8	15	20
インターンシップ	180	14	27	39	21
資格取得や教職、国家試験勉強	144	17	30	45	45

Q45. (仕事上の難しい問題に直面したときに、個人的に相談できる) 友人は、どのような関係にある方ですか。あてはまるものすべてをお選びください。



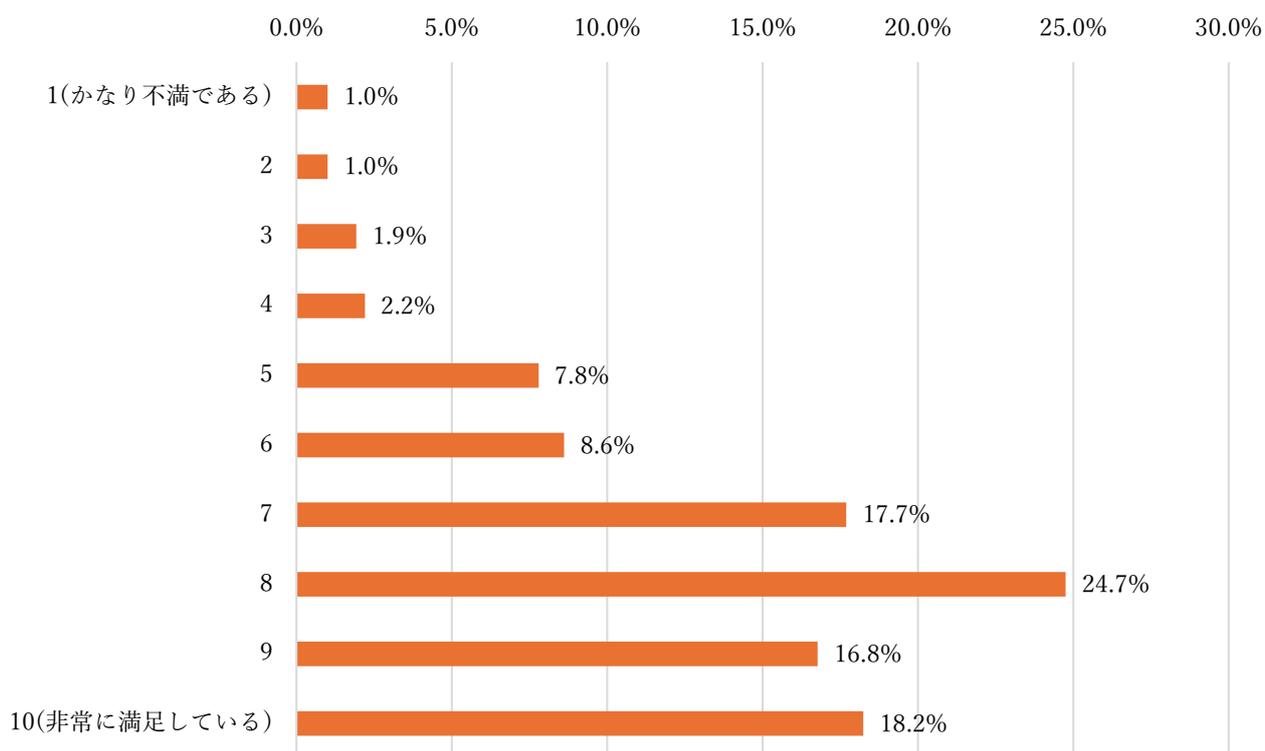
職場で知り合った友人	605
大学在学中からの友人	674
大学卒業後に知り合った友人 (職場で知り合った友人を除く)	225
中学・高校時代からの友人	492
その他 (具体的に)	43

Q46. あなたの現在の仕事の満足度はどの程度ですか。



1(かなり不満である)	17	6	131
2	10	7	242
3	38	8	274
4	34	9	119
5	99	10(非常に満足している)	118

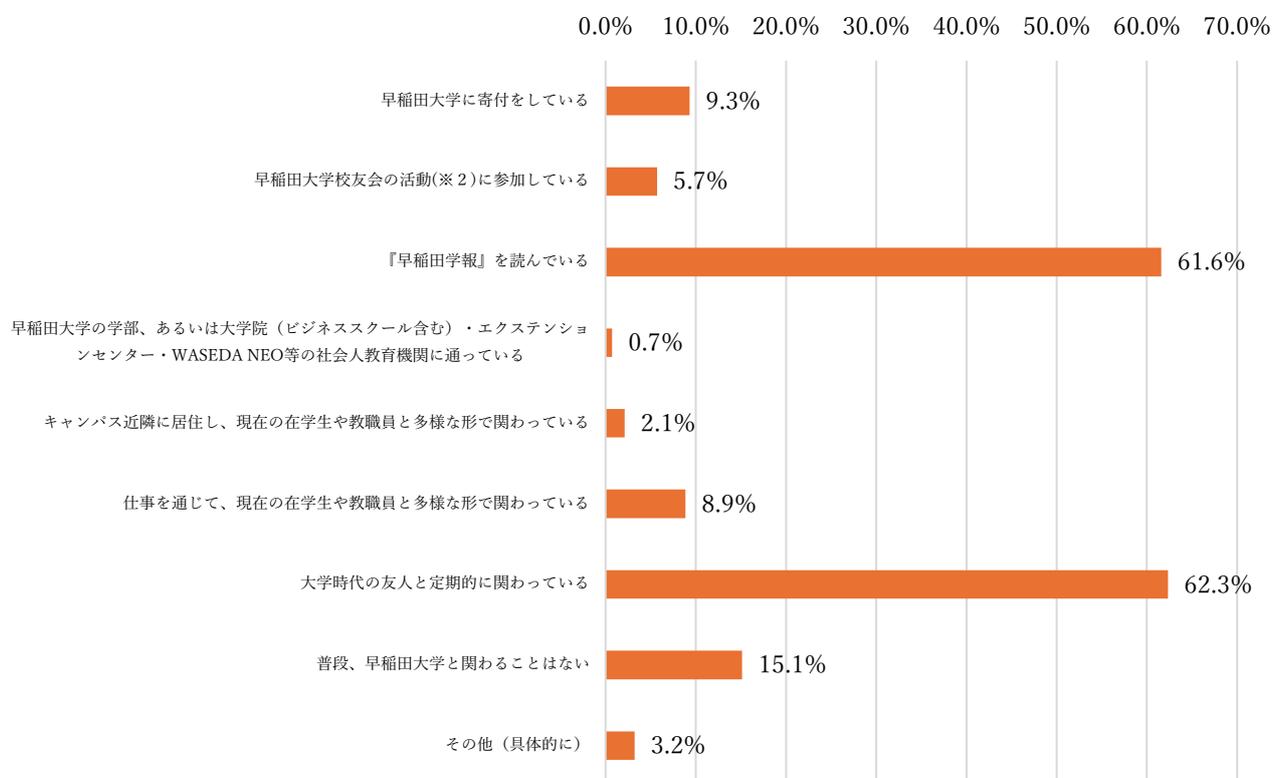
Q47. あなたの生活（仕事を除く）の満足度はどの程度ですか。



1(かなり不満である)	11	6	94
2	11	7	193
3	21	8	270
4	24	9	183
5	85	10(非常に満足している)	199

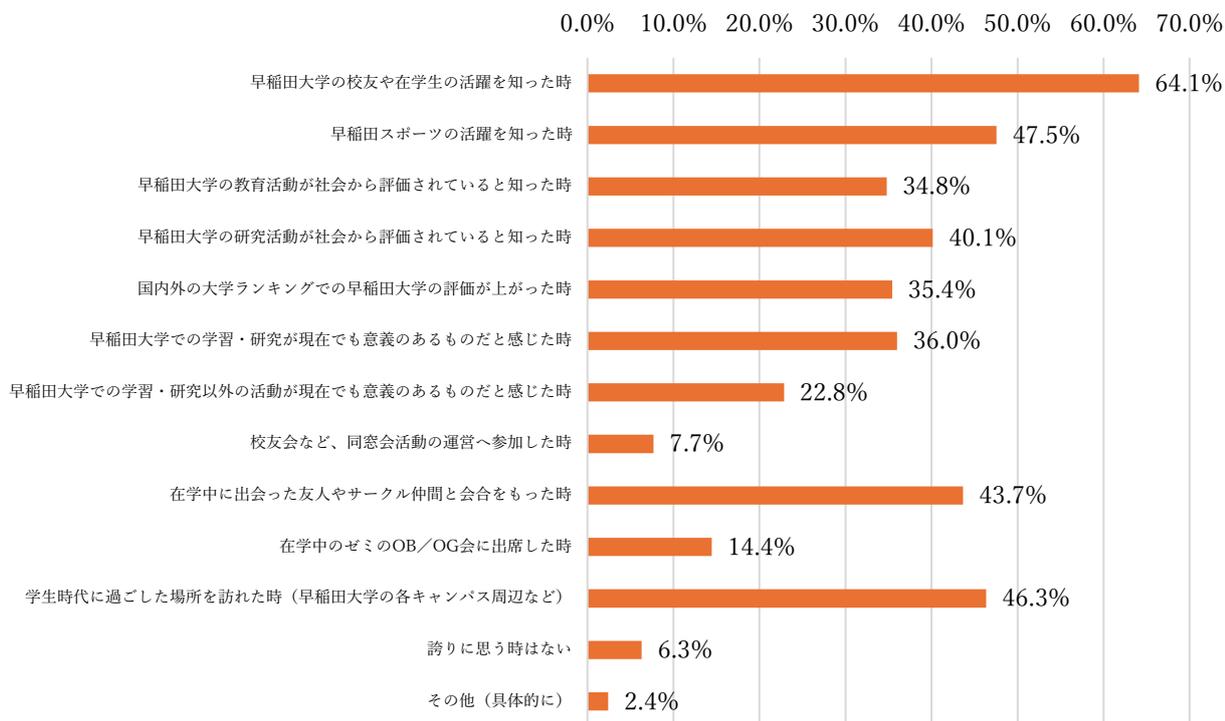
5. 校友関連

Q48. あなたは早稲田大学の校友(こうゆう)として、現在、早稲田大学とどのように関わっていますか。あてはまるものすべてを選んでください。



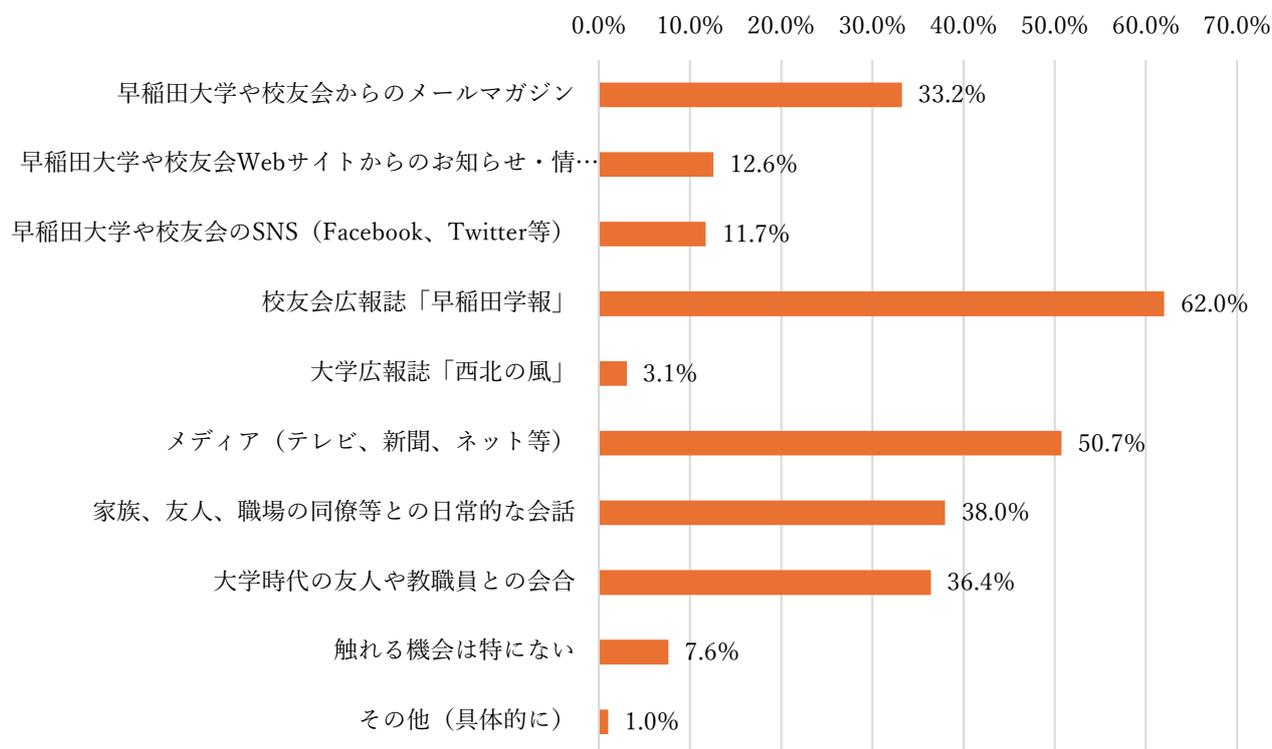
早稲田大学に寄付をしている	101	仕事を通じて、現在の在大学生や教職員と多様な形で関わっている	96
早稲田大学校友会の活動に参加している	62	大学時代の友人と定期的に関わっている	675
『早稲田学報』を読んでいる	667	普段、早稲田大学と関わることはない	164
早稲田大学の学部、あるいは大学院(ビジネススクール含む)・エクステンションセンター・WASEDA NEO等の社会人教育機関に通っている	8	その他(具体的に)	35
キャンパス近隣に居住し、現在の在大学生や教職員と多様な形で関わっている	23		

Q49. 早稲田大学の校友（卒業生）であることを誇りに思う時はどのような時ですか。あてはまるものすべてを選んでください。



早稲田大学の校友や在学生の活躍を知った時	693	校友会など、同窓会活動の運営へ参加した時	83
早稲田スポーツの活躍を知った時	514	在学中に出会った友人やサークル仲間と会合をもった時	472
早稲田大学の教育活動が社会から評価されていると知った時	376	在学中のゼミのOB/OG会に出席した時	156
早稲田大学の研究活動が社会から評価されていると知った時	434	学生時代に過ごした場所を訪れた時（早稲田大学の各キャンパス周辺など）	501
国内外の大学ランキングでの早稲田大学の評価が上がった時	383	誇りに思う時はない	68
早稲田大学での学習・研究が現在でも意義のあるものだと感じた時	389	その他（具体的に）	26
早稲田大学での学習・研究以外の活動が現在でも意義のあるものだと感じた時	247		

Q50. あなたが早稲田大学に関する情報に触れる機会・手段として、どのようなものがありますか。あてはまるものすべてを選んでください。



早稲田大学や校友会からのメールマガジン	357	メディア (テレビ、新聞、ネット等)	545
早稲田大学や校友会 Web サイトからのお知らせ・情報提供	135	家族、友人、職場の同僚等との日常的な会話	408
早稲田大学や校友会の SNS (Facebook、Twitter 等)	126	大学時代の友人や教職員との会合	391
校友会広報誌「早稲田学報」	666	触れる機会はない	82
大学広報誌「西北の風」	33	その他 (具体的に)	11

2024年度 早稲田大学卒業生調査 報告書

2025年8月

早稲田大学 大学総合研究センター

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 (7号館4F)